

2019年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

雑誌『満蒙』における文芸とその時代
——在満日本人の満洲観を視座にして

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻日本文化学専門
王 占一
2019年9月

目次

凡例	III
序章	1
1 研究の背景——満蒙観、在満日本人	1
2 研究の対象、目的	5
3 先行研究の空白と本論文の着眼点	12
4 概説——雑誌『満蒙』における文芸	15
5 本論文の構成	34
第一部 調査された「満洲」——「満洲国」成立前の歌謡、翻訳	37
第1章 「支那像」を求める	
——在満日本人による中国民謡の翻訳と創作	38
はじめに	38
1 在満日本人による中国民謡の研究	38
2 民謡の掲載と国民性の発見	41
3 民謡に現れた中国像	44
4 満洲新民謡の風景	48
5 新詞類民謡の抵抗	51
おわりに	54
第2章 翻訳手法から見た「支那趣味」	
——柴田天馬の和訳『聊齋志異』	56
はじめ	56
1 『志異』の翻訳史と柴田天馬	57
2 『満蒙』から見る天馬訳の時代性と国民性	60
3 天馬訳におけるルビと訳注の特徴	63
4 科挙がもたらした文弱と厭世	65
5 天馬の雑記	69
おわりに	71
第二部 宣伝された「満洲」——1930年代の小説、戯曲	73
第3章 「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦	
——近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」	74
はじめに	74
1 「満洲国」、スパイ戦、スパイ小説	75
2 時局と接するスパイ小説の創作背景	79

3	スパイの両面——英雄と犠牲者	82
	おわりに	89
第4章	「満洲国」の成立と「建国宣伝」	
	——大庭武年の戯曲創作	90
	はじめに	90
	1 現実主義——大庭の探偵小説と戯曲を繋げる	91
	2 個人的志向と「満洲国」の建国宣伝——満鉄入社前の戯曲創作	94
	3 完全な国策宣伝者となる——満鉄入社後の戯曲創作	101
	おわりに	104
第三部	問題視された「満洲」——1940年代の旅行記、同人雑記	105
第5章	北満洲の世相を見る	
	——田口稔の旅行記	106
	はじめに	106
	1 田口稔とその旅行記創作	106
	2 田口稔と雑誌『満蒙』	110
	3 『満蒙』と北満洲の水運	114
	4 田口稔と北満洲の船旅	116
	おわりに	122
第6章	文化建設と物質生活との間の乖離	
	——満蒙社と「同人雑記」	124
	はじめに	124
	1 「満蒙社」の成立	125
	2 満蒙社同人と同人雑記	128
	3 大連の文化生活への宣伝	132
	4 大連における文化生活と物質生活との間の乖離	135
	おわりに	139
結章	総括と今後の課題	141
	1 本論文のまとめ	141
	2 雑誌研究から見る「満洲」文学研究のゆくえ	144
	3 今後の課題	149
参考文献		151
初出一覧		160
謝辞		161

凡例

- ・「満洲」は日本でよく使用される歴史用語であるが、中国では「東北三省」あるいは「東三省」と称している。また、中国では「満洲国」の正当性を否定し、これを「偽満洲国」と呼称している。
- ・「支那」、「満人」、「鮮人」など現在では不適切と思われる表記について、歴史的に忠実に表記するため、そのまま用いる。
- ・引用する資料は、書籍、雑誌の題名は『 』で、各短編小説、論文、新聞記事の題名は「 」で表記する。
- ・本論文の引用文に関して、仮名遣いは旧仮名遣いを用い、漢字は原則新字体を用いる。
- ・引用する図表、あるいは筆者が作成した図表は、題目を〔 〕で示す。

序章

1 研究の背景——満蒙観、在満日本人

1.1 満蒙観とは何か

満蒙観とは簡単に言うと、在満日本人の「満蒙」への認識を指すものである。

まず、「満蒙」とは何かについて考察する必要がある。麻田雅文著の『満蒙——日露中の最前線』の中に、日本が呼んだ「満蒙」とは「現在の中国では遼寧、吉林、黒龍江の各省と内モンゴル自治区東部を指す」¹と述べられている。つまり、いわゆる「満蒙」とは、「満」と「蒙」の二つに分けられるのである。「満」は中国の東北部（遼寧、吉林、黒龍江三省）を指す。「蒙」は内モンゴル自治区東部を指す。

「満蒙」という用語は、強い時代性と政治性を持つと言われている。この点は「満蒙」という用語の使用から窺える。満蒙問題の研究者・何為民によると、日本においては、「満蒙」より「満洲」という用語の使用の方が早く、1809年に出版された『東鞆紀行』には「満洲」が地理名詞として初めて使われ、それに比べ「満蒙」という用語の使用は日清・日露戦争の頃からである。²「満蒙」という用語について、何為民はまた以下のように述べている。

日清・日露戦争後、日本は「満蒙」で大きな権益を獲得し、「南満洲」では南満洲鉄道株式会社を成立させ、更なる権益を求めた。それは、1917年の21ヶ条要求にまで進展し、大陸進出に踏み出した。「支那」・「満蒙」という呼称の使用によって中国を分裂させる正当性を証明しようとした点に近代日本におけるアジア認識の変化をみることができる。³

また、芳井研一の論述によると、日露戦争以降、特に1912年に第三回の日露協約が締結された後、内モンゴルの一部も日本の「特殊利益」の地域になったため、「満洲」は「満蒙」に置き換えられた。⁴つまり、20世紀の初めに単なる地名であった「満洲」

1 麻田雅文『満蒙——日露中の最前線』講談社、2014年8月、p. 3。

2 何為民「近代日本の「支那」・「満蒙」呼称」『現代社会文化研究』(39)新潟大学大学院現代社会文化研究科、2007年7月、p. 9。

3 何為民「近代日本の「支那」・「満蒙」呼称」『現代社会文化研究』(39)新潟大学大学院現代社会文化研究科、2007年7月、p. 15。

4 芳井研一「「満蒙」問題の現出と[トウ]索・索温沿線の社会変容」『環日本海経済年報』(14)新潟大学、2007年2月、p. 80。

は政治性（戦争による利益の争奪）が付けられ、さらにそこに内モンゴルが加わったため、政治性を持つ「満蒙」という用語が誕生したのである。

鄧毅、李少鵬がその論著『近代日本社会「満蒙観」研究』において、「満蒙史観」が日本の幕末時代に現れ、日本が「南満鉄道」の付属地の管轄権を獲得した後に「満蒙」を中国から分離して「大陸政策」を行おうとし、こうした時代背景のもとで白鳥庫吉、内藤湖南などに代表される日本の漢学界では「満蒙」学の研究が活発になり、その後、日本の田中義一元首は「満蒙」を日本の「生命線」だと主張し、この論調の下で「満州事変」が起り、それ故に「満蒙史観」は日本の中国侵略政策に一貫して日本の「満州」侵略の「学問的先導者」であったと指摘している。鄧毅らの論述によると、最初の「満蒙」学から「満蒙」という用語には政治性が付けられている。⁵

「満洲」、「満蒙」の使用にともない、「満洲観」、「満蒙観」という言葉も使われ始めた。管見の限り、「満洲観」が最も早く使われた書籍は、中野天心の著した『警醒録』⁶である。一方、1924年7月に高柳保太郎の著書『満蒙観』が満蒙文化協会によって出版されたことによって、「満蒙観」という言葉も現われた。

しかし、戦後の著作または研究論文の中には、「満洲観」、「満蒙観」の使用はほとんど見かけない。「満洲」、「満蒙」への認識が言及される時には、「満洲観」、「満蒙観」の代わりに「中国社会観」、「中国観」、「中国認識」などの用語が頻繁に使用されている。平野健一郎は、「満州事変前における在満日本人の動向——満州国性格形成の一要因」（『国際政治』第43号、1970年）で「中国社会観」という用語を使っている。『日本人の中国観』（勁草書房、1971年3月）の中で、著者の安藤彦太郎は「満洲」移民論を論じる際に「中国観」と「中国認識」という二つの用語を併用している。

「満洲観」、「満蒙観」から「中国観」、「中国認識」への用語使用の変更は、「満蒙」という中国の東北地方への呼称が強い時代性と政治性を示しているからだと考えられるであろう。この用語は日本人にとって、中国の東方地方を指す地理名詞であっただけではなく、日露戦争後の渡満⁷から日中戦争終戦後の引揚までの40年間の歴史と深く関わっている。

冒頭に置いた「満蒙観」という言葉の定義を考えるに当たって、「満蒙」だけではなく、「観」という用語について説明する必要がある。本論文では「観」を名詞ではなく、動詞として取り扱っている。動詞の「観る」については、辞書（『大辞林 第三版』、

5 鄭毅・李少鵬《近代日本社会“満蒙観”研究》吉林文史出版社、2018年4月、pp. 1-2。

6 中野天心『警醒録』文明堂、1906年8月、p. 97。

7 渡満とは日本人が日本の「内地」から中国の東北地方即ち「満洲」に渡ることを指す。

三省堂)を引いてみると、「目に感じて知る」、「調べる」、「経験する」というように解釈されている。日本人が「満蒙」への認識は、単に目に感じる過程だけではなく、大量の歴史資料を調べて多くの場所を旅して経験する過程でもある。この過程には在満日本人の「満蒙」をみる動きが時代の流れによって変わっていたのである。本論文で考察したのは在満日本人の「満蒙」に対する認識だけではなく、在満日本人の満蒙を「観」る動きでもある。日本人の「渡満」から日中戦争終戦までの40年間における在満日本人の満蒙をみる動きの変化を明らかにするのが本論文の意義である。

本論文で使用する用語である「在満日本人」とは、日露戦争頃から1945年の日本敗戦までに「満洲」で暮らしていた日本人を指す。在満日本人は、「満蒙」を「観」る主体である。高柳保太郎は著作『満蒙観』の「満洲と在留邦人」という一章で当時の在満日本人を次のように述べている。

然るに満洲在留邦人の頭にはどうも過去の戦役当時からの伝統で占領気分とか軍政気分とかいふものが残つては居ないかと思ふ。否それが各人の脳裡にあるのではなく、そうした気分を持つて居つた邦人に依つて営まれた事業や或は為された慣例が未だに満洲に残つて居るため斯く観ゆるかも知れないが、何れにしてもそんな気分や事業や慣例やは速に放棄駆逐して了はねばなるまいと思ふのである。⁸

高柳の指摘したように、在満日本人の「気分」、「事業」、「慣例」が孕んでいた固着的な考え方(いわゆる「観」)は、彼らの「満蒙」をみる視線を左右していたに違いない。この「観」が如何に、どこに示されているのか、を解明する前に、日本人の渡満及びその在満の文芸活動を述べておかなければならない。

1.2 在満日本人の文芸活動

日本人の渡満の歴史は日清戦争の頃に遡ることができる。このとき、日清戦争に従軍した日本兵が「満洲」に現われた。しかし、戦争の終結とともにこれらの日本人(日本兵)は日本へ引き揚げた。多くの日本人が「満洲」へ移住したのは日露戦争の頃からである。塚瀬進は『満洲の日本人』で次のように述べている。

一九〇四年二月の日露戦争後、満洲はロシアと日本軍が交戦する戦場となった。砲弾の飛び交う満洲に、軍人以外の日本人が立ち入ることは禁止されていた。だが、

8 高柳保太郎『満蒙観』満蒙文化協会、1924年8月、pp.78-79。

戦局の推移にともない、民間人の渡航が漸次解禁された。最初に民間人の渡航が許可されたのは営口と安東であった。渡航解禁後、以前の満洲にはいなかったタイプの日本人が押し寄せてきた。営口領事は八月二四日付の報告で「ただ何かの職業を得」ように考える日本人が「平均一日十人より二十人」やって来て、占領地で手早くできる「軍人の需要に応じる雑貨食料品」の販売が始まったと述べている。⁹

また、塚瀬の研究によると、その後、大連が1905年1月に解禁され、9月に奉天が日本の民間人に開放され、日本人の渡満に拍車をかけたのであり、1906年に「満鉄」が設立され、満鉄社員の渡満の時期も迎え、1910年代において「満鉄」の日本人社員数は一万から二万人まで増加し、1914年に第一次世界大戦が勃発した後、「二十一カ条の要求」と「南満洲及び東部蒙古に関する条約」の締結によって日本人が南満洲地方で「合法的に」居住できたために在満日本人数はまた増加していった。¹⁰

以下は、1915年から1932年までの在満日本人の人口統計表¹¹である。

年次	1915	1917	1919	1921	1923
人口	101586	120063	147493	165914	175305
年次	1925	1927	1929	1930	1932
人口	187951	199080	216128	228736	268982

[表1] 1915年から1932年までの在満日本人の人口統計表

この統計表から見れば、雑誌『満蒙』が創刊された1920年頃には、在満日本人の人数は、十六万に上ったのである。

「満洲」では、在満日本人が増加すると共にその文芸活動も展開されていった。大内隆雄は『満洲文学二十年』の中で、1905年から1931年までの在満日本人の文芸活動を三つの時期に分けている。すなわち、1905年から1920年までの第一期、1921年から1930年までの第二期、1930年から1931年までの第三期である。¹²

大内の研究によると、1910年代においては、1905年7月に中島真雄によって創刊された『満洲日報』は在満日本人が「満洲」で初めて発行した日本語出版物であり、その

9 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年9月、p.13。

10 塚瀬同書、pp.14-46。

11 塚瀬同書、p.46。

12 大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社、1944年10月、p.18。

後、1909年に俳句誌の『アカシア』、1910年に短歌会の「いさを会」、1912年に川柳誌の『漣』などの雑誌や文芸団体が作られ、1920年代においては、在満日本人の文芸活動は1910年代の成果を継承した上で大きな発展を実現し、1920年に俳句誌『黒煉瓦』、短歌誌『夕陽』、川柳誌『娘々廟』、1923年に川柳誌『白豚冢』、1924年詩誌『亜』、1928年に短歌誌『合萌』、1929年に短歌誌『満洲短歌』、詩誌『戎克』などの雑誌が続々に発行されたのである。¹³つまり、1910、20年代の在満日本人の文芸活動は、主に俳句、短歌、漢詩、川柳などの日本の伝統的な文芸が行われていたのである。

1930年代に入ると、特に「満洲事変」勃発後に、在満日本人の文芸活動は新しい段階に突き進んだ。この時期においては、小説と戯曲脚本の創作が在満日本人の「満洲国建国」への関心を示している。この点は、雑誌『満蒙』で掲載された大庭武年の小説、戯曲から読み取れる。1930年以降、「満洲」の雑誌が続々と刊行され、これらの雑誌に関する研究成果も蓄積されているが、ここでは詳述しない。

現在、中国の東北地方に所蔵されている在満日本人が発行した雑誌は数百種類があり、それらの雑誌は詩歌・小説・随筆・戯曲などを載せ、当時の「満洲」の社会、及び在満日本人の満洲観を表しているのである。

2 研究の対象、目的

2.1 なぜ雑誌『満蒙』なのか——『満蒙』とその「半官半民」の性質

本論文は、雑誌『満蒙』（前身誌の『満蒙之文化』を含む）を研究対象とするものである。『満蒙之文化』は1920年9月に満蒙文化協会から発刊され、発行の第四年（1923年4月）に『満蒙』と改題され、終刊の1943年10月まで全281号が刊行されている。四半世紀にわたって発刊され続けた本誌は、在満日本人によって創刊された「満洲」での最大の、「満蒙」に関する総合月刊誌であるといえよう。

本誌の最も大きな性質は「半官半民」であることである。これは、本誌と「満洲」で創刊されたその他の文芸誌との差異である。「半官」とは、「満鉄」との関わりを意味する。この点は、その発行機関の満蒙文化協会の発足から窺える。

1919年4月に、満鉄総裁の後藤新平の官邸で満蒙文化協会の創立準備会議が行われた。当時、関東庁事務総長の杉山四五郎、満鉄副社長の中西清一、満鉄理事の大蔵公望、中川健蔵、満鉄調査課長の石川鉄雄、商工会議所会頭の相生由太郎、法学博士の松本丞治らが会議に出席した。同年の6月に、石川鉄雄、大蔵公望らが、石川の執筆した草案

¹³ 大内同書、pp. 18-20。

に基づいて満蒙文化協会の創立趣意書の案を決定した。その後、「満鉄」の絶対なる援助によって1920年7月に満蒙文化協会は正式に設立された。従って、満蒙文化協会の設立は「満鉄」と深く関わっていたのである。

満蒙文化協会の「半官」という性質は、『満蒙』の掲載内容に影響を与えている。『満蒙』の掲載内容を検討する前に、まず本協会の創立趣意を見ていきたい。創刊号で掲載された「満蒙文化協会設立趣意書」には「吾人が満蒙の開発経営を為すに当つて念とする所も、亦如上の意味に於て、満蒙文化発展の終局の理想を実現するに在る¹⁴」と記されている。このことから、満蒙文化協会は、「満蒙文化発展」を目指していたといえよう。

発行機関の満蒙文化協会と「満鉄」との深い関係から考えてみると、おそらく当時「満鉄」の社員が雑誌『満蒙』の読者の大きな割合を占めていた。「満鉄」成立当初、その社員は1907年に総数13217人だったが、1919年に4万人を、1936年に10万人を、1940年に20万人を超えた¹⁵のである。雑誌『満蒙』の具体的な刊行部数が分からないものの、満鉄社員の大きな読者群からは当時相当の刊行量があると考えられるのであろう。

それに、誌面を見れば掲載内容は、政治（政策、外交、軍事等）、経済（農業、林業、工業、商業等）、文化（歴史、民俗、考古等）といった各方面に及んでいる。「満鉄」の各部門による調査成果も本誌で載せられた。創刊号には、満鉄勸業課の「満鉄の勸業的施設」という文章が見られる。

誌面に氾濫する政治、経済の内容から言うと、当初の「満蒙文化発展」という満蒙文化協会の目標からはずれている。そのために、迎えた四年目に題名から「文化」という掲載内容を特定する性質がある用語を取り外して「満蒙」と改題したのではないかと考えられる。改題後の『満蒙』は相変わらず「満鉄」の各部門の調査成果を掲載しており、その「半官」の性質は終刊まで保たれている。

一方、「半民」として性質は、本誌の編集者、投稿者と読者から窺える。まず、編集者から『満蒙』を時期区分すると、平林芳勝の編集時期、中溝新一の編集時期、武田豊市の編集時期、「満蒙社」の編集時期に分けることができる。

平林芳勝は、初号（1920年9月）から第53号（1924年12月）までの本誌の編集を務めていた。彼に関しては、名前が「満洲文化協会会員名簿」に載せられている以外には何の情報も見つからず、『満蒙』には彼の文章もない。しかし、本誌で掲載された満鉄関係の顧問と理事の名簿には彼の名前が入っていないため、「満鉄」と深い関係を持

14 「満蒙文化協会設立趣意書」『満蒙之文化』(1) 満蒙文化協会、1920年9月、p. 11。

15 伊藤一彦「満鉄労働者と労務体制」『満鉄労働史の研究』（松村高夫〔ほか〕編著）日本経済評論社、2002年4月、p. 126。

った人ではなかったと推測できる。

中溝新一は、第54号(1925年1月)から168号(1934年4月)までの編集を担当していた。彼に関しては多少の情報が見つかる。1891年に東京市に生まれ、東京において婦人雑誌、児童雑誌で活躍し、『豚ちやんの記録』、『日本童話選集』などの童話集及び子供評論集を出版した。後に大連に渡って、大連新聞学芸部長、大陸社囑託、中日文化協会編集部主事などの職務を担っていた。¹⁶

中溝は、『満蒙』を編集するとともに文芸創作に従事し、詩歌や旅行記や研究文などを『満蒙』に載せていた。それに、彼は「満洲」にいる間に多くの著作を編集して、その編集の才能を見せた。1930年から1940年までの十年間に、彼は、『大和尚山の研究』(1930年9月)、『趣味の満洲』(1931年1月)、『満蒙講座』(1933年5月)、『熱河省事情』(1933年3月)、『満洲童話作品集』(1940年1月)などの書籍を編集していた。筆者の調査によれば、「満洲」で文芸に活躍していた中溝は「満鉄」とはほとんど関係がない。

武田豊市は、第169号(1934年5月)から第228号(1939年4月)の編集を担当していた。彼に関しては、得られる情報が非常に少なく、大連で住んでいた彼が『満蒙』を編集する以外では、1934年から1937年にかけて雑誌『満洲学報』を編集していたことが分かる程度である。

武田は、文芸面に非常に興味を持っていたようである。彼の編集した最初の号には、「本協会会員各位は機関雑誌「満蒙」を会員各自のものとして十分に御利用ありたく俳句、和歌、詩文、会員消息、随筆、感想文、時事論策其他、何よりと長短に拘らず御投稿を歓迎いたします」¹⁷と記されている。武田の編集によって、『満蒙』で随筆の掲載が開始した。それに、武田は満鉄の調査成果や政治、経済の文章に興味がなかったようである。このことから、武田も「民間」の人であったのではないかと推測する。

1939年以降は、「満蒙社」の成立にともない、「満蒙社」同人が本誌を編集し始めたのである。編集者はそれぞれ違う分野に属している。早川正雄のような満鉄関係の人もいれば、柴田天馬(一郎)のような「民間」の人もいる。「満蒙社」の構成は「半官半民」であるといえよう。

「半民」の性質は、投稿者からも窺える。「官」からの投稿は主に満鉄各部門からの調査成果の掲載を指すが、「官」に相対する「民」は満鉄関係以外の投稿を指す。それには満蒙・中日・満洲文化協会の会員の投稿や「満蒙社」設立後の満蒙社同人らの投稿がある一方で、大衆の投稿も見受けられる。第33号では、「創作及劇募集」の広告が

16 芳賀登[ほか]『日本人物情報大系12(満洲篇)』皓星社、1999年10月、p.137。

17 武田豊市「編集後記」『満蒙』(169)満洲文化協会、1934年5月、p.197。

掲載されている。この広告は次のように記している。

職業芸術家の作品ではない、真個の自分の生活から目覚めた創作が欲しい。邦人が満蒙の開発に着手してから最早二十年だ。満蒙を舞台とした新人の生活が満洲独特の色彩を有する感想芸術となつて現はれても遅くはないと信ずる。本協会は満洲文芸振興のため左（以下を指す、筆者注）の規定に依り創作並劇を募集する。

- 一、作品の種類 創意は凡て満蒙を舞台とし創作は読切短編、劇脚本は一幕物（三場以下）とす。
- 二、原稿 二十三字詰七百五十行以上一千行以内とす。
- 三、期限 随時応募差支へなし。
- 四、謝礼 入選一等百円、二等五十円。
- 五、審査 本協会編集会議に於て決す。（審査洩れの投稿は之れを返却す）

18

また、本誌の読者からも、その「半民」の性質が見られる。初号に掲載された「出版物配布及受入」に次のように記している。

本協会は編集部を置き毎月会報発行の外、調査部の出版物及び満鉄会社調査課、勸業課、其他同社内の各機関に依り調査研究の上編纂されたる関係書籍は全部本協会から間断なく出版し、実費を以て一般希望者に配布し、企業貿易其他満蒙に於て事業を為し、或は満蒙の実状を研究せんとするものの資料たらしめんとして、（略）希望者は本協会出版部（振替口座大連二八五〇番）へ申込まれたい、尚本会は個人其他に於て有益にして一般に知らしむる必要なる著書を為したるものある時は、何時にても公表方を引受け出版すべき筈なれば、此れ等希望者も本協会を利用する事が最も便利であると信ずる。¹⁹

この記述からは雑誌『満蒙』が「一般希望者」に配布していたことが分かる。それに、本誌は「満洲」だけではなく、日本の「内地」でも販売されていた。これは、改題後の最初の号（第33号）に記した「本誌大売捌所」から窺える。大連市の大阪屋書店以外では、日本においては、東京市の至誠堂書店、大阪市の盛文館書店、福岡市の菊竹書店でも販売されている。当時の販売の定価は、一冊で50銭、六冊で3円、十二冊で6円

18 「創作及劇募集」『満蒙』(33) 満蒙文化協会、1923年4月、p.145。

19 「出版物配布及受入」『満蒙之文化』(1) 満蒙文化協会、1920年9月、p.14。

である。²⁰

以上からは、本誌の編集者、投稿者、読者が官民両界に及んでいたことが分かる。本論文では、文芸誌とは異なる『満蒙』のこの「半官半民」の性質から出発し、多分野からの投稿者（在満日本人）に焦点を絞り、在満日本人の文芸活動を検討するつもりである。

2.2 研究の方法と目的

2.2.1 『満蒙』の研究手法

まず、雑誌『満蒙』の研究を満洲文学研究という枠に入れておきたい。満洲文学研究史は、日本においては1980年代まで遡ることができ、岡田英樹著の『「満洲国」における中国文学の実態研究』（1987年3月）、川村湊著の『異郷の昭和文学——「満洲」と近代日本』（1990年10月）が早期の満洲文学研究の著作である。満洲文学研究の進展にともない、「満洲」時代に在満日本人の発行した日本語雑誌も続々復刻されてきた。あるいは、満洲文学研究が始まる前から雑誌の復刻はすでに始まっていたとも言える。

筆者の調査によると、現在、1978年に『北京満鉄月報』、1979年から1981年までに『満洲評論』、1987年に『調査時報』、1992年に『書香』、1993年に『収書月報』、『北窓』、『満洲文芸年鑑』、1994年から1995年までに『協和運動』、1998年に『拓け満蒙』、1999年から2000年までに『満洲年鑑』、2002年に『満洲浪漫』、2007年から2008年までに『芸文』、といったように「満洲」で発行された主要な日本語雑誌が復刻されていた。

このような背景の下で、1993年12月に不二出版社は『満蒙之文化』を復刻し始め、2003年まで十年がかりで『満蒙』及びその前身『満蒙之文化』を全279号、121巻を復刻した。『満蒙之文化』は1993年12月から1994年5月までに全31号7巻が復刻され、『満蒙』は1994年8月から2003年8月までに全248号、114巻が復刻された。第30号は発行されたと推定されるが、現在未見である。第54号の『満蒙』（1925年1月に発行されたと推定）は『満蒙年鑑』（1925年版）であるが、別途復刻版『満蒙年鑑』の一部として収録されたため欠号になる。

1935年9月に満洲文化協会は満蒙別冊附録『満蒙総目録』を発行した。この総目録は2003年に不二出版から刊行された「『満蒙』総目次・執筆者索引」にも転載された。『満蒙』総目録（1号—180号）は「分類目録」と「筆者名鑑」の二つに分けられてい

20 「本誌大売捌所」『満蒙』（33）満蒙文化協会、1923年4月、p.146。

る。「分類目録」は、40種類以上に分けている。一方、「筆者名鑑」は、大体五十音順によって編集されていた。不二出版が出版した「『満蒙』総目次・執筆者索引」を合わせて考察すると、『満蒙』の終刊までの24年間に2000人近くの投稿者が寄稿したことが知れる。それに、本誌で10篇以上の文章を発表した登場の筆者は100人を超えることも分かった。

以上の統計したデータからもう一つ分かるのは、掲載内容の多様性である。1935年9月に掲載された「満蒙総目録」の分類目録は、本誌の掲載内容を総論、政治、外交、軍事、経済、交通、関税、法律、農業、畜産、林業、水産業、鉱業、工業、商業、移植民、労働、教育、学術、宗教、医薬、社会施設、風俗習慣、研究、調査、科学、地理、紀行、歴史、伝記、伝説、文芸、画、口絵写真、新著、雑、表紙というように詳しく分けている。その中の文芸面はより詳しく、旅行記、詩歌（詩歌には民謡、漢詩、短詩、短歌、俳句、川柳などが含まれている）、翻訳文学、小説、戯曲脚本、随筆、同人雑記に分類されている。

もう一つ分かるのは、『満蒙』に寄稿した歴大な投稿者群である。『満蒙』には多分野の人が登場していた。その中で文芸の方面で登場した人物は、青柳篤恒、佐藤四郎、上田恭輔、大塚令三、井村薫雄、橘樸、大内隆雄、竹内正一、青木実、筒井俊一、田口稔、北村謙次郎、秋原勝二、藤山一雄、柴田天馬、工清定、金丸精哉、古川賢一郎、古川哲次郎、三宅豊子、加藤郁哉、大野斯文、伊藤清造などが挙げられる。

以上からまとめて見ると、『満蒙』を研究する最も大きな困難は内容と投稿者の歴大さである。それ故に研究の切り口を探しにくい。本誌を研究する前に、文芸誌の研究方法ではなく、総合誌に向けた研究方法を探究する必要がある。

研究の困難さがある一方で、『満蒙』は「満洲国」時代の政治・経済・文化を研究する際の第一級の基本資料になると考えられる。在満日本人が「満洲」に渡り、満洲の農村から都市までを見て回り、「満洲」の政治と経済だけではなく特有の文化や民俗等にも注目し、社会現状を反映した旅行記、詩歌、小説、戯曲、随筆等の文芸作品を多く発表していた。これらの作品は「満洲」の社会と日本の帝国主義を映す鏡のような存在だと考えられるため、研究する価値があると思われる。

研究の困難さを考慮したうえで、本論文では雑誌『満蒙』に掲載されたすべての文芸作品を逐一考察する研究方法を使わず、次の方法を採用する。まず、雑誌『満蒙』の文芸面の動向と特徴を示すために発刊から終刊までの本誌の様相を概説する。それと共に本誌に掲載された文芸の内容を本誌における異なるジャンルの登場の前後順によって詳しく分類し、異なった時代の文芸の動向を把握する。この概説は序章に置かれる。次に、異なった時代の文芸面の動向と特徴を詳しく説明するために、その動向を示す代表

的な作品を幾つか取り上げて分析する。本論文の第1章から第6章までは本誌の文芸面の動向を説明する代表的な作品に対する解説である。

2.2.2 研究の目的——在満日本人の文芸創作の動向を把握する

これまでの満洲文学研究の成果の中には、戦前戦時中の在満日本人の文芸創作を概観する研究はまだ現われていない。現在の研究の重心はやはり「満洲国」時代の文学研究に置かれている。日露戦争頃から「満洲国」成立前の十数年間の在満日本人の文芸活動はまだ系統的に研究されていない。「満洲国」成立後の1930、40年代の満洲文学が多くの研究者に研究されているのに対して、1910、20年代の満洲文学、あるいは在満日本人の文芸活動は重要視されていないのである。

前述のように、在満日本人の文芸活動は日露戦争の後に始まったのである。当時の新聞や雑誌などの出版物は、在満日本人の文芸活動を考察する直接の資料になる。しかし、新聞や雑誌の多くが現在まで残されていないため、全面的かつ系統的な研究は不可能であった。1980年代から開始された「満洲」の日本語雑誌の復刻をきっかけに、「満洲」の多くの文芸誌は系統的に整理されていった。そのために満洲文学研究は可能になったのである。

筆者の知る限りでは、戦後に復刻された「満洲」の文芸誌の大部分は1930年代に発行されたものである。その中には有名な『作文』（1932年）、『満洲浪漫』（1938年）、『芸文』（1942年）などがある。文芸誌の復刻によって、「満洲国」時代の雑誌についての研究が多く行われている。それに、1930年代の在満日本人の文芸活動及び文学作品に関する研究成果が増えてきた。

しかし、1920年代の雑誌や文芸誌は散逸のため多くが復刻されていないので、文芸誌から出発して1920年代の在満日本人の文芸活動を研究するのは難しいと思われる。つまり、文芸誌を通して、日露戦争から日中戦争終戦までの在満日本人の文芸創作史を概観するのは、行き詰まってしまったように考えられるのである。別の方法として、筆者は雑誌『満蒙』を発見した。1920年から1943年まで発行され続けた本誌は、文芸誌ではないが、発行の当初から文芸の誌面が掲載されている。それに、その発行期間は「満洲国」の時代だけでなくその前の1920年代を含む。『満蒙』は、1920年から1943年までの時期の在満日本人の文芸活動及びその動向を連続的に示しているのである。

前述のように、1920年以前の在満日本人の文芸活動は、主として俳句、短歌、漢詩、川柳などの創作である。実は、1920年代に入っても大内の言った「封建イデオロギーの所産」の詩歌の創作は続いていた。この点は、1920年代の誌面から窺える。

よって、総合誌の『満蒙』からは、1910年代の在満日本人の文芸活動の様子をも多

少窺えるのである。以上を踏まえれば、『満蒙』からは日露戦争から日中戦争終戦までの在満日本人の文芸創作の動向を論じる可能性が見えるであろう。これは、筆者が『満蒙』を選ぶ理由でもある。

3 先行研究の空白と本論文の着眼点

3.1 先行研究とその空白

満洲文学研究は、日本や中国だけではなく、全世界の多くの研究者によって進められている。その過程においては、文学作品だけではなく当時の「満洲」で発行された新聞と雑誌も重要な研究対象として捉えられている。在満日本人によって発刊された雑誌は、主に日本語雑誌（日本人向け）と中国語雑誌（満人向け）に分けられる。

中国においては、日本語雑誌も中国語雑誌も研究がなされ、多くの研究成果が世に出た。これらの成果は、おおまかに言えば二種類に分けられる。一つは年代を軸にして行われた総合的な研究で、もう一つは個別の雑誌を考察する特性研究である。

総合的な研究は、時期区分をすることで「満蒙」の各雑誌の時代的な特徴を検討するものである。華東師範大学の劉曉麗の博士論文「1939—1945年東北地区文学期刊研究」（2005年）及び「偽満洲国時期文学雑誌新考」（『中国現代文学研究叢刊』、2005年）はその代表的な研究である。劉の論では、『新満洲』、『麒麟』、『青年文化』、『芸文誌』などの中国語雑誌が研究対象として研究されると共に、主要な満系作家の文芸活動も概説されている。その中では、在満日本人の創作にも多少触れられている。

特性研究は、一つの雑誌を研究対象にして雑誌の編集、発行、掲載など、雑誌の全体の容貌を把握するものである。その中では、雑誌本体だけでなく、編集者、投稿者、読者及び発行前後の文芸運動などの多くの方面と絡めながら論じられる。例として、東北師範大学の祝力新の博士論文「『満洲評論』とその時代」（2012年）が挙げられる。祝の論文は、日本語雑誌『満洲評論』を研究対象にして、創刊背景から、主な編集者、投稿者及び各欄の詳細な記事まで詳しく考察し、さらに『満洲評論』がもたらした社会的な価値も論じた。

無論、以上で言及した両研究者の論は、中国での満洲文学（中国方面では淪陷区文学と呼ぶ）研究の氷山の一角である。これまでの研究成果は、実に多様である。

日本においても、中国と同じく多くの研究成果の蓄積がある。それに、日本語雑誌の整理と復刻も進められている。それによって雑誌研究のブームが到来した。「満洲」の

二大文芸誌の一つの『満洲浪漫』²¹（1938年）が2002年にゆまに書房により復刻されたことによって、同年、西田勝、西原和海、岡田秀樹らの「『満洲浪漫』をどう評価するか」という座談会が開催された。それに、翌年、呂元明、鈴木貞美、劉建輝の共著『『満洲浪漫』研究』がゆまに書房により出版された。その後、研究の進展によって、いっそう細分化されていった。その成果の中では総合研究大学院大学の韓玲玲の論文「雑誌『満洲浪漫』における北村謙次郎の文学理念」が挙げられる。雑誌の復刻により満洲文学研究の空間が拡大したことによって、研究の空白が見えてくる。

2003年、雑誌『満蒙』は、不二出版によって全巻復刻された。復刻の際、「近年の研究は、文化史、文学史などの広い範囲にわたって、旧植民地・満州を見直す動きにあり、その基本的資料のひとつとして、『満蒙』の復刻が要望されてきた」²²と「復刻の辞」で記され、『満蒙』の価値を提唱している。

日本の評論家、社会思想研究家、社会運動家の石堂清倫は、「復刻によって初めてロシア革命以降の満蒙にたいする日本人の知見がどんなものであったかを知ることができる」²³と述べ、『満蒙』に表わされる在満日本人の満蒙観を指摘している。

また、日本の文芸評論家の川村湊は、「日本人が「満洲」をどう考え、何を意図し、どのように実践しようとしたのか、『満蒙之文化』から『満蒙』へと変わり、大正と昭和の両時代に刊行され続けた文化雑誌の歴史を追うことは、「満州」という日本のモチーフそのものを問うことだ」²⁴と述べ、『満蒙』研究の視点を提示している。

研究する価値があるとは指摘されてきたものの、今日まで、『満蒙』に関する系統的な研究は、未だ現れていない。内容の多様さと掲載量の膨大さを考えると、本誌の研究を着手する際には、一つの着眼点が必要である。

3.2 本論文の着眼点——文芸、満蒙観・満洲観

『満蒙』で掲載された文芸面は、本論文の着眼点である。それに、冒頭で解説した在満日本人の満蒙観・満洲観は、本論の視座である。

3.2.1 なぜ、総合誌の『満蒙』から文芸を見るか

まず、本論文の研究対象は文芸であるという点について述べる。なぜ文芸誌ではなく

21 『満洲浪漫』と『作文』は「満洲国」の両大文芸誌である。両陣地に集まった作家群は「新京のイデオロギー」と「大連のイデオロギー」をそれぞれ代表した。

22 <http://www.fujishuppan.co.jp/wordpress/wp-content/uploads/2011/11/manmo.pdf> (不二出版による復刻版『満蒙』のカタログに寄せられた推薦文である。2014年10月30日)

23 注22に同じ。

24 注22に同じ。

総合誌から文芸を見るかという点、二つの理由がある。一つは、総合誌には文芸誌のような独自の傾向がないためである。もう一つは、総合誌としての『満蒙』は長い発行期間を持つためである。

「文芸誌の独自の傾向」とは、雑誌の編集者、あるいは同人による編集によって誌面に現われる単一の傾向性である。例を挙げると、1938年10月に北村謙次郎らに創刊され、同人に北村以外に飯田秀世、今井一郎、木崎龍、坪井與、長谷川濬、松本光庸、矢原礼三郎、横田文子などがいる文芸誌『満洲浪漫』の理論は、「大きなロマン」、「大陸のロマン」、「壮大なロマン」という独特な体系を確立した²⁵のであり、「ロマン」は雑誌『満洲浪漫』の独自の傾向であるといえよう。

総合誌の『満蒙』には、文芸誌と違ってこのような傾向性が見えない。それどころか、文芸だけではなくて多分野の文章と作品が収められているのである。文芸誌としての独自性が欠けている反面、多くの執筆層を網羅している。『満蒙』では、満鉄の職員から一般の民衆まで執筆者が存在する。これは、在満日本人の満蒙観・満洲観を見ようとする本論文に最も幅広い考察対象（在満日本人）を提供している。従って、総合誌の『満蒙』からは、在満日本人のより広い範囲を狙って文芸をみることができる。

また、ある時期の文芸の動向を考察する際には、総合誌は文芸誌よりメリットがある。在満日本人の満蒙観・満洲観を全体に見るには、長期間、そして持続的に発行された雑誌を探さなければならない。「満洲」で発行された文芸誌の多くは発行期間が短かったり、あるいは時局の変化によって発行の断層（停刊、廃刊）が存在したりする。この点から言うと、1920年から1943年まで発行され続けた『満蒙』は、最も研究対象として相応しいと思われる。総合誌の『満蒙』からは、1920年以降の在満日本人の文芸活動及びその動向をみることができるのである。

3.2.2 なぜ、満蒙観・満洲観を視座にするか

満蒙観・満洲観は、本論文の視座である。筆者の知っている限りでは、満洲観・満洲観に関する研究は、歴史学や社会学の角度から行われるものは多いが、文芸の角度から行われるものは少ない。また、「満洲」に着眼するものはあるが「蒙」に言及するものはほとんどない。そのため、研究する余地があるのである。

これまでの研究結果を見てみると、日本では文学から在満日本人の満蒙観・満洲観を研究するものは、主に「満系文学」「日系文学」二つの種類がある。「満系文学」の方面では、岡田英樹著の『文学にみる「満洲国」の位相』（2000年）が挙げられ、「日

25 呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修『『満洲浪漫』研究』ゆまに書房、2003年1月、p.67。

系文学」の方面では、葉山英之著の『「満洲文学論」断章』（2011年）が挙げられる。この2冊を読んでもみると、満蒙観・満洲観に関する研究現状は次の二点にまとめられる。

第一に、満蒙観・満洲観と関わる満洲文学研究には、「日系文学」「満系文学」「白系露人文学」「鮮系文学」という方向で行われたものが多いが、戦前、戦時、戦後という方向で行われたものは多くないということである。一つの作品から在満日本人の満洲観を研究するものは見られるが、戦前戦時期間にわたる在満日本人の満蒙観・満洲観の変化を検討するものは未だ現われていない。「満洲国」成立後の在満日本人の満洲観は研究されていたが、それ以前の1920年代の満蒙観・満洲観は未だ注目されていない。

第二に、「満系文学」であれ「日系文学」であれ、主に大きな枠を設けて研究されているが、具体的な文学作品から満蒙観・満洲観を詳しく検討するものが見えないということである。たとえ満洲観のようなものに多少言及した研究はあっても、そのほとんどが日本文学史上で有名な作家と作品に関するものである。例えば、葉山英之著の『「満洲文学論」断章』には主に夏目漱石、与謝野寛・晶子らの作品が論じられている。しかし、一般の在満日本人の満蒙観・満洲観には言及していない。

従って、戦前、戦時、戦後を繋げる総合的な在満日本人の満蒙観・満洲観の研究が期待されているのではないかと思われる。また、有名な作家、文豪だけではなく、知られていない一般の在満日本人の満蒙観・満洲観を探究する余地があるだろう。これが、本論文が満蒙観・満洲観を視座にする理由である。

4 概説——雑誌『満蒙』における文芸

「満蒙文化の開発」を標榜する満蒙文化協会が発足したことを契機として、1920年9月に『満蒙之文化』は、満蒙文化協会の機関誌として刊行された。本誌は、1923年4月に『満蒙』と改題され、創刊から終刊まで全281号が発行された。概説の便宜を考慮し、『満蒙』を、大まかに「満洲国」成立前の文芸、1930年代の文芸、1939年（「満蒙社」結成）以降の文芸、という三つの時期に分けて逐次述べる。

4.1 「満洲国」成立前の文芸——歌謡、翻訳文学

「満洲国」が成立する前の『満蒙』は、さらに二つの時期に分かれている。一つは1920年9月から1923年3月までの『満蒙之文化』の時期で、もう一つは誌名を「満蒙」と改題した1923年4月から「満洲国」が成立するまでの『満蒙』の時期である。

4.1.1 『満蒙之文化』の時期——文化の「開発」

創刊号の「発刊の辞」に「満蒙開発終局の理想を実現し行く文化運動の前衛として、其常備軍たる満蒙文化協会の進路を決むる指導的地位に立ち、以て本協会の公明なる開拓的活動を完成せしめなければならない²⁶」と述べられている。従って、『満蒙之文化』は「満蒙文化の開発」を「終局の理想」とした文化誌であると思われる。

しかし、創刊号の誌面はそのようになっておらず、政治、軍事、経済の内容が大部分の誌面を占めている。「満鉄」の干渉で『満蒙之文化』の発刊は強い政治性（半官半民の性質）を伴っていた。それ故に、『満蒙之文化』は「満蒙文化の開発」を標榜してはいても、満鉄と絡み合い、政治性を持たなければならなかったのである。

創刊号を開いてみると、A4判の判型で、132ページに及ぶ規模である。表紙には大連港の写真が載せられ「大連港の船車連絡実況」を数字で表記している。誌名は「満蒙之文化」という漢字に加え、その上に「THE LIGHT OF MANCHURIA」と英文で示されている。なお、雑誌の目次及び掲載された広告も英文で表示され、英文欄も特設されていた。つまり、当初から雑誌の編集には英米向けの意向が組まれていたのである。

『満蒙之文化』（『満蒙年鑑』に収録された第30号を除く）の全31号は、政治、経済等の幅広い範囲での「満洲」に関する研究成果を掲載していた。その掲載内容を分類すると、経済に関するものは90篇余り、政治に関するものは40篇余り、文化に関するものは80篇余りある。その中では、「満洲」の事情に関する調査成果が多い。このような傾向からは『満蒙之文化』は総合誌のように見え、ただ文化の「開発」を追求するという発行目的からは外れているのではないと思われる。この点に関しては、岡部牧夫は次のように指摘している。

協会は「満鉄」や関東庁²⁷の「物心両面」の援助をうけ、以後民間の満蒙調査・紹介機関の中心になる。活動の内容も、文化というより政治経済なり実業なりの收拾とその提供に主眼がおかれてゆく。創刊後三年しないうちに、当初の誌名『満蒙之文化』から文化がはずされたのもまことに正直な話である。²⁸

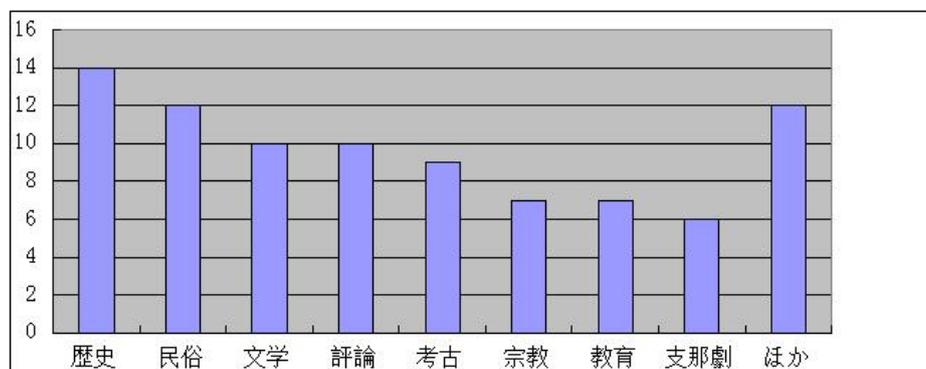
岡部の指摘する通り、『満蒙之文化』の編集方針は、創刊の当初から、文化の「開発」という初心から外れてしまっていることがわかる。むしろ、「文化」と銘打っていても、経済、政治、文化を含めた総合的な雑誌を目指していたといえよう。

26 「発刊の辞」『満蒙之文化』（1）満蒙文化協会、1920年9月、p. 1。

27 関東庁は関東州租借地を統轄した日本の植民地統治機関である。1919年従来の関東都督府は、陸軍部が独立して関東軍司令部となり、民政部が関東庁に改編されて旅順に設置された。

28 注22に同じ。

一方、文化方面の内容も掲載されてはいたものの、そのほとんどが「満洲」に関する調査研究である。次は、『満蒙之文化』における「文化」にかかわる主な文章の掲載回数の一覧である。



[表2] 『満蒙之文化』における「文化」にかかわる主な文章の掲載回数の一覧
注：「ほか」の項目は「満洲」の施設や娯楽や衛生などの方面に関する文章である。

表2に示しているように、文化の面での研究は、歴史、民俗、文学、評論、考古学、宗教、教育、支那劇など、さまざまな分野にわたっている。これらの研究成果はおもに「満洲」の具体的な事情を考察してできたもので、やはり読者への情報提供という傾向が強く、執筆者自身の考え方や感情の表現はすくない。それに、文芸作品の掲載は、わずか10篇である。

本誌の文芸については、満蒙の考察を行った旅行記の掲載が、最も早いものあり、上村清彦の「満洲の自然美」（第2号）、浅田弥五郎の「東蒙騎馬横断記」（第3、4、5号で連載）が挙げられる。また、第3号で掲載された星武雄の評論「詩賦に現われたる千山」は本誌における最初の文芸評論である。第29号から三浦義臣の訳した「中国伝奇・封神演義」が掲載され、雑誌改題後の第75号（1926年7月）まで合計で41回の連載となった。

『満蒙之文化』の時期においては、文芸はおおよそ旅行記、評論、翻訳文学に限られている。満鉄が成立した後、夏目漱石ら数人の文学者が「満洲」に呼ばれて「満洲」に関して一連の作品を書いた。漱石は1909年に「満洲」・朝鮮を旅行した経験に基づいて『満韓ところどころ』という旅行記を執筆した。この作品について劉建輝は「親友である満鉄総裁中村是公に対する配慮が働いているせいか、そこには漱石一流の韜晦が目立ち、けっして彼の「本音」が書かれていないように思われる」²⁹と述べている。この

29 劉建輝「満洲」幻想の成立とその射程』『アジア遊学』(44) 勉誠出版、2002年10月、p. 12。

ように考えてみれば、『満蒙之文化』に旅行記、評論、翻訳文学が掲載されたことにも理由があったといえよう。

4.1.2 『満蒙』の時期——調査手段として利用された文芸

本誌は、第33号から『満蒙』と改題され、その判型もA4判からA5判に改められた。本号の巻頭には満鉄理事である松岡洋右の文章「満蒙開発の基調」が掲載されている。つまり、改題前に提唱された「満蒙文化の開発」は、満蒙経済の「開発」に置き換えられたのである。松岡は、次のように述べている。

満蒙開発と云ふ言葉は、何遍繰返されても吾人に採つては常に新しい意味を持った痛切なる題名である。夫れは広大無辺な満蒙の土が未開の儘で遺棄されて居ると云ふ事実に対して苟も世界の富と人類の福祉とを増進せんとする者の念頭に当然起つて来る問題であつて換言すれば之は吾人が感ずる所の世界的義務の一端に外ならぬ。³⁰

「満蒙開発」に応じて、改題後の『満蒙』の誌面は調査文に掲載の重心が置かれるようになっていく。『満蒙』は、満鉄各部門の調査成果を掲載する雑誌の一つになったのである。同号には、中尾万一の「玻璃と硝子」、佐藤義胤の「満洲より見た内地の大豆加工業」、三山学人の「北満に於ける特産輸出概観」などの調査文が掲載されている。

誌面には文芸面の体裁及び掲載量が『満蒙之文化』の時期と比べ多くなった。同号には中溝新一の創作した童謡「支那芝居」が掲載された。それ以降、誌面には民謡、漢詩、短詩、短歌、俳句、川柳などが次々と載せられた。これらの文芸作品は、満蒙の風景を描写するものである。文芸作品は、大量に創作された一方で、満蒙を調査する一つの手段として利用されている傾向が見えてくる。この点については、本論の第1章で民謡を取りあつかって詳しく論じる。ここでは与謝野寛の漢詩・「満蒙遊草」（第102、103、104、106号）を見ておく。次の一節がある。

洮南蒙古境。行旅太艱難。驕卒漫遮路。健獒吠向人。（謂蒙古狗、一种蒙古狗）。
天陰朝尚夕。草短夏犹春。霜白朔边上。風黃沙漠塵。（地生曹達，白似霜，沙漠風起，黃塵滿天）
己中忽然听銃。車上欲回輪。朽木存胡祀。（城中有一老榆樹，胡人祀之，今既朽）
新城多漢民（洮南本胡人游牧地，清末始置府）³¹

30 松岡洋右「満蒙開発の基調」『満蒙』(33) 満蒙文化協会、1923年4月、p. 8。

31 与謝野寛「満蒙遊草」『満蒙』(103) 中日文化協会、1928年11月、p. 104。

この漢詩は、与謝野が洮南蒙古を旅する時に書いたものである。その中には特産（獐、曹達）、天気（草短夏犹春）、環境（風黄沙漠塵）、習俗（朽木存胡祀）、住民（新城多漢民）などの情報が伝えられている。与謝野の漢詩は洮南蒙古という地方の現地調査でもあるといえよう。

漢詩以外にも、中溝新一、加藤郁哉、春野燦平らの自由詩、山口慎一、竹田陽子、森下直記らの短歌、河東碧梧桐、小村鳥巢人、西津五春らの俳句、大島濤明、井上葉吉、高橋月南、井上剣花坊らの川柳などもある。

これらは文芸作品であるが、作者の旅行記録でもある。現地調査の意図が窺える。井上剣花坊の川柳「満鮮余稿」（第69号）は、満鮮地方（大連、奉天、北鮮等）の衣装、山水、古跡、歴史物語等を記録している。作者の井上剣花坊は、「満韓のいくほども無き旅日記」という川柳で「満鮮余稿」を終え、今回の旅行を「満鮮一箇月半の行脚と称するも、半以上は内地と船中に費消して、真に満鮮の土を踏みしは、僅か旬日の間のみ、是れ走馬花を觀るに類す、寧ろ皮肉の下、深く骨髓に針するを得ん古より川柳は刹那を重んず、此行を称して川柳旅行と称せんか、否か」³²と記している。

本誌における小説の初登場は、第34号に載せられた西英の小説「牧場の唄」である。作者の西英は小説で「大連から旅順へ下がる、みすばらしい中間駅の程近い谷間」³³にある部落を舞台にして「支那人」と日本人との恋愛物語を描いた。この時期において在満日本人の書いた本誌掲載の小説は、以下のようにまとめられる。

題名	作者	巻号	出版年月
包める濃霧	井上葉吉	65	1925年9月
哈爾濱小品	井上葉吉	100	1928年8月
コント二篇	竹素介	103	1928年11月
日日好日	井上葉吉	111	1929年7月
呪はれたる恋の話	大谷武男	117	1930年1月
失はれた機会	瀬野浩太	118	1930年2月
一旅人	佐々木秀江	118	1930年2月
眉を斂む	佐々木秀江	119	1930年3月
しゅうるい	岩崎一夫	120	1930年4月

32 井上剣花坊「満鮮余稿」『満蒙』（69）満蒙文化協会、1926年1月、p. 216。

33 西英「牧場の唄」『満蒙』（33）満蒙文化協会、1923年4月、p. 133。

北に展く	河村清	124	1930年8月
十年前	春野燦平	128	1930年12月

[表 3] 「満洲国」成立前の『満蒙』に掲載された小説の一覧

表 3 によれば、1928 年以降小説は数多く掲載されていたが、それ以前にはほとんどなかったのである。従って、1920 年代には、小説を書ける作家群が現われていなかったということになる。1920 年代は、「満洲」に日本語文学が出発したばかりのところで、1930 年代に入った後の「満洲国」の日本語文学と比べ、未熟であったのだ。緊密な構造をもつ本格的な小説創作の様子は未だ見えてこない。この時期の投稿者には日本近代文学史における有名な文学者は一人も見出すことができず、投稿者の大半は満鉄の従業員、あるいは「満洲」を調査しにきた研究員であった。1920 年代の後半以降、特に 1932 年に「満洲国」が成立した後、小説の創作は急増した。「満洲国」の建国を宣伝するために数多くの小説と戯曲が掲載されたのである。

1920 年代から、在満日本人による中国文学の翻訳活動も展開されている。前述の三浦義臣の「中国伝奇・封神演義」が『満蒙』に掲載され、その他にも、第 76 号に柴田天馬の「支那怪異談・賈児」、さらには第 82 号に同じく柴田の「聊齋志異・十四番目の娘」が掲載された。柴田天馬の和訳『聊齋志異』はこの後、連載となる。なお、柴田の和訳『聊齋志異』は、独特のルビ表記の方法を用いており、なるべく「支那趣味」を還元するという柴田の翻訳意図を表わしている。本論文の第 2 章では、柴田天馬の和訳聊齋志異を詳しく論じる。

4.2 1930 年代の文芸——「建国」の小説と戯曲

「満洲国」成立後、『満蒙』における文芸面には、主に文芸評論、研究論文、翻訳文学、旅行記、詩歌（短詩、短歌、俳句、漢詩）、小説、戯曲脚本、随筆などが含まれている。この時期においては、小説と戯曲脚本が宣伝手段として雑誌の編集者に重視され多くの作品が掲載されていた。

4.2.1 文芸評論、翻訳文学、詩歌の新動向

文芸評論では、出上万一郎の「左翼文芸陣より見た中国大衆」（第 142 号、1932 年 2 月）、群家陸夫の「寂寥たる満洲の文芸界」（第 143 号、1932 年 3 月）、中条辰夫の「支那映画界雑記」（第 146 号、1932 年 6 月）などが見られ、これらは主に「満洲国」成立後の「満洲」の文芸の現状と問題を検討した。

文芸作品の研究論文では、主に中国の文学作品を研究対象としたものがある。松井秀吉の「『老残遊記』を読んで」（第145-147号、1932年5月-7月）、大高巖の「紅樓夢に現われた近代的女性」（第144号、1932年4月）「魯迅再吟味」（第149号、1942年9月）などが代表的な論である。

翻訳文学では、1920年代から連載を開始した柴田の和訳『聊齋志異』はこの時期にも掲載され続けていた。また、第148号（1932年8月）から、森田富義による奇談の連載も始まった。森田の奇談は柴田の志異と同じ、中国の怪奇物語である。編集者の中溝新一は同号で、森田の「海上奇談」に対して、「森田氏の海上奇談も夏向のものとして、実地視察を経て居られるだけに、普通の大衆ものとは類を異にして興味多いものです」³⁴と評価している。従って、柴田と森田は、『満蒙』における中国の怪奇物語を紹介する両大家であったといえよう。

旅行記では、松岡信夫の「満洲馬賊受難実記 飛行機の引揚まで」（第143号、1932年3月）、金丸聖哉の「吉敦紀行」（第148号、1932年8月）、中野久四郎の「私の満洲旅行」（第160号、1933年8月）、三宅宗悦の「南満雑景」（第160号、1933年8月）、嘯風生の「旅大日帰りの旅」（第160号、1933年8月）、山島貞雄の「大興安嶺山脈横断記」（第178号、1935年2月）などが挙げられる。この時期における旅行記は、「満洲」に対する調査であると同時に、「満洲国」の「建国理念」を宣伝するものでもある。中野久四郎は「私の満洲旅行」で次のように述べている。

満洲国が大同二年になつて、即ち建国第二年を迎へて世界列国環視の間に、益々力強く健全に発達しつゝあることは、実に同慶に至りである。（略）全世界環視の中に力強く成長しつゝある満洲国に対しても、深く敬意を表はす。特に王道楽土の完全なる実現を期待して居る。³⁵

「満洲国」の建国は、本誌の文芸面に確かに影響を与えている。旅行記だけでなく、詩歌も宣伝の手段として利用されていた。詩歌は「建国」を主題とした最も早い文芸の一つである。第144号で掲載された那迦三蔵の「春の微笑」の中では、「風雨に叩かれた廟の旗が新五色旗に似てゐる」³⁶という短詩が収録されている。いわゆる「五色旗」は本来、「中華民国北洋政府」の国旗であるが、「満洲国」の国旗の基礎でもある。「新五色旗」とはおそらく「満洲国」の国旗であろう。また、「五色」は、「満洲国」の五

34 中溝新一「編集私記」『満蒙』（148）満洲文化協会、1932年8月、p.177。

35 中野久四郎「私の満洲旅行」『満蒙』（160）満洲文化協会、1933年8月、p.146。

36 那迦三蔵「春の微笑」『満蒙』（144）満洲文化協会、1932年4月、p.131。

族を指す。那迦はこの短詩で「満洲国」の「五族協和」の理念を宣伝しようとしたのであろう。

また、第 145 号に西田猪之輔の歌「満洲国ところどころ」、村岡楽童作曲・満洲国資政局弘法処作詩の「頌建国歌」と「建国記念日満大運動会歌」が掲載されている。「満洲国ところどころ」には、「満洲国」境内の錦州、吉林、敦化、長春、ハルビン、中東沿線、チチハル、大興に関する 34 首の短歌が収録されている。作者の西田は当時の長春の雪を「建国を祝ふ夕の新しき首都長春に淡雪ぞ降る³⁷」と歌い、「建国」という言葉を直接用いている。

『満蒙』の全号の文芸を概観すれば、詩歌の掲載が最も多い。甲斐水棹・原真弓・西田猪之輔らの短歌；菱田世紀・齋藤欣志郎の短詩；高山峻峰・三溝沙美・召水の俳句；高橋和義の長詩；井上寿老の漢詩などは、数多く掲載され、『満蒙』における詩歌の世界を築いたのである。これらの詩歌は宣伝の手段として作られたり、掲載されたりしており、「満洲国」の建国及び「建国理念」を唱えていた。井上寿老の一首の漢詩をみていく。

孤駅下車天始昏。揚鞭笑入古城門。

千秋弊壳一朝改。童卒齐称日本魂。³⁸（題名：齊々哈爾³⁹）

詩意は、概ね以下のものである。作者が日暮れに齊々哈爾の一つの駅で降りて楽しんで城市に入った。百千年の弊病が一朝に改められ、若い兵士が「日本魂」を賞賛する。（筆者訳）「一朝改」は恐らく「満洲国」の建国を指すのであろう。

4.2.2 「満洲国」の建国が『満蒙』に与える影響

創刊から「半官半民」という性質を持っていた『満蒙』は、「満洲国」が成立した後に宣伝の手段になるのは当然のことでもあっただろう。「満洲国」が成立する直前に発行された『満蒙』の新年号（1932年1月）の巻頭言には、次のような言葉が綴られている。

要するに満洲維新の理念とするところは現在三千万民衆の在満居住者の上に新国籍を附与して、満蒙の地を泰平安住の楽土たらしめ、此処に扶植されたる新政治

37 西田猪之輔「満洲国ところどころ」『満蒙』（145）満洲文化協会、1932年5月、p.136。

38 井上寿老「困知齋詩抄」『満蒙』（181）満洲文化協会、1935年5月、p.75。

39 齊々哈爾（チチハル）は中国の黒龍江省に位置する省直轄市である。

と新文化は、嘗つては吾等の精神の故郷であつた老大支那の歴史を更正せしめ、引いては垂細垂の黎明を促すべき新生命として、健全なる培養と保護とを加へなければならぬ。今や光は東方より来たりて、従来満蒙の天地に低迷して居た妖雲は一掃せられんとして居る。年の改まると共に清明の瑞気は満蒙の曠原を被光して、昭和七年の新春は正に満蒙維新の第一年として祝福されねばならぬ。⁴⁰

「新国籍を附与」することは「満洲国」の建国を暗示する。「満蒙維新の第一年」は新（傀儡）国家の「満洲国」の第一年であろう。この翌月、「満洲国」が正式に成立した。「満洲国」をどのような新国家に作っていくべきなのかについては、当月号（第142号、1932年2月）の「巻頭言」に次のように述べられている。

新国家には一切の邪念はない。唯一途にわれらが理想郷として、万全の努力を払はなければならない。（略）かくして新国家は、正統なる国民に依つて、清純なる社会を作り、政治、外交、経済、産業その他万般に亘つて細心の注意を払ひ、人として、国として模範的立場に置かれなければならぬ。（略）今や満蒙の天地に新国家の大旗は、静かに翻へらうとして、愉快に元気よく建設への過程を踏まうとして居る。新国家に祝福あれ！⁴¹

「満洲国」を「理想郷」として「建設」していくと述べられたように、「満洲国」成立後の『満蒙』は建国の宣伝に重心を置いていた。文芸の力で新国家及び「建国理念」を宣伝することが要求されていたため、文芸作品の掲載はますます重視されていた。前述した群家陸夫の評論「寂寥たる満洲の文芸界」は、文芸創作及びその作品の発表機関の設立が要求されていると指摘している。

目下満洲の文芸雑誌としては奉天に『胡同』が続いてゐる筈であるが、之も旧年以来の事変に崇られてか影を見せない。是に満洲文芸界の衰微嘆かけしい次第である（略）。満洲郷土芸術のために一般文学青年の要望してゐるものは、自由なるそして権威ある発表機関への待望である。（略）小説、戯曲の発表機関も必要である。（略）それ等発表された創作に対する、又は満洲に芽ぐまねばならない芸術に対する適切権威ある評論家の輩出も重要なものであらう。新しい満蒙自治国、満洲の

40 「満洲維新に題す」『満蒙』（141）中日文化協会、1932年1月、p. 1。

41 「満蒙新国家と教育問題」『満蒙』（142）中日文化協会、1932年2月、P. 1。

朝ぼらけのためにも。⁴²

最後の「新しい満蒙自治国、満洲の朝ぼらけのためにも」という指摘は「満洲国」の成立と今後の満洲文芸の発展との繋がりを示している。こうした背景の下で『満蒙』の文芸面にとって「建国」の宣伝が重要な主題の一つになったのである。

4.2.3 宣伝の手段として利用された小説と戯曲

1932年以降、『満蒙』の誌面には、「満洲国」の建国の理念を主題とした小説と戯曲の創作が現われた。以下は、1932年2月から1935年12月までに本誌で掲載された主な小説と戯曲脚本の一覧である。

小説／戯曲名	作者	巻号	頁	類型	発表年月
南行列車	篠垣鉄夫	142号	145－159	戯曲脚本	1932年2月
女学生陳青蛾の更正	近東綺十郎	143号	161－174	小説	1932年3月
黄塵	稲葉亨二	144号	132－145	小説	1932年4月
張学良（上）	大庭武年	144号	145－162	戯曲脚本	1932年4月
張学良（下）	大庭武年	145号	138－154	戯曲脚本	1932年5月
スパイと愛欲	聖田武彦	147号	161－175	小説	1932年7月
故国	大庭武年	153号	182－199	小説	1933年1月
新京悲歌	是枝道太	153号	200－224	戯曲脚本	1933年1月
烽火	大庭武年	155号	179－196	戯曲脚本	1933年3月
清朝終焉	大庭武年	158号	200－217	戯曲脚本	1933年6月
馬占山	大庭武年	159号	202－214	戯曲脚本	1933年7月
小河沿の妖花	白石義夫	162号	125－143	小説	1933年10月
間諜・茉莉	近東綺十郎	164号	171－189	小説	1933年12月
満洲開基	大庭武年	167号	236－251	戯曲脚本	1934年3月
蔣介石	大庭武年	169号	155－170	戯曲脚本	1934年5月
紅槍記	木村毅	174号	93－107	小説	1934年10月
乱離（一）	秀木公	178号	159－169	小説	1935年2月
乱離（二）	秀木公	179号	160－170	小説	1935年3月
祖母	玫泉作・大	184号	113－116	小説	1935年8月

42 群家陸夫「寂寥たる満洲の文芸界」『満蒙』（143）中日文化協会、1932年3月、p. 128。

	内隆雄訳				
蠍	北鮫雄	188号	155-172	小説	1935年12月

[表 4] 1932 年 2 月から 1935 年 12 月までに本誌で掲載された小説と戯曲脚本の一覧

表 4 から見れば、「満洲国」成立後には、ほぼ毎号小説、あるいは戯曲脚本が掲載されているのが分かる。これらの作品は「満洲国」または「満洲」の歴史を創作背景とし、「満洲国」の建国を宣揚している。第 142 号（1932 年 2 月）に掲載された篠垣鉄夫の戯曲脚本「南行列車」は、長春から大連に至る列車の移動に伴って新しい満洲生活の断面を描くものである。この戯曲脚本では、「満蒙救国連盟」という組織が満洲自治を主張する（「満洲国」の建国を暗示する）シーンが描かれている。「満蒙救国連盟」は「満蒙は其の善良なる現住民をして自治せしむべし。我帝国は正義人道の擁護と東洋平和確保の為完全なる統治機関の設立せらるゝ迄、東四省の治安を維持し、以て現住各民族並居留外国人の生命財産を保護すべし」⁴³と声明している。「満洲国」の成立を正当化する最も有力な武器として「東洋平和確保の為」という立論が出されているのである。

「南行列車」などのこの時期の文芸作品は、当時の東北軍閥の残酷さへの攻撃が一般的であった。戯曲だけでなく、同年 3 月号に掲載された近東綺十郎の小説「女学生陳青蛾の更正」も張学良らの軍閥を批判している。この小説で登場した、主人公の陳青蛾を説得する一人の青年は次のように言っている。

あなたの家郷の財産を故なく没収して、貴女をこんな境涯に突き堕したのは誰です。東北の軍閥資本家張学良とその一味の暗黒的専横施政の一現象なのですよ。我々中国の暗黒政治に亡びようとしてゐる大衆は資本主義経済第三期の下降線に餓死しようとしてゐる世界の無産大衆と共に当然手を握り、団結して闘はなければなりません。現在、我々の行くべき新しい道は、中国無産大衆の力による軍閥資本家の打倒、無産大衆の憧憬する××××社会の建設への直進にあるのみです。

44

「満洲国」成立前の、社会秩序の混乱と東北軍閥施政の残酷さを力説することは、「満洲国」の「建国理念」を宣伝する最も重要な方法であった。大庭武年は、東北軍閥の「頭目」である張学良と馬占山を主人公にして「張学良」と「馬占山」などの戯曲脚本を創

43 篠垣鉄夫「南行列車」『満蒙』（142）中日文化協会、1932 年 2 月、p. 154。

44 近東綺十郎「女学生陳青蛾の更正」『満蒙』（143）中日文化協会、1932 年 3 月、p. 173。

作した。大庭の戯曲創作に関しては、本論文の第4章で詳しく論じる。

また、英雄物語の創作も「満洲国」の建国を宣伝する方法の一つである。近東綺十郎の創作した小説「間諜・茉莉」は、「満洲国」にいたスパイ戦を描いたものであり、英雄物語創作の代表作でもある。「間諜・茉莉」に関しては、本論文の第3章で詳しく分析する。

「間諜・茉莉」以外にも英雄物語は存在する。稲葉亨二の創作した小説「黄塵」は「満洲」で一生懸命に労働生活を生きていた船川均三という在満日本人の人物像を作り上げた。是枝道太の戯曲脚本「新京悲歌」には「満洲国」に「献身」した久野教官のイメージが作られ、久野のような「献身者」（英雄）が宣揚されている。「よく御覧、久野君だけではない。あゝした沢山の人達が、矢張り久野君のやうに北の野に戦に行くのだ。新しい国、新しい時代の曙にはいつも血なまぐさい戦の風が吹いてゐるのだ。元気を出して地下の久野君を悲しませないやうにするのだよ」⁴⁵と文中で書かれたように、「新しい国、新しい時代」のために、英雄が必要であると宣揚されていたのである。

以上をまとめると、「満洲国」成立後の『満蒙』における文芸面においては、最も大きな特徴は建国宣伝である。特に、1932年から1935年までの間は、「建国」と「建国理念」を主題とした詩歌、小説、戯曲脚本の創作が『満蒙』の文芸面を独占しているといえる。1930年代後半に入ると、小説、戯曲の掲載が減り、「満洲国」の人々の社会生活を描写する詩歌、随筆、旅行記が増加した。1939年に満洲文化協会による『満蒙』の発行が終わった。その編集実務を引き継いだのは「満蒙社」である。

4.3 1939年以降の文芸——社会生活に関心する旅行記、同人雑記

1939年1月、『満蒙』を続刊するために「満蒙社」が結成された。そして、1939年2月から「満蒙社」同人が『満蒙』を編集し始めた。『満蒙』の誌面も一新されたのである。「満蒙社」は創立の当初から、「学芸の昂揚、文化の宣布」を『満蒙』の編集志向とし、大連を主陣地にして文化の「長期建設」を目指していた。これによって、『満蒙』の誌面は一新し、文芸評論、旅行記、随筆、詩歌（短歌、俳句、川柳）、小説、翻訳文学、随筆、同人雑記などの文芸的な内容で覆われるようになった。この時期において、翻訳文学、旅行記、随筆及び同人雑記の掲載は新たな動向を見せ、誌面の特色を表している。

45 稲葉亨二「黄塵」『満蒙』（144）満洲文化協会、1932年4月、p. 224。

4.3.1 翻訳文学の新動向——満系、露系作家

翻訳文学は、柴田天馬の「支那怪奇談」（和訳『聊齋志異』）が掲載し続けられる一方、大内隆雄、藤田菱花、布村不二夫、吉川文夫、岡本隆三らの翻訳文学も本誌で現われた。これによって満系作家、露系作家らの文芸作品が本誌で掲載されることになり、文芸の多様性が窺えるようになる。

以下は、1939年以降に『満蒙』に掲載された満系、露系作家の文芸作品の一覧である。

作品名	著者	訳者	巻号	類型	出版年月
国境	カントロウ イチ	北林休	230号	小説	1939年6月
戦死者にさゝぐ	ロレンス・ ビニオン	門司勝	231号	詩	1939年7月
喜筵の後	沈桜	大内隆雄	240号	小説	1940年4月
厳粛な生活	張天翼	大内隆雄	245号	小説	1940年9月
旅順開城—露西 亜人の見たる	ベ・ラーレ ンコ	布村不二夫、 吉川文夫	245号	旅行記	1940年9月
戦前の旅順	ベ・ラーレ ンコ	布村不二夫、 吉川文夫	246号	旅行記	1940年10月
戦ひの洗礼	ベ・ラーレ ンコ	市村一夫、 吉川文夫	247号	旅行記	1940年11月
賽金花自伝		藤田菱花	251—253号	自伝	1941年3—5月
外蒙旅行記	E・アシュー ルコフ	吉川文夫	252、254号	旅行記	1941年4、6月
片眼の齊宗とそ の友人	袁犀	岡本隆三	255号	小説	1941年7月
樹緑となる頃	而已	大内隆雄	256号	小説	1941年8月
双生児	山丁	岡本隆三	256号	小説	1941年8月
沉	靳以	大内隆雄	258号	小説	1941年10月
鏡花記	古丁	岡本隆三	259号	小説	1941年11月
隠疚	石軍	岡本隆三	261、263号	小説	1942年1、3月

日露戦争と外国 観戦武官	A・A・イク ナチエフ	丹羽新一郎	262、263号	小説	1942年2、3月
魔手	綽綽	大内隆雄	264号	小説	1942年4月
赤道に生まれる 子	D・ジェンキ ンズ	土居洸	265号	小説	1942年5月
礦坑	秋蛩	大内隆雄	268号	小説	1942年8月
蜀滇紀行	蓋洛	門司勝	270-277号	旅行記	1942年10月— 1943年5月
献げる	天穆	大内隆雄	271号	小説	1942年11月
青春	黒風	大内隆雄	277号	小説	1943年5月

〔表5〕1939年以降に『満蒙』に掲載された満系、露系作家の文芸作品の一覧

表5から見れば、大内隆雄、岡本隆三は、満系小説を翻訳する主力であることがわかる。特に、「満洲国」で活躍した日本人の翻訳家、文芸評論家としての大内隆雄は、堪能な中国語を活かして、満系作家の文学作品を盛んに日本語に翻訳して紹介していた。大内隆雄はその筆名で、本名は山口慎一である。

大内は文芸評論も本誌に載せている。例えば、第238号で「最近の支那文学展望」を発表している。大内は中国文学の現状に対して、「事変直後の頃などは相当に抗日文化人の活動も行はれたのではあつたが、それも漸次消極化し、最近では甚だ微力となつてゐると考へられるのである。文学の本筋と離れた以上のやうなことから説明にかからねばならぬといふのも、支那現代文学情勢の著しい特徴を示すものであらう」⁴⁶と述べている。大内の指摘した「抗日文化人の活動」の「消極化」とは、当時のますます激しくなった文芸統制を指す。「文芸統制」に関しては、呉佩軍が以下のように述べている。

1941年3月、「芸文指導要綱」の公布によって、「満洲国」の文芸統制が正式に行われた。全体から見れば、「満洲国」の反抗文芸の最盛期は1931年から1936年まで、日本語文芸の最盛期は1937年から1941年までである。1941年以降は、文芸統制体制の確立と共に、自由に創作する空間がなくなり、国策文芸が主流となった。⁴⁷

46 大内隆雄「最近の支那文学展望」『満蒙』（238）満蒙社、1940年2月、pp. 32-33。

47 呉佩軍「『偽満洲国文芸大事記』について」『跨境——日本語文学研究』（6）高麗大学校日本研究センター、2018年8月、p. 227。

つまり、1940年代に入ってから「文芸統制」によって文芸創作は退潮期を迎えたのである。満系露系の文芸作品が翻訳され掲載されたことは、満系などの「反抗文芸」の退潮を補う一つの作戦であったかも知れない。

4.3.2 旅行記の新動向——旅情を織り込む

翻訳文学と同じく、1939年以降の『満蒙』においては旅行記の掲載量も増えた。以下は、この時期に本誌で掲載された旅行記の一覧である。

作品名	著者	巻号	掲載年月
蒙疆記行	益田虎雄	231	1939年7月
東満旅行記	金勝久	233	1939年9月
大陸北里素見	伊藤雅叙	233	1939年9月
北満点描	宮永次雄	235	1939年11月
台湾行抄	大岩峯吉	242	1940年6月
白人東洋来航記	高山慎一	243、244、245	1940年7、8、9月
熱河の古跡を伝説を拾ふ	三浦浩	242、243、244	1940年6、7、8月
北支満疆の人々	田口稔	244	1940年8月
支那大陸を一巡して	金勝久	244	1940年8月
東北満洲の一部旅行記	中西仁三	245	1940年9月
奉天義県間の観察	田口稔	246	1940年10月
小越北冥と満洲・黄河探険	小此木壮介	246、247	1940年10、11月
白塔山踏査記	日向伸夫	249	1941年1月
外蒙旅行記	E・アシュー ルコフ作、 吉川文夫訳	252、254	1941年4、6月
梶山鼎介の鴨緑江記行	田口稔	254	1941年6月
東満抄	田口稔	258	1941年10月
車窓の熱河	田口稔	259	1941年11月
満洲より北支へ	田口稔	260	1941年12月
小さな旅より	田口稔	268	1942年8月
北辺関係記行二種	田口稔	269	1942年9月
外蒙横断	林紅子	270、271、272、	1942年10、11、12月

		273、275	1943年1、3月
北満陣旅一年有半	金子麒麟草	274	1943年2月
北満報道隊員手記	赤坂岩治	275	1943年3月
北の満ソ国境を行く	筒井俊一	275、276	1943年3、4月
北満遼江記	田口稔	279	1943年7月
北満旅情・江上抄	田口稔	280	1943年8月
アムールと人	花園欽三	280	1943年8月

[表 6] 1939 年以降に本誌で掲載された旅行記の一覧

表 6 から見れば、旅行記の掲載量が増えただけでなく、この時期の旅行記は 1920 年代の行軍踏査記、1930 年代の鉄道旅行記と比べて旅行の範囲が広がり、北満洲、蒙古の東部にも及んでいることがわかる。特に、北満洲に関する旅行記が多い。その原因を探ってみると、大連、新京、奉天などの「満洲国」の都市よりも、北満洲が未知の世界として人々を引きつけたのであろうと考えられる。

「満洲国」成立後、北満洲が重要な開拓地として注目され多くの研究成果が出ている。1933 年 7 月、『満蒙』では、「拓けゆく北満洲」という特輯号が発行され、北満洲の交通、林業、工業、商業などが詳しく紹介されている。巻頭言に「日満両国は軍事協力と共に経済的協調の為に両国力を合はせて未開なる北満の開発に全力を注ぐべきである。是が為には実情の調査を第一の前提とする。今は官民挙つて北満の実情、将来開発さるべき資源、産業、又は改革すべき各般の事項に対する徹底的の研究が必要である」⁴⁸と述べられているように、本特輯号の刊行はまずは「未開なる北満の開発」ためである。投稿者は、北満洲の交通、林業、工業、商業などを詳しく調査したが、個人的な北満洲への感受を示すところはほとんど見当たらない。

それに対して、1939 年以降の旅行記には投稿者の個人の旅情が直接表されている。以前のデータ系の調査文よりも投稿者の旅情が織り込まれているため、読む価値が高いと思われる。宮永次雄は、旅行記の「北満点描」の中に旅の目的を次のように述べている。

収穫期の開拓地を見たい念願に心躍らせながら、牡丹江行の急行に身を託したのは、九月末の肌寒い朝だった。どうかなあと思ひながら、宿を出る時に着込んだ真

48 金井清「拓けゆく北満洲」『満蒙』(159) 満洲文化協会、1933 年 7 月、p. 1。

冬の毛のシャツが、丁度いゝ重量で、皮膚全体に覆ひかゝってくることを喜びながら、私は車窓に遠のいて行く哈爾濱の街をふりかへつた。⁴⁹

旅行の目的は、北満洲の実情を調査するのではなく、「収穫期の開拓地を見たい」というものである。「心躍らせながら」、「喜びながら」という、旅情を直接表わす言葉がしばしば見かけられる。それに、北満洲の林業、農業、工業などの知識的調査ではなく、在住民の実際な生活状況、社会問題に大きな関心を払っていた。宮永は「北満点描」の中に北満洲の学校の場面を描いている。

学校には二十歳を越えたばかりの若い先生がある。せめて子供たちだけはあづかつて、家庭の世話を少くしたいと、狭い土の家に二十人余りの子供と合宿してゐた。近く新校舎が出来るとかで、小さい子供たちは煉瓦建の学校を待望してゐる。団員の中から女の先生が来て、炊事の方まで一切やつてゐたし、大きい子供は一緒になつて、大根を切つたりしてゐる。⁵⁰

先生と子供たちとの合宿生活がリアルに描写されている。一生懸命に生きている開拓団の姿が想像できるであろう。一方、北満洲には大きな社会問題も存在した。採金の苦力、伐木の苦力の悲惨な生活状態、多民族通婚の問題などがその例として挙げられる。この方面の描写は、本論文の第5章で田口稔の旅行記を研究対象にして詳しく分析する。

4.3.3 随筆、同人雑記——問題視された大連

北満洲と相対する南満洲、特に『満蒙』の発刊地である大連には、社会問題も存在する。この点は、本誌に掲載された随筆と同人雑記から窺える。「満蒙社」同人は、多くの随筆と雑記を本誌に載せ、大連の社会生活の状況を詳しく記している。その中には社会問題を指摘する愚痴談が多い。まず、「満蒙社」結成後の一新された『満蒙』の誌面を確認しておきたい。

第227号（1939年3月）の目次を見てみると、まず誌面上の文芸性が強くなったことが言える。政治的、経済的な文章はほとんど見あたらず、文芸的なものが掲載の中心になっている。本誌に掲載された文芸面の内容を分類すれば、文芸評論（大谷健夫の「日本文化と支那文化」）、随筆（大岩峯吉の「旅の晩餐」、水口薇陽の「立腹掃談」、大野斯文の「長屋住居」、横田一路の「ぶんや談議」）、詩歌（甲斐水棹選の「廣野集」、

49 宮永次雄「北満点描」『満蒙』（235）満蒙社、1939年11月、p.102。

50 注49に同じ、p.106。

津田彦六選の「春の歌」、「支那の唄と民謡」、旅行記（呂同仁作・中村正訳の「戦火の西南中国踏破記」、金勝久の「秘境閩山探勝」、小川治男の「大興安嶺の半歳」）、翻訳文学（柴田天馬の支那怪奇談・「人妖」）、同人雑記というように分けられる。

『満蒙』においては、詩歌、文芸評論、翻訳文学は1920年代から掲載され始められたため、1939年以降の新しい掲載内容としては随筆と同人雑記である。随筆は、1930年代の後半から登場し、「満蒙社」結成後、その掲載量が多くなり、ほぼ毎号掲載されていた。一方、「同人雑記」欄は、「満蒙社」による新設欄である。

「建国宣伝」の高潮を経て、在満日本人、特に文芸に携わる者は、時局から個人の日常生活へと関心を移した。この点は、随筆と同人雑記から窺える。「満洲国」は宣伝される対象ではなく、問題視される対象になっている。第227号に掲載された水口微陽の随筆「続・立腹掃談」は、この点を明らかに反映している。水口は、「満人掃除夫」を次のように述べている。

満人掃除夫は路上を掃けば役目は済むとばかり、誰が通ろうと一切お構ひなしで無遠慮にやるから、風向きによつては砂塵を頭から浴びることもあるし、蒐めた塵芥をシヤペルに掬つて車に投げ込む場合にはバツと砂煙が立つて附近の人家は窓を明けては居られないと云つた調子である。これでは街路は何分清らかになつても屋内により多くの塵埃を入れるといふ結果になつて、衛生上由々しき結果をもたらすことにならぬとは云へない、角をためて牛を殺すといふ古諺もある、掃除夫に注意を与へるか、掃除前に路面を濡らすとか何とかしたいものである。⁵¹

水口の「立腹掃談」は一種の愚痴談であるものの、在満日本人が「満洲」、又は「満洲」の在住民（特に満人）を見る眼差しを示している。水口の言い及んだ「満人掃除夫」が満人であることは、いわゆる「満洲」の問題が満人であることを意味する。「満人」が問題のある者なのである。それに対して、同人らが代表する日本人は指導者の立場に立っていた。

「同人雑記」にも、大連の社会問題が多く書かれていた。最も代表的なのは、大野斯文の雑記である。彼は、当時の大連の衣食住の各方面の問題を指摘していた。大野は、日常生活に非常な関心を払っており、彼の雑記に記されたのは日常生活のことであった。第233号で大野は、本を買うのに不便であると指摘している。

51 水口微陽「続・立腹掃談」『満蒙』（227）満蒙社、1939年3月、p. 30。

満洲に居ると、本を買ふのに不便だと思ふ。思はぬ本を買つたり、思ふ本がどうしても取れなかつたり、西村博士の「日本古代経済」既刊分全部を注文して、半年目に来たなどはいゝ方である。定価の五分増でもよい——大連での一割増は絶対反対——本を潤沢に揃へて置いてくれる本屋、注文した本を迅速に正確に取つてくれる本屋が一軒位はあつてもよいと思ふ。⁵²

誌面に同人らの大連に対する愚痴談が増えていき、1939年12月21日に「満蒙社」同人らは当時の大連商工会議所で「八つ当り座談会」を開催した。会議の内容は「満洲に住んで不平を語る」というものであった。出席者には、同人の伊藤修、稲葉好延、早川正雄、大野斯文、長永義正、満洲日日大連支社長の米野豊実、満洲タイムス社長の由井濱権平らがいる。会議では、「船への不平」、「不合理な時差撤廃」、「チツプは賄賂か謝礼か」、「悲鳴をあげる船客」、「泊めさして貰ふ宿屋」、「不便なタクシー」、「白昼間取引の馬車賃」、「電車は乗客も悪い」、「汽車に対する不満」、「電話、電報」など、様々な話題にわたって大連の不平、不便を語り合っていたのである。

本座談会の内容は、『満蒙』の第238号（1940年2月）と239号（1940年3月）に掲載されている。会議の初めに、記者は次のように述べた。

それではこれから「満洲に住んで不平を語る」と云つた題で、日頃社会の各方面とも接触の多い皆様に、一つ満洲在住邦人の不平を代弁すると云ふ気持で、御忌憚のない御感想なりご意見なりを承りたいと思ひます。⁵³

「満洲在住邦人の不平を代弁する」というのは、「満洲国」における在満日本人の主導性を明らかに強調している。それにもかかわらず、随筆と同人雑記は、多くの社会問題を取り扱い、「満洲国」の下層民衆の悲惨な生活状態を側面から反映している。本論文の第6章では、「満蒙社」の同人雑記、特に大野斯文の雑記を主な研究対象として、当時大連で昂揚されていた文化建設と低下する物質生活との乖離を詳しく検討する。

以上をまとめて見ると、発刊から終刊までにかけての24年間に、『満蒙』の誌面には、詩歌（民謡、漢詩、短詩、短歌、俳句、川柳）、翻訳文学、小説、戯曲脚本、旅行記、随筆、同人雑記が途切れることなく掲載されていたことがわかる。これらの文芸作品の掲載は『満蒙』の文芸面を構築している。1920年代においては、「満洲」は調査される対象であるために、誌面は詩歌、翻訳文学が占めている。「満洲国」成立後は「建

52 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(233) 満蒙社、1939年9月、p. 179。

53 「八つ当り座談会 満洲に住んで不平を語る」『満蒙』(238) 満蒙社、1940年2月、p. 74。

国」宣伝のために小説と戯曲脚本の創作が重視され、多くの作品が掲載されている。また、1939年に「満蒙社」が結成されたことをきっかけに、旅情を重ずる旅行記と愚痴談の多い「同人雑記」が、『満蒙』の新たな内容として当時の「満洲」の社会問題を反映するようになったのである。

5 本論文の構成

本論文は三部に分かれる。

第1部「調査された満洲——「満洲国」成立前の歌謡、翻訳」においては、主に1920年9月の初号から1932年2月（「満洲国」成立前）の142号までの『満蒙』で掲載された文芸面の内容、即ち、歌謡、翻訳文学を考察する。日露戦争終結後、特に1906年に「満鉄」が設立された後、「満洲」や全中国が日本人の調査対象になっていた。満鉄調査課などの満鉄各部門の調査のほか、「満洲」に渡ってきた一般の日本人（新聞社記者、文学者、旅行者、兵士等）も「満洲」の所々を旅し、あるいは、研究のために調査を行い、多くの中国民謡と古典小説を翻訳した。

第1章「「支那像」を求める——在満日本人の中国民謡の翻訳と創作」では、在満日本人による中国民謡の研究を概観した上で、『満蒙』で掲載された民謡（翻訳と創作）を分析し、民謡と中国の国民性との密接な関係を検討する。また、具体的な民謡を取り上げ、民謡に現れる中国像をまとめ、その機能を示す。それに加え、在満日本人が民謡から如何なる中国の国民性を掘り出したのかを明らかにする。ここで述べておきたいのは、本章で「満洲国」成立前と成立後の民謡掲載の変化を示すために、1930、40年代の民謡を対比しながら論じるということである。「満洲国」成立前の中国の国民性を調査するための民謡の翻訳と創作を分析するだけでなく、1930、40年代に現われた新詞類民謡の創作にも言及し、迎合・抵抗という戦時下の民謡の機能を抽出するのである。

民謡などの詩歌だけではなく、中国の古典小説もそこでは訳出されていた。

第2章「翻訳手法から見た「支那趣味」——柴田天馬の和訳『聊齋志異』」では、1920年代から連載し始めた柴田天馬の『和訳聊齋志異』を分析する。20世紀の初めに「満洲」に渡った柴田天馬は、中国怪異小説『聊齋志異』の魅力に引かれ、翻訳活動を始めた。1927年から天馬はその訳作を『満蒙』に連載し始めた。天馬の『和訳聊齋志異』は、ルビと訳注を多く使って、小説の原文になるべく接近し「支那趣味」を表わす一方で、中国の国民性を古典小説の角度から還元している。本章では、「支那趣味」と中国の国民性をめぐって天馬訳のルビと訳注の役割を検討した上で、天馬の訳註における中国の

科挙制度、宗教、登場人物への歴史的考察にも射程を伸ばし、天馬の中国観を検討する。

第2部「宣伝された満洲——1930年代の小説、戯曲」においては、「満洲国」成立後の143号から1939年1月の225号までの雑誌『満蒙』で掲載された小説と戯曲脚本を考察する。「満洲国」が成立した後、「満洲国」の建国を宣伝するために多くの小説と戯曲脚本が創作された。『満蒙』からはこの文芸活動の新動向が窺える。小説の方面には、「満洲国」の建国、あるいは「満洲国」の社会環境を創作背景にしたものが多い。

「満洲国」の建国に伴い、「満洲」において様々な勢力が跋扈し各国の間で展開されたスパイ戦も激しくなった。スパイの話が大衆の間で語り合われ、多くの文学者によってもそれを題材にした創作が行われていた。

第3章「満洲国」のスパイ／スパイ戦——近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」では、近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」を分析する。まず、「満洲国」成立後に「満洲」で展開された各勢力のスパイ戦を概説する。それを踏まえてスパイ小説の創作と社会環境との間の緊密な関係性を明らかにする。以上を踏まえて、小説の「間諜・茉莉」を研究テキストとして「満洲国」時代に在満日本人が書いたスパイ小説の特徴を分析する。さらに、恋愛物語の背後に隠されたスパイ戦に対する内部的な批判を検討する。

小説のほかにも、戯曲、映画などの脚本も数多く掲載されている。「満洲国」の時代において、戯曲、映画は「王道楽土」「五族協和」という「建国理念」を宣伝する手段として大きな役割を果たしていた。当時発刊の雑誌や新聞の誌・紙面には「支那劇」や戯曲に関する研究と創作が非常に多い。『満蒙』で最も代表的なのは大庭武年の戯曲創作である。「満洲国」が成立した翌月、『満蒙』の第144号に大庭武年の執筆した戯曲脚本・「張学良」（上）が掲載され、その後、1932年から1935年にかけての三年間で大庭武年は7本の戯曲を創作し、雑誌『満蒙』で発表した。

第4章「満洲国」の成立と「建国宣伝」——大庭武年の戯曲創作では、「満洲国」の成立を境に分断された大庭武年の前期の探偵小説創作と後期の戯曲創作を繋げ、「満洲国」時期に創作した戯曲を中心にその創作の手法を検討する。さらに、「満洲国」の「建国理念」と政策を宣伝する過程の中で戯曲は如何なる役割を果たしていたのかを検討する。これを踏まえて「満洲国」戯曲を通して在満日本人の「満洲観」を探究する。

第3部「問題視された満洲——1940年代の旅行記、同人雑記」においては、1939年2月の226号から終刊の281号までの『満蒙』誌面の変化を考察する。1930年代の「満洲国建国」を宣伝する小説と戯曲の掲載が退潮すると共に、旅行記の掲載には新しい動向が見えてくる。当時の在満日本人の旅行記には、「満洲国」の抱える問題が在満日本人に

よって数多く指摘されている。1939年以降の旅行記は、「満洲」に対する調査というより、むしろ「満洲」の問題発見である。これらの旅行記には、「満洲国」の社会問題が記されている。『満蒙』においては田口稔の旅行記が最も代表的なものである。

第5章「北満洲の世相を見る——田口稔の旅行記」では、田口稔の旅行記を検討する。田口稔は、1924年に大連へ渡り、『満蒙』を陣地にして多くの地理学の研究成果、旅行記などを発表した。彼の旅行記は地理と文学を巧みに組み合わせたもので、地理的な考察でありながらその中に「独特の抒情」も表れている。本章では、北満洲の実態を考察した上で田口稔の旅行記を整理し、さらに『満蒙』の第279号、280号で掲載された二篇の旅行記「遼江記」と「江上抄」を取り上げ当時の北満洲の水運に焦点を当てて分析し、北満洲の風景（社会問題）を検討する。

北満洲に社会問題があるように、南満洲の都市・大連にも問題がある。当時、「満蒙社」の結成をきっかけに集まってきた同人らは、多くの雑記でそれを書いたのである。

第6章「文化建設と物質生活との間の乖離——満蒙社と「同人雑記」」では、『満蒙』の新しい発行機関である「満蒙社」の結成から論をはじめ、「満蒙社」及びその同人らの構成、編集志向、雑誌の変貌などを明らかにする。また、「同人雑記」を主な考察対象にして、在満日本人による「文化建設」を検討する。さらに、文化の「長期建設」と大連の民衆（特に中国の下層民衆）の低下する物質生活を対比しながら、大連の社会問題を明らかにする。

結章では、雑誌『満蒙』の文芸面の変化を概説した上で、1920年代から1940年代までの在満日本人の満洲観の変化をまとめる。そして、今後の課題を提示する。

第一部

調査された「満洲」——「満洲国」成立前の歌謡、翻訳

第1章 「支那像」を求める

——在満日本人による中国民謡の翻訳と創作

はじめに

中国民謡は、中国の国民性を最も如実かつ鮮明に反映しているため、在満日本人に重要な研究対象とされていた。「満洲国」成立後、在満日本人の書いた中国民謡に関する書籍が多数出版され、民謡研究の最盛期を迎えたといえよう。それと共に、民謡の機能も明らかになっていった。

本章では、雑誌『満蒙』の中に掲載された民謡を中心として、戦前戦時下の中国民謡を整理し分析する。第1節では、在満日本人による中国民謡の研究を概観することで本研究の問題意識を明確にする。第2節では、『満蒙』に掲載された民謡を分析し、民謡と国民性との密接な関係を検討する。第3節では、具体的な民謡を取り上げ、民謡に現れる中国像をまとめ、その機能を示す。第4節では、満洲新民謡を分析してその特色と機能を明らかにする。第5節では、1930、40年代に現れた新詞類民謡を分析し、戦時下の民謡の働きを考える。最後に、以上の作業を通じて、戦前戦時下の中国民謡の機能の変化を明らかにする。

1 在満日本人による中国民謡の研究

「満洲国」が成立した後、在満日本人の書いた中国民謡に関する書籍が多く出版され、民謡研究の集大成の時代を迎えた。1930年に稲川浅二郎が執筆した『満洲民謡曲譜』は中日文化協会によって刊行された。これは「満洲」時代において在満日本人の著した中国歌謡に関する最も早い時期の単行本の一つであり、中国民謡を研究するまとまった研究の嚆矢でもあると考えられる。

稲川の『満洲民謡曲譜』の中には曲譜だけではなく中国語の歌詞及び日本語で翻訳された歌意も丁寧にまとめられており、稲川の中国民謡研究者としての姿勢が映し出されている。稲川の「満洲」における生活に関しては、1937年に発刊した中国語雑誌『明明』の主幹として活躍していたことは明らかにされているものの¹、それ以外はすべて不詳である。1930年代に入ってから、稲川の『満洲民謡曲譜』をはじめ多くの中国民謡を収録する単行本が刊行された。稲川のほか、松本二郎、加藤郁哉、瀬口秀郎、谷山

1 李青「東北淪陥期文学の一側面——疑遅が描いた「満洲国」を中心に」『大谷学報』85(4) 大谷学会、2006年7月、p. 34。

つる枝、七理重恵等の、多くの中国民謡の研究に携わっていた在満日本人がこの時代に活躍しており、その研究の実績も多く残されている。なかでも、研究実績の数から考えると七理重恵に言及しなければならない。

七理の論著『支那民謡とその国民性』は1938年11月に明治書院によって刊行された。これは中国の国民性を研究する代表的な著作であり、特に論文の形で中国民謡を分析する資料の中では最も全面的かつ系統的な論述がなされている。七理は「民謡より見たる支那国民性」という題で中国民謡の内容と特色を詳しく論じ、また、地方ごとに民謡を分類し、吉林省、黒龍江省、奉天省、河北省、山東省、四川省など、当時の中国の21の省の民謡を取り上げた。七理の『支那民謡とその国民性』は日本人の間で幅広く読まれ、戦後の1946年には再版もされている。

個人による中国民謡の研究だけでなく、組織的な研究も非常に多い。筆者の調査によると、1936年に満洲事情案内所²は案内所報告として『満洲の伝説と民謡』という単行本を出版した。2007年に慧文社はこの『満洲の伝説と民謡』を再編して出版した。また、満洲事情案内所の仕事以外にも、満洲弘報協会から出版された『蒙古の民謡と伝説』（1936年）、満洲国通信社から出版された『満洲の民謡』（1939年）も組織的な研究の例として挙げられる。

以上で述べた民謡集と論著には一つの共通点がある。稲川の『満洲民謡曲譜』を除き、他の民謡集と論著には民謡のメロディーに関する研究がほとんど見当たらないことだ。このような状況に当たって、まず、『満蒙』の1929年3月号の編輯後記に掲載された『ぼろにいや』という童謡から見ておきたい。

ぼくおをにはを／はいてたら／ぼろにいやが／とほつたよ／ぼろないかおくさん／といつたから／ぼくはおくさんで／ないけれど／メイユブヨと／どなつたら／にいやがわらつて／ゆきました³

童謡の作者は柴田正一という当時七歳の子供である。在満日本人による中国民謡の研究が深まっていくと共に、民謡と同じく子供の間にも広く歌われる童謡も雑誌『満蒙』の中にしばしば見られるようになった。本誌の編集者である中溝新一はこの童謡について、

2 満洲事情案内所は1933年に満洲経済事情案内所の名称で満洲国政府、駐満日本大使館、南満洲鉄道株式会社の後援を得て設立された。1934年に関東庁、駐満海軍司令部の後援を新たに加え、満洲事情案内所と改称された。当組織は日本からの視察団の案内等の任にあたった。新京記念館内より新京中央通六番地に移転された。1936年に株式会社満洲広報協会と合併し、その直営となった。1938年に満洲広報協会より分離独立し満洲帝国政府特設機関となった。

3 「編輯後記」『満蒙』（107）中日文化協会、1929年3月、p. 145。

「誕生日記念に編まれた『ぎつこんいす』という童謡集からぬいたもの、ほんとうに満洲の子供らしい感覚が、私をうれしがらせます」⁴と述べている。

興味深いことに、中溝のいう「満洲の子供らしい感覚」は、童謡を「聞く」ことからではなく、「読む」ことから得られたのである。実は、『満蒙』に掲載された民謡、童謡等の歌謡はそのメロディーがほとんど無視されていた。簡単に言えば、当時の在満日本人は中国の民謡、童謡をその芸術性からではなく、その内容から研究していたのである。なぜかと言うと、満洲時代における在満日本人による中国民謡の研究は明確な目的を持っていたからである。この「目的」は上述した1936年版の『満洲の伝説と民謡』の序文から見当をつけることが可能である。

満洲帝国が日本官民の援助と誘掖によって、その内外の形態を整へてゆくとき、これを導く一徳一心関係の「日本」が満洲国一般民情を深く知悉する事は缺く可らざる必樞事項である。この見地より当所は嘗て「満洲国の習俗」を公にして、日本人に対する満洲民情常識の涵養に資し、併せて満洲国文化工作に対する一小資料を提供せんと企てたが、今又本書を上梓してこれに拍車を加へんとするものである。

5

つまり、「満洲国一般民情を深く知悉する」ために、多くの中国民謡が集められ、研究され、重要な研究成果として出版されたのである。これまで日本で行われた中国民謡の研究は、主にメロディー、或いは音楽の角度から研究されたものである。そのなかで、増山賢治は「『中国民謡と民族舞踊曲(中国民族楽団、中国歌舞団)』⁶(XM-17-S 日本コロムビア 1967)の資料的価値—その収録曲と解説から看取されるもの」の中で1960年代の中国民謡と楽団を分析した。また、木村雅信は「中国民謡素材に基づく作曲」⁷の中で、中国民謡が日本において作曲に与えた影響を検討した。

一方、文化の角度から中国民謡を研究するものは多くないが、重要なものとして何曉毅の中国民謡研究が存在する。彼は「「民謡」で見る最新中国像」⁸という論文の中で、戦後の中国の官僚、法律、道徳などに関するイメージを民謡から分析した。この論は中

4 注3に同じ。

5 『満洲の伝説と民謡』満洲事情案内所、1936年6月、序。

6 増山賢治「コロムビア世界民俗音楽シリーズ『中国民謡と民族舞踊曲(中国民族楽団、中国歌舞団)』(XM-17-S 日本コロムビア 1967)の資料的価値—その収録曲と解説から看取されるもの」『愛知県立芸術大学紀要』(23) 愛知県立芸術大学、2004年、pp. 17-31。

7 木村雅信「中国民謡素材に基づく作曲」『札幌大谷短期大学紀要』(35) 札幌大谷短期大学、2004年、pp. 113-152。

8 何曉毅「「民謡」で見る最新中国像」『東亜経済研究』59(3) 東亜経済研究会、2001年1月、pp. 277-316。

国の政治民謡、或いは新詞類民謡をめぐって展開し、メロディーではなく主に内容の面から論じたものである。

これらの研究動向から、戦後においては中国民謡の音楽の機能だけではなく、その文化を表す社会的機能も日本人に注目されてきたと考えられる。しかし、これまで戦前戦時下の中国民謡を研究したものはまだ現れていないため、当時の中国民謡は如何なる機能を果たしていたのか、という問題は検討する余地が残されている。よって、本章は雑誌『満蒙』に掲載された中国民謡を扱い、当時の中国民謡に仮託された機能を検討してみたい。

2 民謡の掲載と国民性の発見

『満蒙』における中国民謡及びその研究を辿ることを通じて、1920年代の在満日本人による中国民謡の収集・翻訳という活動を考察し、民謡の掲載と国民性の発見との関係を確認する。雑誌に多くの民謡が登場したのは当時の「満蒙の開発」の背景と関わっている。

前述のように日露戦争の終戦に伴い日本人の渡満の時代が訪れ、特に「満鉄」の成立をきっかけに「満洲」に渡る日本人が増加した。この移民の風潮に乗って在満日本人、特に一部分の文化人は「満蒙の開発」を打ち出した。経済の「開発」だけではなく、文化の「開発」も在満日本人は重視した。

満蒙開発終局の理想を実現するために、文化の「開発」とは文化運動の前衛の働きを果たそうとしていたものなのである。発刊当初の誌面には地理と歴史の角度から行われる考察が多かったが、その中には中国の国民性に関わるものも現れていた。例えば、第4号に掲載された烏蘇里伝説「金牙太子と寛永王」（星武雄訳）は「支那」と「支那人」をめぐると言説である。いわば、国民性に対する研究は在満日本人による文化の「開発」の一環であったのだ。一方、中国民謡は口頭文学として中国の各民族の性格と文化を直接に反映しており、国民性の浸透が最も顕在化したものであったため、1920年代から『満蒙』に登場し始めたのである。

1925年6月号に松本二郎⁹の論文「民謡の中から支那を覗く」が掲載された。その中では、中国の社会における婚姻制度が論じられ、「近代新しい教育を受けた人はその訂婚制¹⁰に反抗し自由結婚を高唱するが、上海天津等の如く極めて開けた大都市に於て極

9 松本二郎は当時「満洲」に「支那」を研究していた研究者であり、1925年に著作『支那の民謡』が日本堂書店から出版された。

10 訂婚とは婚約することである。

少数の成功の例を見た以外に、其正当なる主張も強大なる伝統の前に悲惨なる屈服を遂げる」¹¹と述べられている。これは、『満蒙』において民謡から中国の社会制度を論じた最も早い声明である。そのタイトルから見ると松本は「支那を覗く」という目的性を強調しており、民謡でなく「支那」に焦点を当てている点が興味深い。

つまり、松本は民謡を借りて中国の国民性を発見しようとする姿勢を取っているのである。彼自身もその動機について、「北京大学国文科で全国の民謡を蒐集発表した中に四十五首、私が古本屋から買った民謡集に二首、都合四十七首ある中から南北各々其地方の特色、人情風俗を表現している」¹²と述べている。

ここからは、松本は民謡を借りて「支那」の「南北各々其地方の特色、人情風俗」を「表現」しようとしていたことがわかる。中国の国民性を考察するという松本の動機は終戦まで変わらなかった。この傾向は松本個人のものではなく、多くの論者に共有されていた。それ故に、戦前戦時下にはメロディーから行われた中国民謡の研究は稀で、反対に内容からの研究が非常に多かったのである。

これ以降、『満蒙』には在満日本人による中国民謡の研究と民謡の掲載が多くなってきた。「満洲国」成立後の1930、40年代において、「民族の偽らざる声」¹³と見做された民謡は、中国の国民性を研究する第一の参考資料になった。

中国民謡は主に「社会」と「人」という二つのジャンルで国民性を反映している。社会の面において重要なことは、1926年8月号の巻頭言に青戸生（生年等不詳）の訳した「どうして」という吉林民謡が置かれていることが挙げられる。民謡は『満蒙』が外部世界に向けて発言する窓口のような存在となった。1927年6月号に発表されたJ.M. 生の文章「支那の民謡」では中国の伝統的な民謡が数多く取り扱われている。論者のJ.M. 生は歴史的な角度から中国民謡の起源に遡り、民謡の中で非常に重要な地位を占めた「情歌」（恋愛民謡）を取り上げ、中国の婚姻制度と家長制を分析した。同時に彼は中国の政治民謡を考察し、在満日本人が登場する新詞類民謡に関心を寄せ、「東海里／日本人／借名進兵保璋春／装電話／設警兵／焼民／無理要求欺負人」¹⁴という吉林省で流行っていた新詞類民謡を、政治社会の一角を直接に表したものとして挙げた。新詞類民謡に関しては、村松一弥の研究の中に言及がある。

新詞類とは民国以来のはやりの唄・土地革命・抗日戦争・解放戦争中に、古い民謡の旋律に新しい内容の歌詞をつけたり、旋律・歌詞ともに新作のものなどを包括

11 松本二郎「民謡の中から支那を覗く」『満蒙』(62) 満蒙文化協会、1925年6月、p. 112。

12 注11に同じ、p. 111。

13 七理重恵『支那民謡とその国民性』明治書院、1938年11月、p. 3。

14 J.M. 生「支那の民謡」『満蒙』(86) 中日文化協会、1927年6月、pp. 118-119。

し、いわゆる「革命民謡」とよばれるものがその大部分を占める。(略)この大きな変化は中国の民謡の創り手たちが、外形の模倣などということより何よりもまずかれらの感情を唄に託して表現しようとしている。¹⁵

村松のいう新詞類民謡は「時代を反映し」、「変化」を「表現しようとしている」性格を持つ。つまり、新詞類民謡は社会の時代性を反映し、社会の新しい動向と深く関わっているのである。「日本人」のような民謡は当時の中国の社会と緊密につながっている。『満蒙』の誌面から見れば、最初に掲載された中国民謡の多くは中国の社会制度と状況を反映しているものである。明確に「人」を取り上げた民謡の出現はその後のことであった。もちろん、すべての論述を完全に「社会」と「人」という二つのジャンルに分けられるはずはないが、早い段階における在満日本人の関心は社会のほうに傾いていた。

一方、人の面においては、1929年8月号、9月号に、「民謡に現れた支那の婦人」という無名子(生年等不詳)の文章が連載された。これは『満蒙』における「人」を対象とする最初の民謡研究とも言えよう。論者は「支那」の婦人に関する民謡を整理し、民謡における女性のイメージを検討した。まず、その中の一つの民謡を見ておきたい。

小さい箕で扱つける、俺あ弟、あんたは兄哥。酒でも貰つて、一緒に飲んで、飲んで酔つ払つて媳打とよ。媳が死んだら何うしよう?あんた太鼓で、俺あ銅羅打つて、チャンヂャンドンドン又貰を。¹⁶

無名子は「可弱い妻の唯一の頼り木は何うしても夫である。だが、未長く睦じき筈の夫婦だからと云つても、どうせ心と心の結びで出来たものぢや無ければ、途中で断れる無理がある」¹⁷と述べている。中国の社会制度ではなく、まず「心と心の結び」という夫婦関係から始まった無名子の読解は、できるだけ人と接近しようとする視線を示している。無名子の論文が掲載された後、在満日本人による中国民謡の研究は社会研究という枠から国民性と直接に関わる人の研究にまで細分化された。

以上のことから、中国の社会と人との性格を映す中国民謡は中国の国民性を研究する重要な媒体として考えられていた。在満日本人は中国の事情、特に国民性を知るために中国民謡を無視することはできない。それ故1920年代から、在満日本人によって創刊

15 村松一弥「中国の民謡」『北斗』2(6)中国文学会、1957年4月、p.17。

16 無名子「民謡に現れた支那の婦人」『満蒙』(113)中日文化協会、1929年9月、p.107。

17 注16に同じ。

された日本語雑誌の多くに中国民謡及びその研究が掲載されているのである。この点が明らかになれば、当時、中国民謡は日本人が中国の国民性を調査する対象としての有効性を持っていたことが想像できるだろう。

3 民謡に現れた中国像

民謡の機能を検討する前に、在満日本人は中国民謡の研究を通してどのような中国像を作り上げたのかを分析する必要がある。なぜならば、時代によって異なる中国像は同時代の民謡の機能を反映しているからである。例えば、前述した何曉毅の政治民謡による中国像は「文化大革命時期」の中国社会を風刺する民謡の機能を表している。

中国民謡の普遍性と特殊性については、七理重恵も「支那の民謡には、他の国々の民謡と大に異なった持ち味がある」¹⁸と指摘した。七理は『支那民謡とその国民性』の中で「支那」の民謡を政治的民謡、家庭的民謡、恋愛的民謡、年中行事を唱へる民謡、教訓を示す民謡、迷信を示す民謡といった類別で詳しく分類し、民謡に現れた「支那」の全体像を構築しようとしている。

また、1936年に満洲事情案内所から出版された『満洲の伝説と民謡』も中国民謡を八つの種類に区分している。即ち、家庭生活に関する民謡、恋愛を盛れる民謡、社会政治に関する民謡、風刺的の民謡、風俗的の民謡、年中行事に関する民謡、子守唄・童謡風の民謡、叙事叙景的の民謡である。その民謡編の執筆担当である谷山つる枝¹⁹（当時の満洲事情案内所委嘱調査委員）は中国民謡の特徴について次のように言及している。

好尚の角度から見て大部分が頗る卑近露骨、概して荒けづりで低級なやうである。しかしその半面、まことに屈託がなく素朴な情緒も溢れてゐて、なかなか面白いものがある。傾向としては日本などと反対に、恋愛感傷を盛ったものや叙事叙景風のものも少なく、家庭生活を反映したものの断然多いことが目に立つ。一体に感傷の影の薄いのは、民族の性格の顕著な現はれと見られよう。²⁰

「卑近露骨」、「荒けづりで低級」、「屈託がなく素朴な情緒も溢れて」という表現が使われ、全体像を把握しようとする論者の志向を反映している。これに対して、1920年代の民謡研究の幅は相対的に狭い。1920年代に出版された中国民謡に関する著

18 「発刊の辞」『満蒙之文化』（1）満蒙文化協会、1920年9月、p.7。

19 谷山つる枝は「支那」民俗の研究者であり、1935年に著作『満洲国の習俗』が満洲事情案内所から出版され、1938年に『満洲の習俗と伝説・民謡』が松山房から出版された。

20 『満洲の伝説と民謡』満洲事情案内所、1936年6月、序。

作は、ジャパントイムス社邦文パンフレット通信部²¹から発刊された「特輯」・『民謡に現れた支那の社会』（1928年）が見つかっている。その中では中国民謡は主に「婦人観」と「恋愛観」という二つのジャンルに分けられ、編集者の不破瑳磨太は、巻頭の「編者より」に「民謡と申しても彼の広い国全般に亘るのですから蒐集の一点だけでも些か自慢を申し上げても差支へぬかと存じます」²²と述べている。

「蒐集の一点」で「自慢」をしていた不破のような在満日本人は、早い時期に中国民謡に対して新鮮味を感じていたことが読み取れる。言い換えれば、1920年代の在満日本人による中国民謡の研究は不完全で、中国の全体像を捉えることは難しかったのである。それにもかかわらず、1930年代の成熟に対して、1920年代の在満日本人による新鮮な読解は魅力的であった。1920年代に在満日本人はどのような中国像を築いたのかを『満蒙』に掲載された民謡から見てみる。

『満蒙』は1929年4月号から1930年2月号まで、毎号の巻頭言で「支那民謡」を掲載した。実は、初めて巻頭言に掲載された民謡は1926年8月号の、前述の青戸生が翻訳した吉林民謡「どうして」である。1929年4月号からは「支那」の民謡が再び巻頭言に登場し、それ以降翌年の2月まで連載が続けられており、民謡は雑誌の「窓口」となっているといえる。下記は1929年4月号から1930年2月号までの巻頭言に掲載された民謡の一覧である。

- ①「田家の四季」 支那民謡 1929年4月
- ②「どうしておればかりを殺そうとするのだ」 支那民謡 1929年5月
- ③「いそがしい妻」 江蘇・浙江地方に行われる民謡 1929年6月
- ④まるいもの 湖北民謡 1929年7月
- ⑤金のなる木 興寧地方民謡 1929年8月
- ⑥月月花 浙江地方民謡 1929年9月
- ⑦娘の嫁入り 京兆地方に行われる民謡 1929年10月
- ⑧禽旅行軍歌 湖北地方の民謡 1929年11月
- ⑨中華国 遼陽地方の民謡 1929年12月
- ⑩ちいさい婿さま 南満地方の民謡 1930年2月

21 ジャパントイムス社邦文パンフレット通信部は主として海外諸国の政治、経済、産業、科学、思潮、文芸その他あらゆる方面の新事情、新知識を翻訳・解説し、時に内外の重要な問題に関し専門家の権威ある研究を紹介していた。大体一冊一題が標準である。

22 『民謡に現れた支那の社会』ジャパントイムス社邦文パンフレット通信部、1928年1月、「編者より」。

この一覧を見ると、中国の南北各地の民謡が集まっているのがわかる。民謡から中国の全体像を捉えようとする編集者の意図がここにある。以上の10首の民謡を分類してみよう。

労働・生活を表す民謡：①④

価値観を表す民謡：②⑤⑧

家長制を表す民謡：③⑦⑩

季節/年中行事を表す民謡：⑥

政治を表す新詞類民謡：⑨

まず、民謡①④は中国人の労働の姿と生活状態を描いた労働民謡である。中国民謡の中で最も民謡らしいものは田植歌、麦打歌、船頭歌等の固有の生活感情がよく出ている労働民謡である。民謡①は代表的な田植歌であり、四季の転換への描写を通じて田家の「一家団欒」の生活像を描いている。歌意は以下の通りである。

春は春風／花も開けば草も伸び／蝶の飛ぶよな頃になりや／麦苗や桑の葉が／
すくすくおおきくなるよ／夏は百姓さんが／手まめに働く／蚕が済めば田植する
よ／あしたに星を戴いて／野良に出りや／ゆうべはお月さまが送ってくれる／秋
は稲穂が／上上吉だよ／畑は黄金色／身上は辛いが／心のどかに安気だよ／冬は
雪が晴れば／新しい綿入れが柔らかだよ／百姓仕事も一年経てばさ／一家団欒
しんしよもふへるよ²³

田植歌に対して、稲川浅二郎によって翻訳された「漁翁楽」は代表的な船頭歌である。

漁翁の楽陶然足り／小船に乗り身には蓑衣を穿つ／手には釣竿を執りて／船頭
に立つ。／捉えし魚は籃に在り／金色の鯉皆鮮たり。／河の波浪は蛟龍を跳し／両
岸の楊柳糸を垂る／柳は煙を含み、人唱ひ陽残る。／街上に魚を売つて帰る。／一
杯の美酒を買ひて／魚を焼く／酒に酔ひて歌一曲／明月は前川に満つ。／漁翁の楽
陶然足り²⁴

「漁翁楽」は漁民の生活を生き生きと描いたものである。民謡①の「一家団欒」と民謡④の「漁翁の楽陶然足り」は読者の心中に安楽な中国像を築いた。もちろん、安楽な中国像の構築は『満蒙』の編集方針と関係がある。「満鉄」が成立した後に日本政府は

23 「田家の四季」『満蒙』(108) 中日文化協会、1929年4月、p. 1。

24 「漁翁楽」『満蒙』(117) 中日文化協会、1930年1月、p. 186。

満洲移民を宣伝しており、また、「満鉄」に干渉された各機関も各自の機関誌で移民の政策を高揚していた。民謡①、「漁翁楽」のような民謡を通じて構築され安楽な中国像はある程度、「動員」の機能を果たしていた。

一方、稲川は「此の曲は支那の古き或は曲の一部と思はれる。歌詞は後人が附けたもので曲と一致しない点もあるが其のメロディが支那人の情性に合致してゐるので、今でも各所に歌はれてゐる」²⁵と指摘している。単なる紹介ではなく、その周辺の情報も詳しく集めた稲川の姿勢は当時の政策宣伝を超え、訳者自身の民謡に対して感じた新鮮味を表している。従って、戦前に掲載された民謡は1930、40年代のものとは比べると、純粹で、少なくとも政治面の影響を強く受けていなかった。それ故、この時期において在満日本人に構築された中国像は政策宣伝の影があるが、多彩かつ新鮮でもある。

民謡②⑤⑧は中国人の価値観を表しているものであり、民謡②からは勤勉至上、民謡⑤からは金銭至上、民謡⑧からは中国人の階級観念がそれぞれ見られる。労働民謡の写実的な描写に対して、価値観を表す民謡は一般的に言えば、「比・興」（メタファー）の手法を用いる。例えば、以下の民謡②のように、動物間の会話を借りて人間の価値観を示している。

羊をなぜ殺さないのだ／羊は答へる「私の毛は年年たくさん剪られるのだ、鵝鳥を何故殺さないのだ」／（略）／馬は答へる「どうしてどうして人間を乗せるのだ、牛を何故殺さないのだ」／牛は答へる「田も耕せば仕事もしている、何故豚を殺さないのだ」／豚は答へる「けふは諸君がすつかり快活なのに、なぜ俺ばかりを殺そうといふのだ」²⁶

民謡③⑦⑩は中国の家長制を反映している。民謡③の「いそがしい妻」を見ておきたい。

一ついそがし 門あけ戸あけ、明るくなつた。／（略）／九ついそがし あちらこちらの寺まわり、珠数もばらばら／十いそがし 閻魔大王へお見えしたく、なむあみだぶつ。²⁷

一から十まで妻の「いそがし」を数え続けたこの民謡は家長制の下の女性が如何に低

25 注24に同じ。

26 「どうしておればかりを殺そうとするのだ」『満蒙』(109) 中日文化協会、1929年5月、p.1。

27 「いそがしい妻」『満蒙』(110) 中日文化協会、1929年6月、p.1。

い階層に立っているのかを反映している。同じように、1929年10月号に掲載された京兆地方の民謡「娘の嫁入り」の中には「二度と帰るな嫁女ちゃゆけいよ。驢馬はほしいが娘はいらぬ」という一節があり、娘を軽視している父親の姿が読み取れる。これらの民謡を通して不公平な社会制度をもつ中国像を作り上げたのである。

労働・生活を表す民謡、価値観を表す民謡、家長制を表す民謡、この三種類の伝統的な民謡に対して、社会の新しい状況を表す新詞類民謡は、戦前の中国の社会をより深刻に反映しているといえよう。例えば、民謡⑨は当時の政治と関わって「土匪」が出没する中国像を描き、当時の社会状況の変化を表す新詞類民謡である。

伝統的な労働民謡から社会状況を深刻的に反映する新詞類民謡まで、広い範囲で中国民謡を網羅する在満日本人の研究は、戦前戦時下の中国社会の実態を人々にイメージさせたのである。あるいは少なくとも、民謡から中国の全体像を想像する空間を作り上げたとはいえよう。

「田家の四季」、「漁翁楽」のような労働民謡は安楽な中国像を示し、「どうしておればかりを殺そうとするのだ」のような生活民謡は勤勉、金銭至上等の価値観を表し、中国人のイメージを作り上げている。「中華国」に「土匪」が出没する場面を描き、「乱暴」な中国像も作り上げた。これらの民謡は様々な中国像を示し、中国を発見する機能を果たしていた。

4 満洲新民謡の風景

中国民謡の研究の深化に伴い、一つの新しい研究ジャンルとして満洲新民謡が現れた。瀬口秀郎、稲川浅二郎、加藤郁郎らは満洲新民謡の研究者として次々と登場し、多くの満洲新民謡を翻訳し、「満洲」社会の特有な風景を呈したのである。

1927年6月号には瀬口秀郎の訳した「満洲新民謡集」が掲載され、「磯の姑娘」「花頃」「馬肥草」「小娘」「杏花散」「明滅」「世捨人」「絹布売り」「曠野の午後」「丘の棗」という10首の満洲新民謡が紹介されている。瀬口によって在満日本人の中国民謡の研究は一層細分化され、満洲新民謡が人々の視野に入ってきた。中国全土の民謡と違い、満洲民謡だけにある独特な風景は瀬口らの満洲民謡の研究活動によって可視化されるようになった。

瀬口の「満洲新民謡集」は「満洲」の娘のさまざまな姿態を私たちに示している。新民謡の内容は当時の「満洲」における女性の社会地位を反映している。しかし、これまで論じてきた中国民謡の中に現れた女性の低い社会的地位に対して、瀬口の翻訳した「満洲」の新民謡は娘たちの勤勉さ、勇敢さ、可愛さを賛美したものが多い。そのなか

ら、「磯の姑娘」という民謡を挙げてみよう。

磯草は昼顔の花かよ／風もいとはぬ／雨もいとはぬ／船もこぎます／潮もくみます／けふはとなりの驢馬でさへ／まなこかくしされ麦粉ひき／妾しや傳家庄の磯そだち²⁸

「満洲」の娘は自分を「磯草」に喩えている。「風もいとはぬ、雨もいとはぬ。船もこぎます、潮もくみます」という表現からは当時の「満洲」に暮していた女性が強い自我意識をもっていたと感じられる。つまり、「満洲」の女性が「主体性」を持っていたことが瀬口の新民謡から読み取れるのである。ここでいう「主体性」とは、自分自身の存在を意識しながら積極的に行動することである。これまで論じてきた民謡の中では、家長制下の女性は殆ど自我意識がなく、受動的であった。当時、女性が軽視されることは一般的であった。瀬口の満洲新民謡にある活発な女性の形象に比べると、稲川の訳した「満洲」の伝統的民謡の中には女性の「主体性」が見えない。1929年6月号に掲載された「趕廟」という民謡を見ておきたい。

四月の二十八日は、娘々廟のお祭りよ。／一家揃つて香を焚く、子供授かるその為。／寡婦の私が香を焚く、何の為だか分らない。²⁹

この民謡に対して、稲川は、当時の中国では一度結婚した者はもちろん、まだ婚約の間柄であっても夫と定めた者が死んだならば、どんなに若い女でも再び他の男と結婚することは非常な罪悪とされ、物心のつかない幼い時に親同士で定めた相手が死んだために一生独身で暮さなければならぬ女はたくさんいたと述べた。娘々廟は中国の縁結びの神様であり、また子供を授ける神様とされている。寡婦であって何の為に娘々廟のお祭りに行って香を焚くのか分からないにもかかわらず習慣通りに行動している「私」には、反抗するという行動力がない。瀬口が「満洲新民謡集」の中で示した娘たちのような強い「主体性」は「趕廟」の「私」の身からは感じられない。

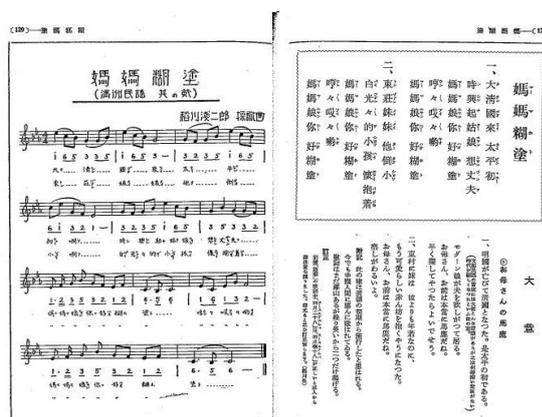
瀬口の新民謡に対して、稲川浅二郎の研究した「満洲」の民謡はほとんどが伝統的なものである。しかし、彼は歌意を考究するだけでなく民謡のメロディーにも関心を寄せていた。図1-1のように、民謡の歌意を説明すると共に紙面に曲譜を付けている。

また、稲川の満洲民謡の研究は伝統物、歴史物が多く、「満洲」の歴史を認識する知

28 「磯の姑娘」『満蒙』(86) 中日文化協会、1927年6月、p.135。

29 「趕廟」『満蒙』(110) 中日文化協会、1929年6月、p.122。

識体系を構築しようとする意図が含まれている。1929年7月号に掲載された「お母さんの馬鹿」を読解する際に述べられた「民謡は清朝の初期から流行したものであると思われる」³⁰という歴史的考察にはこの傾向がみられる。稲川による中国民謡の研究は内容的に時代性を欠いていたが、「満洲」の歴史の考察から言えば、特別であった。



〔図 1-1〕『満蒙』1929年7月号「媽媽糊塗」

加藤郁哉は在満日本人を描写する民謡に興味をもち、多くの満洲新民謡を翻訳した。1929年3月号、4月号及び6月号に掲載された「満洲民謡集から」では満洲の新民謡を三回連載し、「満洲」にいる日本人の姿を示していた。例えば、日本娘子軍³¹に関する民謡として挙げられた「千里の野火」は「満洲」にいる一部の日本人女性の生活を反映し、「国のたより」を知りたいという「日本娘子軍」の故国日本に対する深い思いを表している。

くれりやちろちろ／千里の野火よ／わたしや野に咲く／エ、ねぢあやめ／野火はちろちろ／鏡にちろちろ／国のたよりも／あれきりやんで／今ぢやちろちろ／阿片をこがす³²

もう一首の民謡、「燕人群」は当時の「満洲」に渡る日本人の期待と不安を反映している。

あすは著くのか／甲板（デッキ）の板目／日がな日の下／夜は星の下／荒れた海原／耕すやうな／辛い生計が／待つのもぢやないか／桃の季節に／戦争が三年／息子とられた／あの土地すてて／ひらり、くらりと／満洲へ渡る／つまされ燕に／身が細る³³

30 「お母さんの馬鹿」『満蒙』（111）中日文化協会、1929年7月、p. 128。

31 日本娘子軍とは19世紀の後半に東アジアと東南アジアに渡って娼婦として働いた日本人女性のことを指す。こうした日本人女性の海外渡航は当初世論において「娘子軍」として喧伝されている。

32 「千里の野火」『満蒙』（108）中日文化協会、1929年4月、pp. 126-127。

33 「燕人群」『満蒙』（110）中日文化協会、1929年6月、pp. 118-119。

加藤の訳した満洲民謡は、当時の日本人の渡満や在満日本人の現実生活等を反映していた。「満鉄」の設立をきっかけにして仕事のチャンスが増えると共に、日本人の渡満の波を迎えてもいたのである。夢があれば不安もある当時の「燕人群」と言われた渡満日本人はこの波に乗ったのである。

瀬口秀郎、稲川浅仁郎、加藤郁哉らが訳した満洲民謡は特別な「満洲」像を作り上げた。しかし、掲載された民謡の内容から見れば、その考察の目的は変わっていないことがわかる。つまり、中国の国民性を考察するという民謡の機能は在満日本人にまだ重視されていたのである。

5 新詞類民謡の抵抗

1930年代に入り、特に1931年に「満洲事変」が勃発した後、在満日本人による中国民謡の研究は政治的な影響を強く受けたため民謡の社会的な機能がますます強くなり、社会の新状況を反映する新詞類民謡は一層増えた。1920年代には日本人が中国の新詞類民謡の中に登場し始めていた。前に言及した「日本人」といった民謡がその例である。この民謡は当時の、「支那」で起こった「排日」の風潮を反映している。訳者のJ.M.生のこの新詞類民謡に対する読解は非常に興味深い。

排外思想は年と共に旺んになって行くは明らかであるが、私はそれよりも何時まで経っても植民地に在る日本人の尻の穴の小さいことを痛感するものだ。大体幾ら感ぐろい日本人でももう支那の排日の原因が奈辺にあるかぐらい感付いてもよかりそうなものだ。排日の原因は一は勿論政治に根底をおくもので旅大問題がその最大なるものではあるが、これは理論的に論拠を有つものであれば、それが為の排日は毫も恐れるところに非ず腑仰恥づるところは無いものである。³⁴

「植民地に在る日本人の尻の穴の小さいことを痛感するものだ」、「日本人」の「奈辺にある」というJ.M.生の「良心」的な論説と姿勢が明確に見える。しかし、1930年代に入った後、『満蒙』におけるこのような民謡の掲載はごく稀になり、公正な姿勢を取って中国民謡を論じる説は見えなくなった。例えば、1930年6月号の巻頭に「東洋貨」という短い童謡があるものの、その「日貨排斥」の原因を明確には伝えていない。

34 注14に同じ、p. 118。

東洋貨、不耐久、早上買来、夜裏破。／那像我們中国貨、用了一世也不破。³⁵

歌意は以下の通りである。「日本品は永持しない、朝買って来て晩には破ける。どうして我が支那品とくらべものにならう、一生着ても襤褸にならむ、一世用つても毀はれはせぬ」（『満蒙』同号掲載）。当該号の編集者は「支那の日貨排斥の宣伝が、幼弱な小学児童の頭にも痛々しく深く沁みている」と指摘している。ここから、中国の排日思想の高まりの原因を「支那」の「宣伝」によるものと無理に理由づけている傾向がうかがえる。また、1933年1月号には羽阜生（生年等不詳）の訳した「満洲歌謡集」が掲載され、その中に収録された「外国帽」という新詞類民謡が「支那人」の眼の中にある日本人の様子を表している。

外国帽頭上戴／金縁眼鏡眼上跨／糯米牙鑲金牙／文明棍手中拿／阿殺西手極挾
／日本洋火一扑拉／开口先説日本語／罵人叫巴哈／吃飯叫米西／臨走給个大嘴巴³⁶

「中折帽子を頭に戴せ、金縁眼鏡を鼻にかけて、細い揃った歯に金歯をはめて、ハイカラなステッキを手にもって、指の間に「朝日」を挟み、日本のマッチでパッと火をつけて、口を開くなり日本語をお喋り、人を罵るに「馬鹿」といひ、御飯をたべることを「メシ」といふ。そして終ひにはピシヤリと頬をつなぐって飛んで行く」³⁷と羽阜生が日本語に訳し、「日本語の片言を覚えて、生意気な格好して威張り散らす満洲人を描写したもの。満洲に日本の勢力が入り込んだ頃、此種の満洲人が多かつたのであらう」³⁸と述べた。「生意気な格好して威張り散らす満洲人」という偏見を含む読解は日本人の立場から来たと言えるだろう。

「満洲国」成立後に中国で新しく作られた新詞類民謡は当時の社会状況と深くかかわり、抵抗の一面がますます強くなった。新詞類民謡はほとんどが当時の在満日本人に無視され、雑誌などにデビューする機会も見つからないほど少なかった。即ち、新詞類民謡は在満日本人に、無視されていたといえる。雑誌や新聞などに掲載された僅かな新詞類民謡はその真意が日本人に歪曲され、民謡の「外国帽」のように「満洲人」の「威張り散らす」姿を批判する手段として「利用」されていた。

1930年代の新詞類民謡については、当時の中国側の言説、あるいは戦後日本の一部

35 「支那小学児童の排日思想」『満蒙』（122）中日文化協会、1930年6月、p.1。

36 羽阜生「満洲歌謡集」『満蒙』（153）満洲文化協会、1933年1月、p.170。

37 注36に同じ。

38 注36に同じ。

分の言説の中で以上の読解と異なる論も見出すことができる。例えば、田久川の論文「簡論大連地区反対日本殖民統治的詩詞歌謡」の中には当時の多くの新詞類民謡が収録されている。その中の一つの民謡から見ていきたい。

哇来哇来哇，一日三餐苞米渣。哇来哇来哇，王道楽土不知道。³⁹

この新詞類民謡の第一、第三句の「哇来哇来哇」は日本語の「われわれは」の音訳である。

歌意は以下の通りである。ある日、一人の日本人の官僚が下の村へ「巡視」しに来て「民情」を視察すると共に「王道楽土」を宣伝する。彼は村の人に「君たちは何を食いますか。以前より今の暮らしはどうですか」と聞いた。村の人の中に日本語を少し話せる人がいる。すぐ「われわれは、一日三餐苞米渣」と答えた。「われわれの今の暮らしは苦しくて、一日三餐は苞米渣（トウモロコシのお粥）を飲むしかない」という意味である。日本人の官僚はこの返事を聞き、すぐ「今、一日三餐は苞米渣を飲むしかないが、もうすぐ白ご飯を食べられますよ。われわれは王道楽土を創っていますから。皆さんは知っていますよね」と言った。この時、村の人々は皆笑った。「われわれは王道楽土不知道（知らない）」と返事をした。この新詞類民謡は当時の日本人の言う「王道楽土」を風刺しているのである。

新詞類民謡は日本帝国主義が「満洲」に行った「日本語教育」の様子も反映している。民謡の中には日本語が交じった多言語混用の表現が多く見られ、一般的であった。例えば、前に述べた「外国帽」の中に出てきた言葉「阿殺西」、「巴哈」、「米西」はそれぞれ「朝」、「馬鹿」、「飯」の音訳である。当時の日本帝国主義による日本語教育に対して中国人は抵抗していた。その抵抗の状況も新詞類民謡の中に痕跡を残している。

日本語，不用学，再過三年用不着；日本語，不用听，再過三年全得扔；日本語，不用練習，再過三年全得变。⁴⁰

この民謡を日本語に訳すると、「日本語を学ぶ必要はない、三年後使えないよ；日本語を聞く必要はない、三年後捨てられるよ；日本語を練習する必要はない、三年後変わるよ。」（筆者訳）

39 田久川《簡論大連地区反対日本殖民統治的詩詞歌謡》《中日关系研究的新思考——中国东北与日本国际学术检讨会论文集》辽宁大学出版社，1993年2月，p.123。

40 注39に同じ。

この民謡に対して、田久川は「戦前、日本の近代教育は軍国主義に満たされていた。一方、その植民地には遂行した近代教育は赤裸裸な「奴化教育」であった。その目的は教育の手段を使って根本から他国を征服し、或いは亡ぼそうとする」⁴¹と述べている。日本は中国の大連を占領した後にこの「奴化教育」を開始し、その重要な内容として学校では日本語教育を実施したのである。

在満日本人によって翻訳、紹介された中国民謡には、文化的な手段として中国の一般の民情を深く考察し、日本帝国主義を鼓吹していたという面がある。1930年代に入ってから多くの「抵抗」的な新詞類民謡が作られたが、もちろん、その大部分は翻訳されずに中国語のまま中国人の間で歌われていた。新詞類民謡は社会の現実状況に最も接近し得る民謡であり、当時の中国人にとっては一種の抵抗の武器であったと言ってもよい。

在満日本人によって外された「抵抗」的な新詞類民謡は、当時の中国社会に存在した新詞類民謡の大部分を占める。それに対し日本人によって翻訳、紹介された「鼓吹」の民謡は全体からすればごく一部であった。そう考えると、在満日本人による「鼓吹」と中国人による「抵抗」という二項対立の民謡の機能を見出すことができる。J. M. 生の『支那の民謡』で書かれた言葉を借りれば、「政治と民謡は何国に於ても相離れない関係を持つものであるが、それも多くは悪罵か賛美かの両極端に限られているやうである」⁴²ということになる。

おわりに

雑誌『満蒙』には多くの中国民謡が掲載されている。これらの民謡はさらに在満日本人によって工夫され、中国の事情、特に国民性を考察する手段として使われていた。1920年代から終戦までの戦前戦時下の在満日本人による中国民謡の研究は「満洲国建国」を境目として二つの時期に分けられる。

前期は国民性を調査するために中国全土の民謡を研究する1920年代であり、後期は「民族協和」「王道楽土」を鼓吹する満洲民謡を主に研究する1930、40年代である。また、前期においては、在満日本人は中国民謡で「安楽」な労働生活、「勤勉至上」「金銭至上」の中国人の価値観、戦時下の不安定な中国などといった中国像を作り上げた。これらの中国像は不完全であるように思われるが、一種の新鮮味が溢れ、また政治からの影響が強くなかったため、多彩である。

41 注39に同じ。

42 注14に同じ、p. 116。

一方、後期においては主に満洲の民謡を中心に紹介し、その中には中国人の排日に抵抗する在満日本人の見解が読み取れる。在満日本人は中国民謡から全体の中国像を捉えようとしたが、日本帝国主義の進展に伴い新詞類民謡がほとんど無視され歪曲されるようになったため、結局完全な中国像は捉えられなかった。しかし、これらの無視された新詞類民謡は中国人の間で歌われ、日本帝国主義が宣伝した「王道楽土」を風刺するなど抵抗の手段として使われていた。一言でいえば、1920年代には中国民謡の機能は主に在満日本が中国の国民性を考察する手段であったが、1930年代に入ってから中国民謡、特に新詞類民謡はかえって中国人が日本帝国主義に抵抗するための道具になったのである。

第2章 翻訳手法から見た「支那趣味」

——柴田天馬の和訳『聊齋志異』

はじめ

日本において、中国怪異小説集『聊齋志異』（以下『志異』）に関する研究は非常に多い。特に『志異』の翻案や翻訳などに関する考察が多くなされている。翻案では、尾山真麻の「太宰治「竹青」論——『聊齋志異』と比較して」（『文学研究論集』（47）、2017年9月）や張文宏の「佐藤春夫における『聊齋志異』の翻訳・翻案の態度——芥川龍之介と太宰治との比較を通して」（『皇学館論叢』44(6)、2011年12月）などがある。張文宏が「特に「支那趣味」の濃い佐藤春夫は『聊齋志異』を典拠に「緑衣の少女」（大正11年）を創作して以来、晩年に到るまで中国古典に材を採った翻訳・翻案小説を数多く出版されている〔ママ〕」と述べたように、佐藤春夫は『志異』の翻案の優れた人物と評価されている。また、芥川龍之介（「酒虫」「仙人」の翻案）、太宰治（「清貧譚」の翻案）も『志異』の翻案者として挙げられる。一方、佐藤と同時期の翻訳者として最も有名な人物は柴田天馬である。天馬訳の『志異』に関する研究成果は極めて少ないが、『志異』の研究の中では天馬訳の成果を見ることができる。千田九一は「翻訳文学としての『聊齋志異』」の中で以下のように述べている。

中国文学は、——新しい現代文学は一まず別として——日本人には原文でも一応読める。とりわけ『聊齋志異』のような文語体のものは、漢文学習の力でかなりの程度まで読める。（略）そして、そのために、原文そのもののもつ格調、漢字そのものから受け取るイメージやニュアンスからなかなか脱れきれなくなっているのです。だから、柴田氏のような風変りな訳が現れ、存在するのだろうと思います。

1

千田の指摘のように、天馬の「風変りな訳」は日本人に『志異』を支障なく読ませる一方で、原文の漢字を残したことで、漢字そのものからのイメージやニュアンスも感じられるようになっていく。ルビと訳注を併用する天馬の仮名まじりの訳し方は特徴的であり、そこには非常に重要な意味が見いだせる。天馬訳の全訳本と撰訳本のほとんどは戦後に出版されているが、その翻訳作業は戦前戦時にはすでに終わっている。

1 千田九一「翻訳文学としての『聊齋志異』」『国文学解釈と鑑賞』18(9) 至文堂、1953年9月、p. 42。

天馬は1905年に「満洲」に渡り、「満鉄」に勤務する間に『志異』に傾倒し、その翻訳活動を始めた。1927年から雑誌『満蒙』を舞台として『志異』の翻訳を連載し始めた。天馬訳の『志異』はその「文化の開発」の一環として、『満蒙』に登場し、1943年の終刊まで連載が続いた。

『満蒙』においては日本語に訳出された中国の文学作品がよく見られるが、『志異』のような長期間の連載は他にはない。本章における最大の問題意識は、天馬訳の『志異』がなぜ掲載を続けられたのか、という点である。実は、天馬訳の『志異』は「支那趣味」を宣伝する手段として利用され、「文化の開発」という雑誌の編集方針と合致していたのである。ほかの翻訳作品と違いルビと訳注を併用する訳し方は、新鮮であるとともに「支那趣味」をいっそう強める。したがって、「支那趣味」を宣伝する雑誌『満蒙』の方針に天馬訳の『志異』は親和性があったといえよう。また、ルビと訳注を使うことで、物語には表されていない中国の多彩な典故や伝統も紹介され、中国の国民性を探究するという目的も読み取ることができる。本論では天馬訳の『志異』に用いられたルビと訳注の役割を検討する。

1 『志異』の翻訳史と柴田天馬

『志異』は、清代に蒲松齡によって執筆されたもので、中国怪異小説の最高峰であると言われている。日本には『志異』は江戸時代の後期に伝わったが、本格的な翻訳が始まるのは明治に入ってからである²。その後、多くの近代作家や翻訳者に親しまれ、『志異』の翻訳と翻案が続いた。その中では、佐藤春夫、柴田天馬、村上知行、増田渉、藤田佑賢が特に有名である。

日本における『志異』の翻訳史を遡ってみると、最も早い翻訳は、神田民衛の訳した『艶情異史』（1887年）である。また、翻訳雑誌『しがらみ草紙』（1890年1月号）に掲載された、森鷗外の妹・小金井喜美子による「革一重」（「画皮」）も最初期の『志異』翻訳である。³さらに、天馬の『和訳聊齋志異』（1926年）が東京第一書房によって出版される前には、蒲原有明の『聊齋志異八編』（1905年）、国木田独歩らの『支那奇談集』（1906年）、木下杢太郎の『支那伝説集』（1921年）、佐藤春夫の『玉簪花』（1923年）などが出版されている。

1952年、天馬訳の『聊齋志異』（全10冊）が東京創元社より出版された。その後、

2 野寄勉「小説家が好きな『聊齋志異』」『アジア遊学』(71) 勉誠出版、2005年1月、p.97。
3 李故静《『聊齋志異』在日本的流变史》《戏剧之家》2016(22) 湖北省戏剧家协会、2016年11月、p.245。

『志異』の翻訳に携わる者は増え、さまざまな訳本が現われた。その中の一つ、藤田佑賢訳の『聊齋志異』（1967年）は東京盛光社によって出版され『中国文学名作全集』に収録されている。増田渉、松枝茂夫らが訳した『聊齋志異』（東京平凡社、1970年—1971年）は『中国古典文学大系』（40、41）に収録されている。藤田は「とくに増田渉氏のものは、現代的感覚の香りの高い正確な訳で、文庫本として柴田の訳と共に最も広く読まれている」⁴と増田らの訳を評価している。また、藤田は「わたくしの訳は、柴田天馬氏の訳にお陰を蒙っているところが多い」とも述べている。

従って、戦後に展開された『志異』の翻訳には天馬訳からの影響があると言える。天馬訳の『聊齋志異』が東京創元社から出版されて以降、多くの出版社は天馬訳の全訳、あるいは撰訳を出版するようになった。『聊齋志異撰読本』（全2冊、東京文芸社、1955年～1956年）、『完訳聊齋志異』（全7冊、東京角川書店、1955年～1956年）、『定本聊齋志異』（全6冊、東京修道社、1955年）、『定本聊齋志異』（再版）（全4冊、東京修道社、1967年）などがその例として挙げられる。

天馬訳は非常に個性的である。特にルビ付けと訳注の使用は、日本における『志異』の翻訳史の中で特別な存在であると言える。南條竹則は「解説 柴田天馬の『聊齋志異』」の中で、「柴田訳を読んだ人は、誰しもそのルビの独特な使い方に強い印象を受けるだろう。わたしはこの翻訳を、日本語に於けるルビ文化の金字塔と言ってかまわぬと思う」⁵と、天馬の意味ルビの使い方を高く称賛している。

ここで柴田自身について少し確認しておく、柴田天馬（本名一郎）は1872年10月3日に鹿児島市薬師町に生まれた。彼は神田共立学校卒業後に東京法学院（中央大学の前身）に入学し、文学同好の友人として川上眉山らと知り合い刺激されて文学に興味を持つようになり、また玄洋社同人として文芸雑誌『千紫萬紅』に投稿したこともあり、1905年4月に天馬は内地から離れて朝鮮新聞特派員として「満洲」の安東に渡り『安東新聞』の編集長を務めてこの時期に俳句等の韻文に親しんで和歌や自由詩、新体詩など広い範囲にわたって作品を発表した。⁶そして、天馬は漢詩も嗜み漢語の造詣も非常に深く、後の『志異』の翻訳に役に立ったのである。同年夏、天馬は安東の旅館で偶然『志異』に出会ったのである。この出来事について彼は自著『聊齋志異研究』の中で次のように語っている。

4 増田渉・松枝茂夫訳『聊齋志異』（上）（中国古典文学全集 32 巻） 平凡社、1958 年、p. 436。

5 蒲松齡著・柴田天馬訳『和訳聊齋志異』筑摩書房、2012 年 5 月、p. 398。

6 西孟利『満洲芸術壇の人々』曠陽社、1929 年 9 月、p. 159。

明治三十八年の初夏。鴨緑江を渡って安東の旅館に投宿した余は、退屈だらうと
いつて、旅館の主人が貸してくれた幾冊かの小説を見て主人に訊いた。(略)水滸、
西遊、両漢、三国、西湘、紅樓、兒女英雄、平山冷燕、いづれも読み飽きたものゝ
中に、まだ通読してゐない聊齋志異が雑つてゐた。「では、これを貸してください」
と借りうけて読んでみると、長たらしくもなく、小うるさくもない、中、小篇の怪
奇、情癡談が、千変万化の健筆で書かれてゐる。まるで宝石箱をひつくりかへした
やうに、燦然として眼もくらむほどである。これは一読して抛りだす本ではないと
思ひ、翌日町の書肆から一部の鉛印本を買ひ求め、窓前、灯下、閑さへあれば読み
耽つた。はやくも聊齋癖者になつてしまつたのである。⁷

「聊齋癖者になつてしまつた」天馬がやがてその翻訳を始めることになつたきっかけ
は、「満鉄」への入社である。天馬は1909年に調査課に配属され大連に転居し、その
後また総務人事に転じ、1918年に社命を受け取締役支配人として「満洲日日新聞」に
入社した。⁸1925年の夏に天馬は「満鉄」の仕事を辞め、閑雅な生活を送りつつ『志異』
の翻訳に尽力することになる。この経歴からみると、天馬の「満洲」における活動の主
な拠点は、大連であることがわかる。

天馬は「満鉄」に入社した後、読書会雑誌を編集することになった。そしてその頃で
「學術雑誌で興味索然たるものであつたから、彩りに、聊齋志異の中から、毎号一篇づ
つを訳載した」⁹というように『志異』の翻訳の連載を始め、天馬は三十数篇をほぼ完
訳した。これらの訳作は単行本（『和訳聊齋志異』）として1919年に東京の玄文社に
よつて出版された。これは日本で最も早い天馬訳の『志異』である。

『和訳聊齋志異』の出版は、凶らずも天馬が『志異』の全訳を志す重要な転機となつ
た。1923年の関東大震災の後に創業した第一書房は『全訳聊齋志異』の出版を天馬に
要請した。1933年に『全訳聊齋志異』の第一巻が無事に発行された。しかし当時の日
本では『志異』は「猥本」と思われ、発売禁止の憂き目に遭つた。『志異』の全訳を母
国の日本で出版しようという天馬の願ひは叶えられず、天馬は日本で出版する機会を待
ち続けたが、終戦までに日本内地での出版が実現することはなかつた。内地の出版の難
航を反動とするかのように、天馬は中国の大連という場所で『志異』の翻訳を発表した。
その発表の舞台こそが、大連で創刊された日本語総合誌『満蒙』である。

7 柴田天馬『聊齋志異研究』創元社、1953年11月、p. 99。

8 蒲松齡著・柴田天馬訳『完訳聊齋志異』角川書店、1969年-1970年、p. 678。

9 柴田同書、p. 100。

2 『満蒙』から見る天馬訳の時代性と国民性

『満蒙』の第82号（1927年2月）に掲載された「十四番目の娘」¹⁰という『志異』の物語から天馬訳『志異』の連載が始まった。ここから『満蒙』の終刊の1943年まで、その連載が途絶えることはなかった。『満蒙』はその過程で「満洲国」の成立、第二次世界大戦の勃発などの大きな歴史事件はもちろんのこと、満鉄文壇の出現、在満日本人による満洲文学の発展、及び1940年代の各雑誌の廃刊をも目撃することとなる。時代の変化に伴い、『満蒙』に掲載された天馬訳の『志異』の時代性も変わっていく。掲載当初から廃刊までルビと訳注を併用する特徴は変わっていないが、訳文の長短や、ルビと訳注の内容には差異が見られる。大まかに天馬訳の時代区分を試みると、三つの時期に分けられる。即ち、「満洲国」成立前の満鉄文壇発展期、「満洲国」成立後の満洲国文学の最盛期、そして1940年代の衰退期である。

「満洲国」成立前の満鉄文壇発展期は、『満蒙』の投稿者の多くは満鉄社員及び満鉄関連の人である。この時期の特徴としては、まずは「支那趣味」とかかわる調査が多いことであった。その影響からか、この時期に掲載された天馬訳の『志異』の物語は長文が多く、ルビと訳注の中で中国の詩歌と典故が紹介されることも多い。最初に掲載した「十四番目の娘」を例としてみれば、まず掲載のスタイルは、本誌に掲載された他の文章とは違い、旧五号組み、毎行罫線で文字を囲むという古書的なデザインである。このようなデザインにより、天馬訳の独自性——ルビと訳注そのままの掲載が可能になった。「十四番目の娘」は、23枚と他の文章よりも非常に長い。それに加え、文末に翻訳と関わる裴航と雲英の物語を注として付けている。しかしこの時期には、ルビの使用は多いものの、訳注は少ない。「十四番目の娘」の訳注は一つだけである。従って、「満洲国」成立前の1920年代は天馬の『志異』の訳し方は未熟であり、特徴であるルビと訳注を併用する形は完全には確立していなかったといえる。

「満洲国」成立後に掲載された『志異』の物語には訳注が増え、そこには中国の典故以外にも、中国の歴史、人物、文化伝統などを紹介するものも現れた。訳注の数は少なくとも一篇の中で十箇所に及ぶ。この時期において、ルビと訳注を併用する翻訳のスタイルが確立されていった。天馬の『志異』翻訳の最盛期である。さまざまな訳注が付けられることで、文脈の理解に役に立つだけでなく、中国の歴史、文化、伝統習慣の紹介も同時に行われている。例えば、「怪しい娘」（『満蒙』第152号、1932年12月）

10 「十四番目の娘」は狐の父親と十八人の姉妹と一緒に暮らして人を助け仙人になることを志す、善良な心を持つ辛十四娘の物語である。

の中の「纏頭」という言葉に対して「むかしは芸者をよんで其の歌舞がきにいると錦のきれを頭にのせて祝儀としたので、妓女に祝儀をやることを纏頭といふやうになつた。有名な白居易の琵琶行にも、五陸年少争纏頭、一曲紅絹不知数とある」¹¹と注釈がつけられている。この訳注によって「纏頭」の由来とその習俗が読者に明らかになる。従つて、「満洲国」成立後の1930年代には、天馬は『志異』を翻訳すると共に中国の文化、伝統民俗を紹介するという役割も担つたのである。つまり、『志異』は日本人が中国を理解する一つの手段として翻訳されていると言える。これも天馬訳の『志異』の特徴である。

1940年代に入ると、戦争のため紙の使用量が限られていく。それゆえ、『志異』の掲載には長文のものがほとんど見当たらなくなる。特に1937年に「支那怪奇譚」という欄が新設されて以来、この時期には幾つかの短い物語をまとめて掲載するのが主流になりつつあった。1942年8月号に掲載された「支那怪奇譚」は「狐異七題」という題名で7篇の短い物語を紹介している。それに、ルビと訳注の数も減った。ルビと訳注は文脈を理解するためだけに使われるものになったのである。

さらに『満蒙』にとっては、天馬訳の『志異』が中国の「国民性」を宣伝するものであった。掲載当初から天馬訳の『志異』は編集者に重視されていた。『志異』が継続して掲載されるにしたがつてその評価も『満蒙』の中で見られるようになる。

前述のように、天馬は内地の日本で『全訳聊齋志異』を出版しようとしたが、「発禁」に遭い、結局実現できなかった。このエピソードについては、『満蒙』の編集者であった那迦三蔵が、「かくして柴田さんの聊齋和訳第一巻は全八巻のトップとして出版されたが惜しい哉、発禁となつた。検閲官八名が各自に検閲したが矢張り駄目だつた。発行元としても可成りの犠牲ではあらうが、改訂版として引き続き発刊される筈。菊版三〇〇頁、定価金二円五十銭、ご希望の向は協会でもと取次する。『満蒙』を母胎とする聊齋和訳のつつがない発展を希望する」¹²と言及した。那迦の言葉からは、その評価の姿勢が窺える。『満蒙』の第225号（1939年1月）の編集後記の中で、当時の『満蒙』の編集者である武田豊市は天馬訳の『志異』に「柴田天馬氏の如き、十数年に亘って一回缺かさず、名翻訳を提供せられましたことは恐らく雑誌界での特異なる記録であらうと存じます」¹³と高く評価している。

1927年2月の初掲載から1943年の終刊まで、天馬の寄稿は一度も中断することがなかった。これに関しては、天馬自身も「大連に中日文化協会といふ満鉄背景の機関があ

11 柴田天馬「怪しい娘」『満蒙』(152) 満洲文化協会、1932年12月、p. 174。

12 那迦三蔵「『聊齋』と柴田さんの翻譯」『満蒙』(164) 満洲文化協会、1933年12月、p. 210。

13 武田豊市「編集後記」『満蒙』(225) 満洲文化協会、1939年1月、p. 210。

って、満蒙といふ雑誌を発行してゐる。其の編集長をしてゐる中溝新一君が矢張り聊齋癖の一人で、毎月やかましく志異の訳稿を余に催促し、旧五号組み、毎行罫線入り、凸版の図詠に挿入して、何年も満蒙に連載した。よく飽きもせずに掲載し飽きもせず訳しつづけたものだとおもふ¹⁴と語っている。

天馬の言うように、『志異』の掲載が続けられたのにはまず、当時の編集長である中溝新一との深い関係がある。しかしその理由というのは、「其の編集長をしてゐる中溝新一君が矢張り聊齋癖の一人」だったという中溝の個人的な趣味にあっただけではなく、『満蒙』の刊行方針からも考えることができる。『満蒙』の創刊十五周年に発行され特集記念号（第185号）の中で中溝新一は、「柴田天馬氏の『聊齋志異』を忘れてはならない。本書は支那怪異談中の随一とされ全十六巻、百四十四篇からなり、鬼狐仙怪に寓して、明末清初の風俗習慣を語り、今日の支那国民性を知る上に重要な根底を為すものであることは本誌読者の最早御承知のところであらう¹⁵と記している。この一節は、天馬訳『志異』が「支那国民性」と関わっていることを明確に指摘している。もっとも、「満鉄」の干渉の下で発刊された『満蒙』はいわゆる「文化の開発」を目指していたため、その誌面に載せられた『志異』が中国の国民性を発見するという機能をもつことは当然ともいえる。

それに、天馬自身も「東大の呉博士から、貴訳聊齋志異を読んで大参考になつた。葛の葉物語りなどは全く支那からきたものだといふ聊齋を読んで確めた。といふやうなはがきを寄せられたことがある。聊齋志異の翻訳が、精神病学に貢献しようとは予の思ひもよらぬ所であつた。（略）予はこの四百四十六則の怪奇談から、支那の国民性を抽出することに足る十二分の材料を得たことを喜ぶものである¹⁶と述べている。こうして考えてみると、文学作品であると共に、日本人が中国の国民性を知るための媒体という役割によってこそ、『志異』が『満蒙』の編集者に重視され、『満蒙』の終刊まで掲載を続けられたのではないかと思われる。

『志異』自体がその内容によって中国の国民性を表す代表作の一つであった一方で、天馬自身による中国の国民性を伝える翻訳の工夫も読み取れる。『満蒙』の発刊より早く始まった天馬の『志異』の翻訳活動とその特徴は、当時の特殊な時代状況にも刺激されていた。大正末期から昭和初期にかけて、つまり1920年代においては、「あらゆる文芸流派を越えた作家たちが猟奇趣味を加味した怪談文学に、こぞって筆を奮い、一大ブームを呈していた時代であり、それに加えて、濃厚な「支那趣味」の影響下にもあつ

14 柴田同書、pp. 103-104。

15 中溝新一「編集私記」『満蒙』（185）満洲文化協会、1935年9月、p. 8。

16 柴田天馬「聊齋志異餘滴」『満蒙』（111）中日文化協会、1929年7月、p. 124。

た」¹⁷のである。即ち、当時の「満洲」に渡った天馬も「支那趣味」を加味しながら、翻訳活動を始めた可能性があるのである。その最も顕在的な特徴はルビの使用である。ルビを使うと同時にできるだけ原文を留保するという味わい深い翻訳は、多くの人から絶賛されている。原文の特徴をできるかぎり生かして日本語文脈に移し、繊細かつ大胆にルビを工夫することにより、画期的な翻訳文を創造していると言えよう。

3 天馬訳におけるルビと訳注の特徴

尾崎紅葉が中国の唐代伝奇小説「遊仙窟」に「かくれざと」というルビを付けて読ませている例が挙げられる。このようなルビは発音ルビ（発音を示すもの）ではなく、意味ルビ（漢字の傍らにその意味を示すもの）である。天馬が使用したのは意味ルビに属する。ここでは具体的な例を挙げて見ておきたい。

名^なや字^{あざな}を失^{わす}れたが、淮陽^{わいやう}の葉生^{えふせい}は、文章^{ぶんしやう}といひ、詩賦^{しふ}といひ、冠絶^{そのころいちばん}当時^{だつた}だつた
而^{けど}ど、所^{ふしあわせ}如^{らくだい}つても不^{をす}偶^{のであつた}で、困^ら於^く名^な場^{ばう}るのであつた。¹⁸

この一節には三つの意味ルビが付けられている。即ち、「冠絶当時」、「不偶」、「困於名場」である。天馬はそれぞれ、発音ルビではなく、「そのころいちばん」、「ふしあわせ」、「らくだいをす」という意味ルビを付けている。しかし、天馬の意味ルビは尾崎紅葉のような意味ルビと完全に同じ働きなのではない。天馬は意味ルビを発展させ、故事ルビを作り上げたのである。この「故事ルビ」は単なる意味ルビではなく、独特な工夫が込められている。故事ルビに関して、南條は「柴田訳はそうしたペダントリーの一部を一般読者に抵抗なくよんでもらうため、例のルビで意識を施し、しかし原文の文字だけは残して、そこで何かがあることを示す方針をとった」¹⁹と解釈している。言い換えれば、故事ルビが目指していたのはなるべく原文を残すことである。「怪物屋敷の二美人」（小謝）に、「凌波」と書いて「たび」とルビを振った例がある。

血^ちが殷^{あか}く凌波^{たび}をそめてゐる。²⁰

17 野寄同論文、p. 99。

18 柴田天馬「幽鬼の受験」『満蒙』（83）中日文化協会、1927年3月、p. 149。

19 注5に同じ、p. 402。

20 柴田天馬「怪物屋敷の二美人」『満蒙』（186）満洲文化協会、1935年10月、p. 274。

「凌波」は漢字とルビを見比べただけでは読者の理解が難しいので、訳注が必要になる。天馬が付けた訳注によれば、「凌波」は元来女のやさしい歩みぶりの事であるが、ここでは襪（足袋）の意味に用いられている。また、曹植の『洛神賦』に「凌波微歩、羅襪生塵」という典故があると説明されている。このような翻訳の特徴に千田九一は「原文の漢字が残してあるだけに、何だか異様な映像が視覚に飛び込んで参ります。珍重されるゆえんでありましょう」²¹と指摘している。千田は「異様な映像」については具体的に述べてはいないが、まずは、「支那」の印象を最もありのままに伝えるための方法なのではないかと思われる。物語の筋を理解できる範囲で、できるだけ日本語からの影響を減らすという心遣いは、ただ物語に興味があるだけなのではない、天馬の「支那趣味」への接近が読み取れるだろう。

つまり、原文の漢字を活かすことを通じて「支那趣味」を強めるという翻訳方法は、物語の筋を重視する物語中心主義というよりは、むしろ個人的な「趣味」の表現を重視する表現中心主義である。この傾向のもう一つの証拠として、蒲松齡の『志異』の原文と比べてみると天馬訳の『志異』がプロットの面で多くの省略を用いていることが挙げられる²²と南條は解釈している。

多くの故事ルビが使われた結果、訳注が増えた。『満蒙』に掲載された訳作から見れば、天馬訳の『志異』は訳注が非常に多く 50 箇所以上ある場合もある。本誌の第 279 号（1943 年 7 月）に掲載された「花神の檄」の文末には 70 個の訳注が付けられ、本文より広い誌面を占めている。『志異』の各訳本の中にも訳注は見られるが、天馬の訳注の数には及ばない。これらの訳注はただ原文解釈を示すだけではなく、多くの典故や詩歌などが引用されることにより「支那」を紹介する役割を果たしている。天馬は訳注を付けることを通じて、「支那趣味」を探求する道を開いた。

訳注は訳文の文末に付けられている。天馬は翻訳の当初から訳注に大きな工夫を施した。彼は『聊齋志異研究』の中で聊齋志異の注を論じており、特に呂叔清の志異注を推賞し、訳注の半分は呂叔清の志異注を参照した上で作り上げられたものと述べたのである。²³天馬の訳注が如何にして「支那」に接近する通路となるのか、それについては次の具体例で見ておきたい。

楚王はその蠱惑を蒙りて賢才も^{こころ}意^{かな}に称ふ能はず、惟彼を得て（九）雄を^{とな}称へぬ。
（一〇）沛上の英雄（一一）雲散じて猛士を思ひ、（一二）茂陵の天子（十三）秋

21 千田同論文、p. 42。

22 注 5 に同じ、p. 404。

23 柴田同書、p. 43。

高くして佳人を念^{おも}ひし従^{より}此、顧^{かへりみ}盼^{よって}て自ら雄なりとし、因而（一四）忌むこと無し。

24

この一節の中には6箇所の訳注がある。実際はこれらの訳注がなくても意味は通じるが、訳注を付けることによって、読者の歴史知識を広げ、ストーリーを語ると同時に「支那」の知識（伝説や典故など）をも伝えているのである。

例えば、上記の訳注（一〇）の「沛上」によれば、「沛上」は「漢の高祖（劉邦）は秦の二世の元年に兵を沛上に起こし遂に帝位に即くに至つた」²⁵という史実が説明されている。この注により「沛上」はただの地名ではなく歴史背景があることが伝わり、人々に無限の想像をもたらすことができる。また、と訳注（一一）の「雲散」では、劉邦の「大風歌」の詩句「大風起兮雲飛揚，威加海内兮歸故郷，安得猛士兮守四方」という典故が引用され、「父老を呼んで酒を飲ましたり、猛士に四方を守らせんと嘆じたり、少年に歌を唱はせたりする所は一寸ヒットラーのやうな感じである」²⁶と述べている。

このようにして、われわれは「花神の檄」という怪異小説の物語の面白さを楽しむと同時に、中国の史実、詩歌、及びその中に現れた「国民性」の歴史的な根源を知ることになる。つまり、天馬の訳注は「支那」の歴史を伝えている側面があると言えよう。訳注が歴史、地理、文学、政治等、様々な面に及んでいるので、天馬は『志異』を翻訳すると同時に「支那」を研究していたと言ってもよい。

天馬の訳注は戦後の各版本でその数が減っていった。角川書店に出版された『完訳聊斎志異』の中で天馬は「典故を、そのまま用いなければ意味の通じないものだけに注釈を加え、意識しうる典故、ただちにこれを意識してしまった」²⁷と述べた。しかし、天馬はルビ自体を大幅に減らしていたが、故事ルビについてはその大半を残している。そのことから、「故事ルビ」による「支那国民性」への接近という役割は天馬にとっては欠かせないものであったと考えられる。

4 科挙がもたらした文弱と厭世

科挙とは中国で598年から1905年にかけて即ち隋から清の時代まで、約1300年間にわたって行われた官僚登用試験であり、「清朝末期まで中国読書人第一の関心事であつ

24 柴田天馬「花神の檄」『満蒙』（279）満蒙社、1943年7月、p. 79。

25 注24に同じ、p. 82。

26 注24に同じ、p. 82。

27 注8に同じ、p. 625。

た」²⁸のである。科挙試験のために一生を費やし、まさに死闘を繰り広げた人々もいた。『志異』の著者蒲松齡はその一人である。藤田祐賢は「志異」の解説で次のように指摘している。

科挙不第という惨めな結果は、他人には想像も及ばぬほどの悲しみの底に彼を沈ませたことであろうし、(略)宿命論的な考え方によって、抑えつけられ、宥められて、ほとんど外にむかって爆発することなく、心の内に鬱積して、そこに深い寂寥感が凝滞していたらしい。²⁹

蒲松齡は、その生涯を科挙に捧げ、72歳にして「貢生」に補せられた。従って、この「寂寥感」は彼の一生を貫いていたと言える。そして、『志異』を執筆することは彼の内心の寂寥感を慰めていたのであった。『志異』の中に登場した男性主人公は、ほとんどが蒲松齡と同じ、科挙に向かっている読書人である。「科挙不第」の寂寥感が、読書人と狐鬼との奇想天外の恋愛物語に慰められ、蒲松齡は現実社会を避けて小説世界に沈潜したのである。そこからは、物語の中の男性主人公のというより、まず蒲松齡自身の「弱さ」が見えてくる。また、蒲松齡の『志異』の執筆からは中国人の「文弱的」という国民性が垣間見える。また、天馬が『志異』を通して何を見たのかについては、彼自身が以下のように述べている。

書に載せてある事蹟は、貴賤貧富、老弱男女、賢愚雅俗を問はず広く当時の國民一般に亘り、著者の靈筆を以て遺憾なく描写されてゐるから、注意して是書を読めば、上は政治の通弊から下は閨房の秘事に至るまで、現代支那の骨髄たる明末清初の風俗習慣を、手に取るやうに知ることができる。³⁰

つまり、天馬は「支那」の「国民」を描写するものとして『志異』を認識しているのである。『満蒙』の掲載されたものの内容を見ていくと、男性を主人公とする物語が多い。例えば、「夜叉を妻にした男」(第109号)、「劍侠七郎」(第118号)、「龍女と結婚した男」(第120号)、「虎となって仇を討つ男」(第130号)、「蛇女に鼻を吸はれた男」(第162号)、「龍女の婿になつた秀才」(第164号)、「仙人に結ばれた美妓秀才」(第167号)、「地仙を妻とした秀才」(第170号)、「美人に誘拐され

28 柴田同書、p. 74。

29 注4に同じ、p. 430。

30 注5に同じ、p. 3。

た天才」(第178号)などが挙げられる。天馬は『志異』の物語に登場する男性主人公、特に科挙制度の下で現われた「秀才」に興味を持っている。天馬は「秀才」(読書人)について、『聊齋志異研究』の中で以下のように述べている。

『志異』に出てくる生員(秀才)の話は大抵は清朝のことである。それで茲に説明するところは主として清朝の学制であるが、(略)、当時の読書人として功名を博すには、文挙に応じて挙人となり、進士となり、官途に就いて立身出世する外はないのであつて、挙人となり、進士となる階梯は生員となることであり、生員となるには、府、州、県の学校に入ることが、第一条件だつたのである。³¹

科挙試験の競争の激化によって読書人の置かれた状況は厳しいものであった。訳注の中でも科挙と読書人に関するものが多く、そこからは天馬の科挙に対する見解が読み取れる。「漢の武帝の時代に孝行で廉正なる人を各都国から毎年一人づつ挙げさせたのが孝廉のはじめである、清朝では挙人は孝廉と称した」³²という訳注が示すように、天馬は儒学を基礎とした科挙制度が読書人の「孝廉」等の品格を育てたことについては評価している。清朝の科挙に対して「試験課目が宜しきを得ざるためであり、試験官が夤縁に囚はれ賄賂に動かされて公正を缺くためであつて、文挙そのものが悪いのではない」³³と指摘もしている。つまり、天馬は中国の科挙制度の中にある「公正を缺く」ことは批判していながらも、科挙自体については宣揚していたのである。

ただ、科挙に注目することで前述した秀才について天馬が如何に認識していたのかという点は検討する必要がある。「十四番目の娘」のストーリーの中で、男性主人公の馮生が、狐女の辛十四娘に一目惚れし彼女に求婚する。馮生の求婚によりその妻となった辛十四娘は、馮生が酒好きで軽率であることを指摘し小人の恨みを買うだろうと忠告したが、実際に馮生は有力者である楚公子に憎まれ冤罪で獄に繋がれてしまう。辛十四娘は獄中の夫を支えて孤軍奮闘し、馮生が死刑と決まると女中狐を伎女に化けさせ馮生を救った。言うまでもなく馮生は救われる形象として登場したのである。ここでは、「文弱的」な国民(男性)というイメージが浮かびあがってくる。

「文弱的」な国民に関して、呂順長は「日本人から見た中国人の国民性」の中で次のように述べている。

31 柴田同書、p. 67。

32 注18に同じ、p. 156。

33 柴田同書、p. 74。

中国人は「文弱的」「平和的」であるという。中国人は文を重んじ武を軽んじるので、平和的国民であると同時に文弱であると結論付けている。(略) 中国人は外敵の侵入に対してただ防御するだけで、それを撃退するなどとは思ってもよらないと説明している。また、中国の男性に關羽、魯智深、武松などの英雄も存在し、総てを文弱とは言えないが、其の国柄も人柄も元来文弱であり、男性は女らしく、男らしい者を見出すのは難しい。³⁴

馮生の「文弱的」な性質に対して女性主人公の辛十四娘は強く、戦う役割を担っている。辛十四娘の「強さ」と馮生の「文弱」との間には明確な対比が生じている。「十四番目の娘」だけではなく、他の多くの物語においても、「男弱女強」のパターンが見られる。男弱女強のパターンを表現するために、天馬の故事ルビと訳注が役立っていると言える。具体的な例をあげてみると、「幽鬼の受験」の男性主人公である葉生は次のように自分のことを語る。

よのなか ひと
天下の人たちに、じぶんの半生の はんせい ふしあわせ (十二) ではないためでな し
やれば、願亦足矣！³⁵

非戦之罪は故事ルビであり、文字の側は「ではないためでな」と表記されている。天馬の訳注には、「史證に項羽曰此天亡我非戦之罪也とある。葉生は今までの落第は学問の罪ではなく、試験運が無かった為だといふことを知らせれば、それで満足だと云ったのである」³⁶とある。葉生のような読書人の無抵抗の「弱さ」がこの訳注からは窺えるだろう。

また、科挙での不遇という現実を直視できず非現実の仙境に逃げ込む、秀才などの男性主人公の設定は一般的である。「龍女の婿となった秀才」の中で、主人公陳弼教は西湖の竜宮に逍遥たる生活を送り、美しい嫁をもらい高い地位を得て、不死にもなった。このようなことは現実では実現できない。「仙人に結ばれた美妓秀才」、「地仙を妻とした秀才」、「美人に誘拐された天才」の中の主人公も同じく、科挙の不遇を経験してから非現実の仙境に入り込んでいった。ここには、科挙がもたらした文人の厭世も反映されている。

34 呂順長「日本人から見た中国人の国民性」『四天王寺大学紀要』(49) 四天王寺大学、2009年3月、p. 72。

35 注18に同じ、p. 151。

36 注18に同じ、p. 155。

5 天馬の雑記

『満蒙』の第226号（1939年2月号）から、満洲文化協会は「様々の都合上、満洲法政学院及大同女子技芸学校の経営に主力を注ぐことに相成り」³⁷というように、その機関誌としての『満蒙』を発行し続けることが出来なくなった。そのために「満蒙社」が結成された。同号に掲載された「満蒙社」同人の挨拶文の中には次のように書いてある。

下名等（編集同人）が「満蒙」を続刊しようとする動機は二十年の歴史を有する「満蒙」の廃刊が痛惜に堪へないことと、斯の如き文化的香の高い雑誌が一つ位は満洲に有つて然るべきではないかと確信したこと以外には何もありません。「満蒙」の刊行を中断せしめたくないので、二月号差当り旧態のまま下記同人の責任に於て発刊致しますが、三月号以降は同人一同の責任編集によつて面目を改めたいと考へて居ります。³⁸

このようにして「満蒙社」編集同人が結成され、これにより『満蒙』を発行し続けることが可能となった。

同号に掲載された同人名簿によれば、編集同人は伊藤修（大阪毎日大連支局長）、稲葉好延（大連基督教青年会主事）、宮本通治（満鉄調査部次長）等の22人からなり、三浦直彦（関東州庁長官）、丸茂藤平（大連市長）、松岡洋右（満鉄総裁）ら6人がその顧問を担っていた。ここからわかることは、新しく成立した「満蒙社」も当時の関東州と満鉄に干渉されていたということである。ここで注意すべきなのは天馬がその編集同人の一員であることである。

他の同人と違い、天馬はいずれの団体や部門にも属さずに「著述家」の身分で紹介されていた。前述のように、1925年に天馬は「満鉄」の仕事を辞め『志異』の翻訳に専念していた。つまり、満蒙社が結成した時、成員としての天馬はどこにも所属してはいなかったのである。従って、天馬は政治圏で重役を担った他の同人と比べ、非常に特別な存在であると言える。そこから、彼による『志異』の翻訳が『満蒙』にどのように重視されていたのかを考えることができるだろう。

「満蒙社」編集同人が結成されると共に、『満蒙』ではその「同人雑記」を毎号連載

37 貝瀬謹吾「御挨拶」『満蒙』（226）満蒙社、1939年2月、p. 4。

38 注37に同じ、p. 1。

することになった。天馬はこの機会を借りて、『志異』の翻訳を掲載するだけではなく雑誌の編集者として大連の見聞を書き、発表するようになった。これらの「支那」雑記は短いにもかかわらず、天馬が関心を寄せた当時の「支那」事情がよく窺える。「『満蒙』刊行の目的は学芸の昂揚を中心として大陸文化を宣布するに在り」³⁹という編集趣旨の下で天馬は「大陸文化」を探る道に傾倒していた。

しかし一方で、日常生活で出会った人や出来事などを述べ当時の大連の社会状況に対して意見を発表するなど、同人雑記には現実感が満ちてもいる。例えば、敬語の使い方から大連における日本語教育問題、電車の中の席に立つ子供の行為からみる中国の子ども教育問題、中国の同姓同名の問題、自宅に雇った李というボーイと「姑娘」からみる中国人の根性、広告標語からみる言語の誤りと濫用の問題、周囲の知人からみる中日間の交流問題等が挙げられる。興味深いことに、その中では一種の風紀改良をめざす天馬の志向が見られるのである。例を挙げてみると、大連の松の樹の生育についての次の一節がある。

大連神社の背景を写してゐる南山の松の樹は、昔は沢山あつたのであるが、大層寒い年があつて、大部分枯れてしまひ、（略）、所が一昨年あたりから秋の末になると熊手と麻袋を携へ、野良で働くやうな姿の満人たちが、毎日枯草を採りにくるやうになつた。（略）満洲では朝鮮より寒さが強く、従つて燃料の必要なことも朝鮮以上なのだから、満人たちが、縦横無尽に熊手を振り廻はして枯草を採取するのに、同情してやつて然るべきではあるが、大連神社の背景を写してゐる南山の松樹を愛護する意味に於て、多少取締りも必要なのではあるまいか。⁴⁰

前述のように、天馬はほかの編集者と異なり「満鉄」にも政治圏にも属していなかった。それゆえに彼の雑記の中には田園風の生活が漂っている。例えば、『満蒙』第231号の同人雑記には病後の天馬の気持ちを表わすものが見られる。「庭に出てみた。袷から単衣になつたその気持ちが、病後に快かつたので。蔓薔薇の咲乱れた低い塀のあたりから、ほのかの香りが夢のやうに漂つてくる、その中に佇んで、うつとりした時だつた…」⁴¹と語り続ける天馬は田園の隠居者のようである。

このように、天馬は編集同人の中で特別な存在である。彼は雑誌の編集方針に従いながらも、自分なりのスタイルで中国の社会と人々に注目し、中国の国民性を探究するだ

39 「満蒙社同人覚書」『満蒙』(226) 満蒙社、1939年2月、p. 330。

40 柴田天馬「同人雑記」『満蒙』(272) 満蒙社、1942年12月、p. 132。

41 柴田天馬「同人雑記」『満蒙』(231) 満蒙社、1939年7月、p. 146。

けではなく、その改良の方法を追求した。天馬は国民性調査の実務の枠から多少外れることで、独立的かつ田園的な個性を呈しているといえるだろう。

おわりに

本章では、雑誌『満蒙』で掲載された柴田天馬の翻訳『志異』のテキストを考察し、天馬の翻訳活動及びそのルビと訳注を併用する訳し方を検討してきた。まず、これまでの日本における『志異』の翻訳史からみれば、ルビと訳注を併用するという天馬の訳し方は特別なものである。戦前戦時下において『志異』は日本で「発禁」となり、そのため天馬の『志異』の全訳の日本における出版は実現できなかった。そのかわりに『満蒙』が、天馬が『志異』の訳文を発表する舞台となった。

また、本章は『満蒙』における天馬訳の訳文、ルビと訳注の変化を考察し、天馬の翻訳活動の時代性を見出した。1920年代から1940年代にわたる天馬訳の、未熟な発展期、ルビと訳注を併用する確立期、及びルビと訳注の削減期という三つの時期を確認したのである。特に、『満蒙』での掲載当初から1930年代の末までにおいては、ルビと訳注は『志異』の「支那趣味」を強め、中国の文化、伝統習慣などを紹介するものであった。その中で、天馬は中国の科挙制度及び物語の男性主人公・秀才に関心を持ち、多くの物語を『満蒙』に発表した。これらの男性主人公は特に「文弱」であるという一面が描かれているほか、科挙に及第できないがゆえの不遇をかこち、非現実の「仙境」に逃げ込む「厭世」的男性主人公のイメージも示されており、中国の文弱と厭世の国民性を表わしている。

1925年、天馬は「満鉄」の仕事を辞め『志異』の翻訳に専念するようになった。その後、彼は「満蒙社」の同人として「支那」雑記を書き、生活の見聞を記しながら、中国の国民性を論じ、その改良策も考えていた。天馬は中国文学の翻訳者であり、雑誌の編集者であり、「支那」問題の研究者でもある。1945年、日本が敗戦した後に天馬は日本へ引き揚げた。文書の携帯が禁じられたため、天馬は『志異』の訳稿を母国の日本に持ち帰ることができなかった。天馬が「訳筆餘滴」の中で「しかし、まだ訳稿を纏める方法が残つてゐる。前記の如く、第一巻第二巻の原稿は、苦楽社から印刷所の文寿堂に廻してあるし、外に玄文社発行の選訳がある。雑誌満蒙を探して、掲載されたものを集めれば、大部分が揃ふのである。（略）それでもまだ五十項ほど缺けてゐたから、重ねて筆を執り、四百四十五篇の訳稿を纏めたのである」⁴²と述べているように、天馬は

42 柴田同書、p. 109。

戦後の全訳聊齋志異の出版にも苦勞したのであった。訳稿を纏める過程の中で、再び雑誌『満蒙』は重要な役割を果たしたのである。

第二部

宣伝された「満洲」——1930年代の小説、戯曲

第3章 「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦

——近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」

はじめに

「満洲国」の成立後、在満日本人によって創作された小説が増えた。雑誌『満蒙』に掲載された小説から見てみると、これらのほとんどは短編小説である。また、作品の主題の多くは「満洲国建国」及び「王道楽土」「五族協和」という「満洲国」の建国理念とつながっている。それにもかかわらず、その中には当時の「満洲国」の現実をリアルに反映する作品がないわけではない。「満洲国」の社会背景と深くかかわるスパイ小説はその一例である。

1930年代の「満洲」においては、様々な勢力が跋扈し各国間で展開されたスパイ戦も激しくなった。スパイの話は大衆の間で語られるだけでなく、多くの文学者によっても描かれていた。そのようにして「満洲国」のスパイに関する小説が現れたのである。本章では、このような小説をスパイ小説と称する。スパイ小説は「満洲国」を舞台にし、角逐し合う各勢力（日本とロシア、日本と中国東北軍、欧米と日本）のスパイ戦を描写対象にしている一方で、男女主人公の悲劇的な恋愛物語も描かれている。『満蒙』で掲載された近東綺十郎の小説「間諜・茉莉」がその一例として挙げられる。

『満蒙』に掲載されたスパイに関する作品は「間諜・茉莉」の他に、聖田武彦の「スパイと愛欲」、是枝道太の「新京悲歌」、大庭武年の「烽火」なども挙げられる。これらの作品にはそれぞれスパイが登場するが、スパイという存在を取り上げて最も工夫されて創作されたのは「間諜・茉莉」であろう。「間諜・茉莉」においては、主人公の父親が日本人であり母親が満人であるという設定が、非常に興味深い。また、作者が物語の展開において、単なる恋愛物語を記述しただけではなく、当時の時局と深く関連させ、主人公の運命と時代背景との関係を追求していることが重要である。「間諜・茉莉」こそ、もっともこの時代の『満蒙』を代表するスパイ小説だと言えるだろう。

本章ではまず、「満洲国」成立後の「満洲」で展開された各勢力のスパイ戦を概説し、それを踏まえてスパイ小説の創作と社会背景（時局）との間の緊密な関係性を明らかにする。その上で、近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」を研究テキストとして「満洲国」時代に在満日本人が書いたスパイ小説の特徴を分析する。さらに、恋愛物語の背後に隠されたスパイ戦に対する内部的な批判を検討する。

1 「満洲国」、スパイ戦、スパイ小説

1931年9月18日、中国東北に駐屯した日本の関東軍が、南満洲鉄道の線路を爆破した事件（柳条湖事件）に端を発し、中国東北軍の北大營を砲撃して瀋陽に侵攻し、中外を驚かせた「満洲事変」（中国側の呼称は九一八事変）を起こした。翌日、日本軍は瀋陽を占拠し、数日で長春、吉林などの地を占領した。1932年2月には東北全土が陥落した。1933年5月31日の塘沽協定成立に至るまで日本と中国との間の武力紛争が続いていたのである。

「満洲事変」とは日本帝国主義が中国を武力で征服しようとした戦争の始まりであると考えられている。1932年3月9日、日本軍の「扶持」によって最後の皇帝・溥儀は、長春に傀儡政権の「満洲国」を建てた。日本は同年の9月15日、関東軍司令官兼駐満洲全権大使である武藤信義と「満洲国」首相である鄭孝燮が長春で「日満議定書」を締結したことで、「満洲国」を公式に認めた。「満洲国」の成立によって中国東北の社会環境が変わり、「満洲」における各勢力の角逐も白熱した。そのため「満洲国」ではスパイ戦を巡って諜報活動が頻繁に行われていた。

森島守人は著作の『陰謀・暗殺・軍刀——一外交官の回想』において、当時の中・日・欧米の関係について、次のように述べている。

中国の欧米依存の傾向や中国における第三国の権益から見て、中国に莫大な権益を有するイギリスやアメリカとの間にも話合をすることが必要だ。すなわち中日関係と日、英米関係とを相関的に取りあつかうことが必要だということであった。¹

森島の述べたように、「満洲国」においては各国の関係が絡み合い、その社会背景は非常に複雑かつ混乱した状態にあった。このような社会環境が諜報活動の温床であるといえよう。また、諜報活動の激化によって「満洲国」あるいは日本の防諜活動も進歩していたのである。ここで日本のスパイ史を遡ってみると、日露戦争中、日本はすでにスパイ戦を開始していた。中園英助は『スパイの世界』において「一九〇四年から五年にかけての日露戦争は、まさに二十世紀をスパイの世紀へと開幕させたのである」²と指摘している。日露戦争の後に日本が中国東北に設立した「満鉄」は、事実上、日本の情報機関であった。中園は「満鉄」について次のように指摘している。

1 森島守人『陰謀・暗殺・軍刀——一外交官の回想』岩波書店、1950年6月、p.117。

2 中園英助『スパイの世界』岩波書店、1992年4月、pp.10-11。

ユニオン・ジャックの翻るところに太陽は沈まぬと豪語し、七つの海に覇をとこなえたイギリスが、情報機関によって植民地を巧みに練り上げていったことは良く知られている。たとえば、インドにおける東インド会社がその一つの母体で、中国東北の旧満洲における満鉄（南満洲鉄道株式会社）は東インド会社を模倣したものであり、満鉄調査部といえは極東における最大最強の情報機関であった。今日でいうフィールド・ワークとシンク・タンクとを兼ねたこの超情報機関は、鉄道による点と線が満洲国の面へと拡大してゆく、巨大な陰の頭脳となったのである。³

「満洲国」が成立した後、日本は、当時の複雑な国際環境に対応すべく最も厳密な情報網を配置した。1934年、関東軍内部に関東軍特種情報機関が設立された。この機関について、インテリジェンス研究者の小谷賢は「関東軍司令部直属の関東軍特種情報部、1944年には関東軍通信情報（通称「満 188 部隊」）となり、最盛期には 1090 名もの人員を抱えていた」⁴と指摘し、ここからその情報網の広さが読み取れるだろう。彼は、戦争中の情報機関による諜報活動を「人的情報（ヒューミント）」と言い、次のように述べている。

人的情報というとスパイのようなものが連想される。基本的に情報収集は海外の大使館や領事館に派遣される駐在武官によって行われる。日本から派遣された武官は通常、カウンターパートである外国の武官と軍関係者などと情報交換を行い、さらに新聞などの公開情報などによって情報を集める。また必要な時には現地の人間を雇い、エージェントとしてグレーゾーンの情報収集活動も指揮する。⁵

つまり、日中戦争中の各国の間の情報戦とは、情報を収集する「人」の戦争でもあったのだ。無論、当時の「満洲」では世界各国からの諜者（スパイ）の角逐が絶えず、複雑であった。梶居佳広の調査によれば、いわゆる「満洲国」の「五族」以外の主な在満外国人は、イギリス人、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、イタリア人、オランダ人、ソ連人、白系ロシア人、ポーランド人がある。⁶その中で、ソ連、アメリカ、イギリス、フランスの勢力が角逐し合い、多くのスパイも隠れていた。

3 中藪同書、p. 7。

4 中西輝政・小谷賢『インテリジェンスの 20 世紀——情報史から見た国際政治』千倉書房、2012 年 2 月、p. 25。

5 小谷賢『日本軍のインテリジェンス——なぜ情報が活かされないのか』講談社、2007 年 4 月、pp. 41-42。

6 梶居佳広「イギリスからみた日本の満洲支配(1)——戦間期外交報告(Annual Report)を中心に」『立命館法学』(290)立命館大学法学会、2003 年 4 月、p. 49。

各国の間のスパイ戦は「満洲」在住の文学者に注目されたことによって、一時的に文学創作の新しい題材になった。この背景の下でスパイに関する文芸作品も現れ、スパイという神秘的な職業は、まず大衆の想像と探究心を引き起こした。各国のスパイに関する様々な伝説が大衆の間に浸透すると同時に、当時の雑誌と新聞とは大衆の好みに応じてスパイ小説や戯曲・映画の脚本などの通俗文学作品を多く掲載した。探偵・スパイという題材は「満洲国」の出版界において一時的に流行していたのである。

スパイ小説は探偵小説から発展してきたものであるといえよう。「満洲国」が成立した後、民衆の間では娯乐的、刺激的で新鮮な小説が求められていた。探偵小説はこの大衆の要求に迎合する産物である⁷と満洲文学研究者の詹麗は指摘している。当時の雑誌や新聞は読者の好みに応じて多くの探偵小説を掲載した。それと共に多くの探偵小説家も現れた。その中で最も有名なのは、在満日本人の大庭武年である。彼の創作した「小盗児市場の殺人」（『新青年』、1933年6月）は、「満洲国」時代の最も代表的な探偵小説の一つであると認められている。

探偵小説の出現には、「満洲」の都市文化の発展と小説家の満洲体験とが深く関わっている。この点については、植民地文学研究者の柴紅梅は次のように指摘している。

日本の現代主義詩歌が日本本土ではなく日本の植民地都市大連に起源があったように、「日本の探偵小説と植民地都市大連との関係」を考える際にも、人々にしばしば無視されていた重要な問題が浮かんでくる。すなわち、二十世紀において日本文壇に活躍していた探偵小説家の相当数が海外の植民地体験を持っており、その多くは中国の東北地方に住んだことがあり、特に都市大連と深い関係があるということである。⁸（筆者訳）

柴紅梅の論述によれば、日本の探偵小説、特に「満洲国」時期における在満日本人の探偵小説の創作は、日本人の海外の植民地体験と深い関係がある。探偵小説が発展するにつれて、時局を直接に反映したスパイ小説が登場してきたのである。

これまで「満洲国」のスパイ小説に関する系統的な研究は現われていないが、「満洲」文学研究者の劉曉麗は、著作の『異態時空中的精神世界——偽満洲国文学研究』で多少ながら言及している。その調査によると、スパイ小説はその作品の数から言っても作家

7 詹麗《偽満洲国通俗小説研究》（偽満時期文学資料整理与研究）北方文艺出版社，2017年1月，p. 156。

8 柴紅梅《都市空間与殖民体验——日本殖民时期大连都市空間中的日本偵探小説》《东北亞外語研究》2013(3) 大連外國語大學，2013年12月，p. 16。

の数から言っても、ほかの通俗文体の作品とは比べられないほどに非常に少ない。⁹劉曉麗は作家・阿唐のスパイ小説「古廟月夜」（『麒麟』、1942年2月）を例にして満洲国時期のスパイ小説を論じ、次のように述べている。

「古廟月夜」は、ある世俗的なストーリーを語っている。一つの幸福な家庭であったが父が殺され、親孝行な娘が父親のために復讐する。作者はこの世俗的なストーリーをスパイ小説の枠組に置いただけである。物語は満洲国北部のある小さな都市で発生するが、そこには日・満・露の各国の人々が住んでいる。（略）機密文書を帯びた軍部参謀長である父がスパイに暗殺され、文書も盗まれたが、愛国的な娘が踊子に変装して敵の内部に入り、兵器を盗もうとする外国の敵対組織を一挙に殲滅した。作中ではその外国の敵対組織がソ連共産党であることが暗示されている。この設定は、ある世俗的なストーリーをスパイ小説に変えた。¹⁰（筆者訳）

この指摘の通り、阿唐の「古廟月夜」は、物語の結構からすればすぐれたスパイ小説とはいえない。作者の阿唐は探偵小説家ではなく、スパイ小説を書く能力を持っていなかったのである。彼はただ当時の時局と大衆の好みに応じてスパイという題材を借り、「世俗的なストーリー」を書いただけである。この状況からも、当時のスパイという話題に対する熱量が窺える。

阿唐は日本人ではない。劉曉麗の論述では、在満日本人の書いたスパイ小説には言及されていない。筆者の知る限りでは、未だに在満日本人のスパイ小説の創作に関する研究は空白である。しかし、研究の空白は在満日本人の書いたスパイ小説が全くないことを意味してはいない。

『満蒙』に掲載された在満日本人の書いた通俗小説や戯曲・映画の脚本などをひもといてみると、スパイを描写する作品が少なくない。第147号に掲載された聖田武彦の「スパイと愛欲」（第147号、1932年7月）は、日本とロシアとのスパイ戦を描いたものである。その他、是枝道太の戯曲脚本「新京悲歌」（第153号、1933年1月）、大庭武年の戯曲脚本「烽火」（第155号、1933年3月）、近東綺十郎の小説「間諜・茉莉」（第164号、1933年12月）などの作品には、スパイの姿が現れている。「新京悲歌」と「烽火」では「満洲国」の建国を破壊するつもりであったスパイが登場した。「間諜・茉莉」でも「満洲国」の建国をめぐる日本と各国とのスパイ戦が描かれている。これら

9 劉曉麗《异态时空中的精神世界——伪满洲国文学研究》 华东师范大学出版社，2008年9月，p. 148。

10 注9に同じ、p. 151。

の作品を通して在満日本人の創作したスパイ小説の特徴が窺えるのであろう。

2 時局と接するスパイ小説の創作背景

前述の聖田武彦の「スパイと愛欲」は『満蒙』における最も早い、スパイに関する小説である。この小説は主人公のベチロフ、エレナ、ソコロワを巡る物語であり、物語は「満洲国」の都市・ハルビンという空間で展開され、三人の主人公がスパイ（エレナとソコロワはロシア人である。大道絵描きとして登場したベチロフが日本人のスパイであると疑われている）として設定されている。しかし、この小説は恋愛物語の通俗小説に留まると考えられる。作者の聖田武彦も、小説の最後に次のように述べている。

読者よ。僕がこれだけで、筆を擱かうとすれば、まだ、事件は終わつてゐない。とおつしやる方があるかと思ふ。ベチロフ・ベトロウイチが、日本人のスパイであつたか、どうか、これは、まだ未知数だからだ。しかし、僕は、恋の殉教者であつたこの男を、そのまゝ、そつとしておいてやりたい。¹¹

聖田の「僕がこれだけで、筆を擱かうとすれば、まだ、事件は終わつてゐない」という記述によれば、「スパイと愛欲」の中では、スパイという題材こそ現れたものの、事件の一部始終を語る厳密な構造を持っていなかったことになる。ただ、スパイの題材を用いて一つの恋愛物語を描いただけなのである。しかし、ロシア人のスパイという設定を通じて当時の日露の間スパイ戦の様子を示していることは評価すべきところである。日露戦争頃から日本とソ連の間には情報戦が続いており、「満洲国」にはソ連のスパイが特に多かったのである。海野弘は『スパイの世界史』の中で、次のように述べている。

1930年代に新たに最も強大なスパイ帝国を作り上げたのはソヴィエト・ロシア連邦であった。スターリンの全体主義的体制の下に、強力なスパイ網を敷き、国内では粛清の嵐を巻き起こし、国外には、ひそかにスパイの種をまいていった。ソ連がすぐれていたのはヒューマン・インテリジェンス（人間的スパイ活動）の面においてだといわれる。¹²

11 聖田武彦「スパイと愛欲」『満蒙』（147）満洲文化協会、1932年7月、p.175。

12 海野弘『スパイの世界史』文芸春秋、2003年11月、p.146。

当時の「満洲国」におけるスパイ小説を生み出したのは「満洲」の時局であるといえる。スパイ小説は、往々にしてある時期あるいはある事件を暗示するものだからである。

『満蒙』の第164号に掲載された近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」は、「塘沽停戦協定」を背景にして創作されたもので、「紫茉莉」という偽名で外国人の社交場ウクライナというダンスホールの踊り子に扮した「一人の孤独なる少女」¹³スパイ・日向摩耶子を主人公とした物語である。ここで、まず作者の近東綺十郎を説明しておきたい。

筆者の調査によれば、近東綺十郎はペンネームであり、その本名は棧朝男である。北村謙次郎は『北邊慕情記——長篇随筆』の中に「彼は満洲文学草わけの一人として早く昭和五、六年ごろ大連で出た「大陸文学」「街」などの詩や小説を書き「線」（これは「作文」の前身と目される）の青木実や竹内正一などと並んで将来の活躍を予想させていた」¹⁴と近東を高く評価している。近東の書いた詩は、詩篇「遼河の春」¹⁵（『大陸文学』、1931年6月号）と「胡秋信」（『戎克』、第19号）が代表作として挙げられ、小説は、雑誌『満蒙』で発表した「女学生陳青娥の更正」（第143号、1932年3月）と「間諜・茉莉」以外では、雑誌『街』に載せた「雨と肉体と」（1931年2月号）と『満洲文芸年誌』（1932年3月号）に収録された「北満平康里の女」が見つまっている。また、近東は詩と小説を創作するだけでなく、大連における戯曲運動にも参加し、その後、奉天、ハルビン、北京に転居し、新聞記者になったこともある。

大内隆雄は、彼の小説「雨と肉体と」に対して、「近東の「雨と肉体と」は、いかにも彼らしい表題であるが、内容は当時の風潮を反映してかなり傾向的なものであつた」¹⁶と評価している。ここから、近東は、「当時の風潮」、或いは時局に非常な興味を持っていたことがわかる。「間諜・茉莉」に触れた「塘沽停戦協定」とは1933年5月に、いわゆる「柳条湖事件」より始まった「満洲事変」の軍事的な衝突をめぐって中国の塘沽において中日両国の間に締結された軍事的停戦協定である。「間諜・茉莉」ではこの事件を示す次の一節がある。

七月一日、D市の新聞埠頭係りの記者たちは、Tから入港したW丸乗客中に、異様な一行を発見した。一行は上陸を待ち兼ねた様に、自動車に飛びのつて、そそくさと、遼河ホテルに、投げ込んでしまつたが、之によつて、北支停戦協定に関しての細目を決定する大連会議が開かれるといふことは判明した。支那側委員一行、海路来連のニュースが発表されたのは、その日の夕刊新聞にであつた。（略）

13 近東綺十郎「間諜・茉莉」『満蒙』(164) 満洲文化協会、1933年12月、p. 173。

14 北村謙次郎『北邊慕情記——長篇随筆』大学書房、1960年9月、p. 58。

15 「遼河の春」は北村謙次郎の『北邊慕情記——長篇随筆』に収録されている。

16 大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社、1944年10月、p. 161。

- (一) R 地方義勇救国軍雑軍の整理に関する問題
- (二) ××、××両鉄道の直通運行に関する軍事交渉
- (三) ××鉄道の××鉄道委任経営に関する予備的交渉¹⁷

この一節で明確に書かれた「北支停戦協定」とは、塘沽停戦協定のことである。また、その日の夕刊新聞が発表したニュースに出てきた「大連会議」の内容には「R」という頭文字と「×」の伏せ字で隠されたところがあるが、「R 地方義勇救国軍雑軍の整理」という表現と「鉄道」の経営に関わる記述がこの事件がなんであるのかをはっきりと示している。「義勇救国軍」は東北抗日義勇軍のことであり、これは 1931 年の満州事変以降、中国東北部の平民や警察や東北軍の一部の官兵によって構成された義勇軍、救国軍、自衛隊などの抗日武装組織である。また、R 地方は遼河地方である。「雑軍」とは、中核となる軍事委員会委員長蒋介石直系軍をいわゆる中央軍とし、それ以外の旧東北軍(張学良麾下)、旧西北軍(馮玉祥麾下)、山西軍(閻錫山麾下)、広西軍(李宗仁、白崇禧麾下)、広東軍(陳濟棠麾下)、四川軍、湖南軍、山東軍、その他の軍から成るものである。

また、「間諜・茉莉」は「映画小説風」の叙述方法を採用している。映画小説について、大塚英志は映画小説が「従来の「小説」ではなく、「映画」として撮られるために「小説」としてある」¹⁸と述べている。「満洲国」が成立した後に、「建国」を宣伝するために大衆に親しまれる映画と戯曲の製作が在満日本人に工夫され、当時の新聞と雑誌には映画小説や戯曲脚本が数多く掲載されていた。映画小説の特徴は、小説がいくつかのシーンの描写によって構成されていることである。この特徴は小説の内容を最も直観的に表わし読者に容易に理解させるため、「建国」を宣伝するのに映画小説が有効な手段として利用されていた。これこそが映画小説が当時に流行っていた原因なのではないかと思われる。

「間諜・茉莉」は、主として以下に示すように十四のシーンから構成され、停戦協定の一部始終を貫いている。

- ①奉天へ走っていく汽車のなかでの茉莉とチャップマンとの偶然の出会い。
- ②奉天新高町の洗心寮で茉莉と榎龍三とが初めて対面する(榎龍三への手紙の全文を含む)。

17 近東「間諜・茉莉」、p. 181。

18 大塚英志「サブカルチャー/文学論 中上健次とエイゼンシュテインの「映画小説」」『小説 tripper: トリップパー』朝日新聞出版、2007 年 12 月、p. 342。

- ③外国人の社交場ウクライナにて茉莉がスパイになる。及びチャップマンと再会。
- ④塘沽停戦協定の始まり。
- ⑤「大同亜細亜青年同盟」事務本部での中央常任委員の男達の時局談。
- ⑥チャップマンの茉莉への性的侵犯事件と榎龍三の冷たさ。
- ⑦停戦協定の初回交渉とスパイ戦の登場。
- ⑧特急「はと」にて茉莉とチャップマンとの誤解が解ける。榎龍三の「愛」への自問。
- ⑨大連会議の開催と停戦協定の細目決定。
- ⑩行方が分からなくなったチャップマンと茉莉・榎龍三の通話。
- ⑪停戦協定の続き。
- ⑫戻ってきたチャップマンとのスパイ戦の激化。
- ⑬停戦協定の終了。
- ⑭チャップマンの逃走と茉莉の死。

この十四のシーンは小説の構成を示している一方、1933年の「停戦協定」の政治的な背景も反映している。興味深いことに、物語は「奉天へ走っていく汽車」（あるいは鉄道）から始まっている。そこだけではなく、「満洲人の車掌」、「満鉄派遣の日本人車掌監督」、「二人の武装した鉄路警備員」、「山海関駅」、「白廟子駅」、「興城駅」、特急「はと」などの鉄道に関連した人や物の存在が次々に登場した。どうして鉄道が物語の展開の道具として使用されるのかという問いから、作者の意図を覗いてみたい。

この問いに答えるためには、小説創作における社会背景への想像が必要である。つまり、「満洲事変」の軍事的な衝突と深くかかわる「柳条湖事件」である。周知のように、「柳条湖事件」は日本関東軍の謀略によって起こった、満洲事変の発端となる鉄道爆破事件であった。鉄道から始まるというのは、「塘沽停戦協定」の締結の起点としての「柳条湖事件」を容易に連想させる。この事件によって、「汽車」、あるいは鉄道という存在が政治的にも社会的にも話題になっていた。また、締結された「停戦協定」の中で「鉄道」問題が重要な議題として取り扱われていたことも鉄道が重要な道具立てとなった一つの原因だと考えられる。

3 スパイの両面——英雄と犠牲者

3.1 帝国主義による「茉莉」の英雄物語

「五族協和」が「満洲国」の建国理念として日本に標榜されるとともに、文学作品に

においても一部の作家が「五族協和」という理念を作品に取り入れた。それらの作中では主人公がしばしば英雄として描かれている。「間諜・茉莉」のなかの茉莉の人物像については、一つは「英雄」であるといえる。このような人物叙述は、帝国主義の立場に立っていると考えられる。

作者がいかにして茉莉を英雄のように語っていたかについて、まず、茉莉の生い立ちから見ていく。そこでは茉莉となる前の「摩耶子」の家庭環境が非常に興味深いものである。摩耶子の父親は、「今を去る約二十年前以来、満洲義軍の先頭として、又沿海洲独立運動の中堅となつて活動した、彼の日向直樹老先生」¹⁹なのであり、母親の「淑媛と言ふのは清朝没落の当時の老臣Kの令妹で、若い日の日向直樹との交情から、その正夫人となり、四五年前に大連の旅舎で長逝した」²⁰のである。つまり、茉莉の父親・日向直樹は日本人で、母親・淑媛は満洲人（中国人）である。

このような設定は「五族協和」が掲げられた時代背景と関わっているに違いない。父親が大和民族（日本人）であり、母親が満洲人（母淑媛太は清朝没落当時の老臣の妹であった。また、大連の旅社で逝去したということは、「満洲」で生涯を過ごした可能性がある。これらの描写より、「満洲人」だと推測できる）であったことは、日満の「協和」を宣伝しているといえよう。

それだけでなく、父親が日本人で母親が満洲人であったという設定自体にも深い意味がある。「父権」が支配的な地位を相変わらず占めていた社会においては、茉莉の父親は単に父親であるだけではなく、日本民族の支配的な地位をも代表しているはずである。一言で言えば、日本人であるからこそ父親になり、満洲人であるからこそ母親になったのである。日本が「五族協和」を建国の理念として、大和族・満洲族・漢族・モンゴル族・朝鮮族の五つの民族を協調して暮らせる「国」を主張する一方で、現実には大和族（日本民族）が支配的な地位を占めることは、やはり無視することはできない。

以上のことから、「五族協和」の理念を宣伝するという点からみて「間諜・茉莉」はまず、帝国主義を反映した作品であるといえる。

両親の身分についての設定という側面だけではなく、「紫茉莉」という名前を持つ主人公のスパイとしての短い生涯に対する描写も、この傾向をはっきりと表している。茉莉が所属していた組織・「大同亜細亜青年同盟」は日本の情報組織として存在し、「五族協和」の理念を積極的に提唱している様子が見られる。この組織の役目は、日本のために「満洲」における各国の勢力のさまざまな情報を探ることであった。この組織に属する茉莉は、日本が「満洲国」を「建設」する一助となった。そのため、「建国」に尽

19 近東「間諜・茉莉」、p. 173。

20 近東「間諜・茉莉」、p. 177。

力する茉莉は、間違いなく英雄のように語られている。

茉莉の英雄的なイメージを最も表現しているのは、小説の最後で描かれた茉莉の死の部分である。そこで茉莉自身が自分の死を「皇国のため……亜細亜のため」²¹と認識して死んでいったことは、茉莉が自分の意思で「死」を選ぶことを強調しているものかと思われる。また作者は、「北平をはなれて僅か三ヶ月一女間諜茉莉は死んだ……。一亜細亜のために」²²というような帝国主義の慣例的な言葉で、物語に終止符を打っている。言うまでもなく、茉莉の死に直面した際の最後の言葉にしても、作者からの茉莉の死に対する語り方にしても、すべて英雄型の語り方であると思われる。作者が間諜茉莉の死を「英雄の犠牲」としたのは、日本帝国主義の最高のスローガンになったのではないかと考えられる。

しかし、帝国主義という点からこの小説を徹底的に否定すれば、偏った評価となる恐れがある。別の側面からみれば、茉莉の死という悲劇的な結末は、表面的には英雄物語でありつつも、一方では、犠牲者であるというスパイ戦に対する内部的批判を僅かではあるが表している。

3.2 犠牲者という観点から見るスパイ戦に対する内部的な批判

「敵にはあれど／亡骸に／花を手向けて／ねんごろに／興安嶺よ／いざさらば」²³。
これは小説の最後で茉莉の死を記念するために、作者が捧げた歌である。

この歌は、八木沼丈夫²⁴が創作した軍歌「討匪行」の終わりの部分であり、関東軍参謀部によって選定・発表された、「満洲」で中国東北軍を「討伐」する将兵の姿を描くものである。「討匪行」は軍制定の純粋な軍歌であるが、厭戦・反戦歌のような歌詞・曲調で多くの人々に歌われていた。食事も補給もなく愛馬も倒れ、時には空を仰ぎながら涙を流し、戦友と生きて再会できた喜びに歓喜しながらも黙々と泥濘の道をいく様子や、敵の死体に花を手向けて弔う様子など、前線を実感的に表現している。

作者の近東は、小説の終わりの部分で軍歌「討匪行」を通じて茉莉の死を記念した。これはもちろん、茉莉の「皇国のため」の死を賛美することには違いないが、この歌を詠むことは戦争のもたらした苦痛を人々に感じさせもするのではないかと考えられる。

21 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

22 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

23 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

24 八木沼丈夫は日本の陸軍軍属で、日中戦争において日本軍が本格的に宣撫官を導入するきっかけとなった人物である。1917年には中国に渡り、1919年に現地で結婚し、1929年に「満鉄」に入社し、その後関東軍に配属されたのである。

つまりこの厭戦・反戦的性質のある軍歌から見れば、「間諜・茉莉」には、スパイ戦に対する内部的な批判があるといえるだろう。

茉莉の死を分析する際、「皇国のため」以外のもう一つの要因も無視されてはならない。それは「槇のため」である。「……最後の愛人、槇龍三のため……」²⁵と言った茉莉は、槇との恋に落ちた。しかしながら、この切ない恋愛は帝国主義の下では実現できないものであった。「一片の茶毘の煙と化した」²⁶茉莉の死体も、「寂しい」槇の心も、すべて帝国主義という背景の下では恋愛が不可能であるという証拠になったのである。つまり、スパイ戦は恋愛の障害物になるといえよう。スパイの茉莉もその犠牲者になったのである。犠牲というのは、主に以下の三点にまとめられる。

3.2.1 身分の墮落：名媛から踊り子（スパイ）へ

茉莉とチャップマンとの間のスパイ戦を見ていこう。チャップマンは、1933年の「停戦協定」が行われた時期のユナイテッド・コーレスポネンシス満洲特派員であると同時に「某国」に派遣された一人のスパイであるという設定である。彼の目的は「停戦協定」の情報を窃取することであった。彼は「大同亜細亜青年同盟」に「反満洲国的仕事を為しつつある」²⁷と疑われていた。一方、茉莉は、「大同亜細亜青年同盟」のスパイで、「茉莉」という名前で、外国人の社交場ウクライナというダンスホールの踊り子に変装した。彼女の任務はチャップマンを操縦することである。

「停戦協定」をめぐる会議の進展とともに、茉莉とチャップマンの物語は進んでいった。二人の関係は「協定」会議の開始による開始であり、会議の終焉による終焉だといえよう。前にも述べたように、茉莉はスパイになる前に、自分の美しさに惹かれたチャップマンと車で出会っている。「大同亜細亜青年同盟」に入ってスパイになった後の茉莉は踊り子という身分でチャップマンと偶然に再会したチャンスを活かし、チャップマンの日常生活に順調に介入していった。

チャップマンは茉莉に会うため毎晩ウクライナにやってくる。二人の関係はますます密接になっていった。そのなかで、情欲に駆られて興奮したチャップマンが一度茉莉に対して性的侵犯をしようとしたことがあったが、茉莉に逃げられた。そのため、茉莉のチャップマンに対する監視を中断した。しかし、スパイの仕事をするために、茉莉は特急「はと」の展望車にて、チャップマンと偶然を装って会う場面を再び作り出し、二人の誤解が解けたように見せかけた後で、彼の住んでいる場所を知り監視できるように

25 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

26 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

27 近東「間諜・茉莉」、p. 177。

なった。その後、「停戦協定」の資料を窃取にいったチャップマンの姿は一時的に消えてしまったが、やがて戻ってきた。彼は茉莉を連れて逃げようと思ったが、榎龍三に追いかける。その過程で、茉莉は自分のスパイという身分を告白し死んでしまった。

こうみると、茉莉とチャップマンはスパイ戦によって作り上げられた関係であるといってもよいだろう。この関係から茉莉を分析すると、彼女は悲しく虚しい存在であったと結論づけられる。なぜならば、まず「名媛」という身分から「スパイ」の踊り子にまで墮ちたこと（無論、帝国主義の角度から見れば、英雄主義の表現である）は不幸の開始であると考えられるためだ。彼女がスパイになる前は、独立した生活を持つ知的な女性というイメージを人々に与えるが、スパイに転じてからはそれは残酷なスパイ戦の鋭い武器になった。スパイ戦を批判する角度から見ると、これは身分の墮落だといえるだろう。「夜に静かに人々に香りをささげるライラック」が妖艶な「紫茉莉」になったことは、なんとなく人々に悲しく感じさせるのではないだろうか。

何の感情もなく、ただ情報を窃取するというだけの役目で生きている茉莉は虚しい存在でもあった。無論、茉莉の美貌に惹かれていつも情欲に目を輝かせていたチャップマンが、内心茉莉にどのぐらい気持ちがあるのかについては何もいえない。それはともかく、茉莉にとってこの関係は本心ではなく、チャップマンとの交渉もいわば、本心に逆らう行動であった（帝国主義によって「皇国のため」を標榜しはしたが）。冷たいスパイ戦に巻き込まれた茉莉は結局、死ぬ運命から逃れられなかった。死ぬ前の「……皇国のため……亜細亜のため……最後の愛人、榎龍三のため……」という言葉は逆に読者に何も言えない虚しさを感じさせる。むしろ帝国主義を抜きにすれば、無意義の犠牲であるといえるだろう。

3.2.2 失敗した茉莉の恋

一方、小説の中の茉莉と榎との恋は結ばれなかった。むしろ、始まらなかったともいえよう。なぜかという、（榎からも茉莉からも）直接に明確な告白がなかったからである。茉莉は奉天に来て以降、榎のことが好きであるということが文脈から窺えるが、直接の告白はなかった。彼女はチャップマンの行方が分からなくなった事件で榎に電話をした時に、「あのう、……会議がすんだら、一日位一緒に、ここのホテルで愉快地遊べないかしら」²⁸と話した。これが茉莉の榎への「告白」のようなものであったが、榎からの「誰と、チャップマンと？……」²⁹という返事をみれば、彼女の気持ちは届かなかったようである。茉莉の愛に対して、榎は何かを感じたかも知れないが、それには答

28 近東「間諜・茉莉」、p. 182。

29 近東「間諜・茉莉」、p. 183。

えられないほど微かなものであった。

これはおそらく、榎の人物像とかかわっているだろう。小説に榎の性格についての直接的な描写はほとんど見られないが、文脈をよく整理すると、榎龍三の性格、あるいは人物像を少しずつ明らかにすることができる。前にも述べたように、榎龍三は茉莉がわざわざ北平から奉天にやって来て会う対象である。彼は「大同亜細亜青年同盟」に所属している人物で、茉莉やチャップマンと比べると、作者の彼に対する描写はあまり多いとは言えない。榎の外貌は彼の仲間の口から語られており、「色男」、「美男子」と呼ばれ、「娘の子に騒がれそうな顔」だとされる。詳しく数えると、榎龍三の小説内での主な登場はただ五回だけである。茉莉と初めて会ったときと、茉莉の葬式に出たときの二回を除けば、残る三回のうち二回は、チャップマンと茉莉の様子を監視していたときで、もう一回はチャップマンの行方分からなくなったため、茉莉が榎に電話したときであった。以上の設定からみると、榎の任務は茉莉とチャップマンの様子を監視して必要な行動を取ることであった。

さらに文脈を整理すると、榎の性格の中には主に三つの特徴がある。まずは、彼の言動から示された「慎重」かつ冷たい性格である。茉莉がチャップマンに性的に侵犯される事件の中で、榎のそのような性格が見られる。逃げた茉莉が事件の経過を打ち明けた後、榎は「……今晚は十分に臥んで下さい。我々の仕事が成功するまでは、まだまだ倒れてはいけない身体ですからねえ……」³⁰という言葉を出した。慎重で安心させる言葉だったが、どこか仕事はまだあるので死んではいけないという冷たい印象がこの場面から伝わってくる。

次は彼の「満洲国」への擁護である。榎にしても、仲間の酒井にしても、また死んだ茉莉の父親日向直樹にしても、彼らはすべて「満洲開拓団」に伴って満洲にきていた。1932年に「満洲国」が樹立されたと同時に、榎のような日本人は「満洲国人」になった。榎が所属した「大同亜細亜青年同盟」は一切の「反満洲国」の行為と戦う組織であった。榎の眼には「支那人」、「露西亞人」という民族区分が確かに映されている。榎がはじめて茉莉に会った時に、彼は茉莉を「支那人」と見間違った。それに、監視任務の中で「露西亞人」の踊り子に目を注いだことも同じく、彼が日本人以外の存在に関心を持っていたことを明らかにしている。つまり、榎は『満洲国』の「五族協和」といった理念を認識していて「満洲国」を擁護していたのである。また、榎も帝国主義への絶対的な服従者であった。「彼等のみ栄えんがため滅びゆく／亜細亜、亜細亜、我等が亜細亜」³¹。これは榎の歌であった。

30 近東「間諜・茉莉」、p. 179。

31 近東「間諜・茉莉」、p. 181。

要するに、楨は、帝国主義に駆られた在満日本人のイメージを持っているのである。こういう背景の下で、楨は帝国主義に描かれた蜃気楼に心酔し、茉莉の愛を完全に無視した。帝国主義の暗闇で、茉莉と楨との恋愛には光が決して差し込まない。このように考えると、茉莉の愛はやはり虚しかったのである。

3.2.3 茉莉の死：帝国主義の犠牲者

茉莉は愛人楨の懷中で死ぬことができなかつたところか、その死体はチャップマンによって路上に遺棄された。翌日、彼女の死体は火葬場に運ばれ、一片の茶毘の煙と化した。茉莉の死はこの物語に終止符を打つと同時に長い感傷を残した。読者はこの悲しみに包まれているうちにいつの間にか、何も悪いことをしていない茉莉がどうして死ななければいけないのかという問いを抱くようになるだろう。茉莉の死については、以下の二点が非常に興味深い。

一つは茉莉が楨の弾丸に撃たれたことであつた。茉莉は最初に自分の思いを寄せた愛人楨の弾丸に撃たれて倒れたのである。ここには、どうしてそのような設定があるのかという疑問が生じるが、「愛」と「任務」との間にその答えは見つかるかも知れない。つまり、「愛」と「任務」のどちらが優先されたかを考えれば、明らかに任務が勝利したのである。追いかけたチャップマンの自動車に茉莉がいるにもかかわらず、楨は自分の任務を果たすためにピストルを撃った。言い換えれば、茉莉の安全は無視されたのである。

それに対して、茉莉は間諜としての任務を完遂させるため自分が愛する人の弾丸に撃たれたことには、何の文句もなかつた。変わらず楨のことを思いながら、黒いカバンを車体の外に投げるといふ任務を完遂したあと、死に直面した。楨が茉莉のことを好きかどうかは小説の中にははっきりとは書かれていなかった。しかし、楨は「茉莉は自分をあいしてくれているのではなからうか」³²と考えたことがある。この自問からみれば、楨は内心では茉莉のことを愛していたのかもしれない。だが、茉莉の葬式に出た楨の目には涙がなかつた。理由を考えると、やはり「任務」を完遂したからだろう。

もう一つは、いわゆる「何等の被害」も加えられていなかったことである。茉莉が死んだあと、「凱歌を挙げた。天佑的に、何等の被害も、未だくわえられていなかったのだ」³³と作者はこのような言葉を使った。茉莉の死の悲しさと凱歌とは明らかに対照的である。帝国主義を代表していた捜索隊は少しも茉莉の死を悲しく感じていなかっただろう。ここでは、「凱歌」という言葉が使用され、人間性を潰す帝国主義の本質が側面

32 近東「間諜・茉莉」、p. 181。

33 近東「間諜・茉莉」、p. 189。

から反映される。ここでようやく、前に出てきた「何も悪いことをしていない茉莉がどうして死ななければいけないのか」という問いに答えられるだろう。要するに、帝国主義は、スパイになった茉莉を助けるはずはなかったのである。いわば、最後に茉莉は帝国主義の犠牲者になったのである。

おわりに

「満洲国」が成立した後に「満洲」では各国間の勢力が互いに角逐し、スパイ戦が激しくなった。こうした社会背景の下で、スパイを描く文学作品が現われてきた。その一例としての「間諜・茉莉」は、「満洲」のスパイ戦を描いた小説である。その中で登場した茉莉、外国間諜のチャップマン、露西亜の踊り子などの、彼らのような存在は「満洲国」には確かに存在した。スパイ小説の出現は当時の都市発展による都市文化の成熟及び探偵小説などの通俗文学の流行と関係があると思われる。また、各国間の勢力角逐という複雑な社会背景は、スパイ小説の創作に基礎的な素材を提供したといえよう。

時局と接するのは、スパイ小説の最も大きな特徴であると言えよう。「間諜・茉莉」は「塘沽停戦協定」を背景にして創作されたものである。また、小説における英雄型の物語の創作は、「愛国」精神を表し、日本帝国主義を擁護する傾向も示している。しかしそれと共に、戦争による人々の死亡や、災難や、悲惨な運命などもその内部には反映されている。スパイ戦で死んだ茉莉はその一例である。スパイ戦に巻き込まれた茉莉は、表向きは英雄として描かれる一方で、その裏ではスパイ戦の犠牲者としても描かれている。

植民地空間で創作された文学の多くは、植民地支配者の意思に配慮し、支配者の立場や視野から見て許される架空の風景を描いただけである。それに対して、もっと客観的な、実際の生活の様態については隠されたのである。無論、小説「間諜・茉莉」は「五族協和」の理念を唱えた帝国主義を表す文学作品として、以上に述べた植民地文学の性格、あるいは本質から逃れられなかった。しかし、帝国主義の硬い衣を剥いだ読みからは、戦争に対する内部的な批判の意味を僅かだが味わうことができる。

第4章 「満洲国」の成立と「建国宣伝」

——大庭武年の戯曲創作

はじめに

群家陸夫の時評「寂寥たる満洲文芸界」は『満蒙』の第143号（1932年3月）に掲載されており、そこでは、「満洲郷土芸術のために一般文学青年の要望してゐるものは、自由たるそして権威ある発表機関への待望である。先づ近頃萎縮した観のある大連新聞文芸欄、さきに徹廃した満洲日報同欄の復活がそれである。之と共に小説、戯曲の発表機関も必要である」¹と述べられている。

こうして雑誌『満蒙』にも、小説、戯曲といった体裁の文学作品が要求されるようになった。「満洲国」が成立した翌月、第144号に大庭武年の執筆した戯曲脚本・「張学良」（上）が掲載され、戯曲作家としての大庭武年が『満蒙』に登場した。その後、1932年から1935年にかけての三年間で大庭武年は7本の戯曲を創作して『満蒙』で発表した。

これらの戯曲は、大庭武年の「満洲国」戯曲作家としての地位を確立したといえよう。「満洲国」時代において、戯曲は政策の宣伝手段として大きな役割を果たしていた。当時発刊の雑誌や新聞の紙面には「支那劇」や戯曲に関する研究と創作が非常に多い。『満蒙』を開いてみれば、「満洲国」成立前の1920年代から在満日本人は「満洲」の戯曲に非常に興味を持っていたことがわかる。最初は主に「支那劇」の研究と劇作の和訳を中心に行われていた。そのなかでは、日本でも有名な劇評家であった辻聴花の「支那劇」研究と中国劇作家・田漢の劇作の和訳に特に眼が引かれよう。

辻聴花は「支那劇雑話」（1921年3月）の連載をはじめとし、「支那の南と北」（1922年6月、7月）、「支那芝居いろいろ」（1924年1月）、「支那芝居楽屋風呂」（1925年8月）などの「支那劇」研究を『満蒙』で発表した。一方、劇作の和訳も行い、田漢作・柳湘雨訳の「午飯之前」（「午昼の前」、1928年1月）はその代表的なものである。しかし、この時期においては戯曲研究や「支那劇」の和訳は多いが、新戯曲の創作はほとんど見当たらない。「満洲国」が成立した後、新戯曲、即ち「満洲国」戯曲の創作は政策宣伝の手段として現われた。そのなかでは、大庭武年の戯曲創作は見落とすことはできない。大庭の戯曲を満洲文学という大きな枠組みに入れてみるならば、満洲文学の実質を見出すために大庭の戯曲創作を追究する必要があるだろう。

1 群家陸夫「寂寥たる満洲文芸界」『満蒙』（143）中日文化協会、1932年3月、p.128。

これまで大庭武年は、探偵小説作家としてのみみなされることが多かった。西原和海の「大庭武年」（『朱夏』（13）（特集 探偵小説のアジア体験）せらび書房、1999年）論や細川涼一の「大庭武年雑記——旧満洲大連の探偵作家」（『京都橘大学研究紀要』（33）京都橘大学研究紀要編集委員会、2006年）等の先行研究においては、主に大庭は「探偵作家」として論じられている。大庭の戯曲創作への言及も散見するものの、詳しく論じられてはいない。それにもかかわらず、大庭が創作した戯曲は、「満洲国」成立後、「満洲国」による政策宣伝の過程で戯曲が如何なる役割を果たしていたのかという点において価値があるものである。特に「満洲国」戯曲を研究する際には在満日本人の視線への探究は必要である。本章では、1932年の「満洲国成立」を境に分断された大庭武年の前期の探偵小説創作と後期の戯曲創作を繋げ、特に「満洲国」期に創作した戯曲を中心に、その創作の手法を検討する。

1 現実主義——大庭の探偵小説と戯曲を繋げる

大庭武年の出身と履歴については、すでに西原和海論、細川涼一論、横井司論（「解題」『大庭武年探偵小説選Ⅰ』論創社、2006年）などには論じられた。それらを纏めてみると、大庭は1904年に静岡県浜松市に生まれ、7歳の時に父大庭仙三郎が「満洲」に渡った。父と共に渡満した大庭武年は大連の大広場小学校に転校し、そこで彼は後に文筆家となる金丸精哉と知り合った。小学校を卒業した後、大庭は大連第一中学に進学する。同級生の中には後に小説家となる北村謙次郎や詩人となる薊一郎などがいた。在校中、大庭は北村、薊らを誘って文芸同人誌『アンジェラス』を刊行するなど、すでに文学を愛する少年であった。父の仕事のため、幼少年期を中国の大連で過ごしたが、中学校を卒業した後、大庭は早稲田大学第二高等学院文科に入学し、その後、早稲田大学文学部英文科に進学した。そして1928年の卒業後すぐ大連に戻って、小説家を志し文学の創作活動を始めた。1930年10月、大庭の探偵小説「十三号室の殺人」は雑誌『新青年』の懸賞に入選し、探偵小説作家として内地日本の東京文壇に登場した。その後、大庭は探偵小説家としての地位を確立することをめざして雑誌『新青年』に「競馬会前夜」（1930）、「ポプラ荘の事件」（1931）、「牧師服の男」（1932）、「小盗見市場の殺人」（1933）などの短編探偵小説を発表した。これらの作品は「小盗見市場の殺人」以外はすべて、「満洲国成立」の前に書かれたものである。いわゆる大庭の前期創作にあたる。雑誌『新青年』に発表の機会を得て開始された短編探偵小説の創作は1932年に「満洲国」が成立して以降少なくなり、日本内地の文壇においても大庭は姿を消し、1945年に戦死したこともあり彼の存在は人々に忘れられた。

戦後に大庭の探偵小説が再び評価されたのは1970年代のことであった。これについて細川は以下のように指摘する。

忘れられた探偵作家であった大庭が戦後に再評価されるきっかけとなったのは、探偵雑誌『幻影城』が一九七七年五月に「大庭武年作品特集」を組み、大庭のデビュー作「十三号室の殺人」と「小盗児市場の殺人」の二編を再録したのほか、編集長島崎博氏による「大庭武年作品集について」と題する大庭の作品リストを掲げたことである²

ここで注意すべきなのは、大庭の探偵小説に現われた、非現実主義と現実主義が交差するという創作の特徴である。探偵小説として虚構の非現実的要素が欠かせないことは言うまでもないが、大庭の作品の中には現実主義的な側面もある。大庭は小説の中で当時の大連市のことを「D市」、旅順市のことを「R市」のように表記しており、現実の場所を舞台にしていることを暗に示している。特に彼の郷警部シリーズの作品³に登場する警部は大連市警の警部のことである。作品の「小盗児市場の殺人」においても、都市・大連の姿や当時の下層中国人の生活状況をリアルに描いている。当時、大連市は日本の植民地都市であり、日本人や中国人のほか、ヨーロッパやアメリカから来た人々も多かった。それに、当時の大連はモダン都市に発展しつつあった。「小盗児市場の殺人」は1999年4月にまた文化探究誌『朱夏』第13号（特集「探偵小説のアジア体験」）に再録され、同号に西原は大庭の探偵小説創作とモダン都市の大連を繋げて以下のように指摘する。

これらの作品群を通観してみると、私たちはそこに、彼の並々ならぬモダニズム趣向をうかがうことができる。一九三〇年代初頭の『新青年』と探偵小説とが有するモダニズムが、自分本来の感性によく共鳴することから、彼はまず取りあえずこのメディアと小説ジャンルを選び、試してみたのではなかったのか。（略）実生活の大庭は、その頃、大連きってのモダン・ボーイだったと伝えられている。大連が産んだモダニズム文学としては、安西冬衛たちの詩誌『巫』がよく知られているが、この都市のモダニティと文学の関わりを考察していくために、今後、大庭文学の読

2 細川涼一「大庭武年雑記——旧満洲大連の探偵作家」『京都橘大学研究紀要』(33) 京都橘大学研究紀要編集委員会、2006年1月、p. 40。

3 郷警部シリーズとは「十三号室の殺人」「競馬会前夜」「ポプラ荘の事件」「牧師服の男」「海浜荘の惨劇」という五作を指す。

み直しが進められることを、多少とも期待したいところだ。⁴

大庭探偵小説の魅力は確かに西原に指摘された「モダニズム」である。しかし、その創作舞台としての大連が大庭の創作によってどのように表象されているのかは検討する必要があるだろう。柴紅梅は「小盗児市場の殺人」を例にして、大庭武年の探偵小説と都市・大連との関連性を分析している。

大連に暮らしているほとんどの日本作家は植民地としての大連の一面を退け大連の良さ、美しさしか描かない。このような描写は最も重要な植民地の問題を無視し、エキゾチックでモダンな都市としての大連の姿だけを見せ、日本の読者に大連を不正確に認識させるに違いない。大庭はこの点を認識して当時の大連の悲惨な一面もリアルに描写しており、私たちに植民地都市としての大連の真実を見せた。(筆者訳)⁵

「満洲国」成立後、在満日本人は「王道楽土」、「五族協和」というスローガンを打ち出し、幸せな生活を迎えたと言っていたが、中国人、特に下層の中国人にとっては途方もない悪夢であった。「小盗児市場の殺人」のなかにも売春、犯罪、頹廢、苦悶などの場面が描かれているように、大庭は暗渠の中に暮らしていた中国人たちの苦難を見ていた。大庭はこの中国人の「悪夢」を小説の中に書き入れ、ある程度客観的に大連の姿を呈示していたように思われる。この角度から見れば、大庭武年は現実主義作家ともいえるであろう。少なくとも、探偵小説というフィクションにリアルな要素を織り込むという点からは、大庭武年という作家がもともと現実主義的な傾向を持っていると思われる。

「満洲国」の成立にともない政治に身を投じた大庭は文学活動を中止し、「満洲国」の建国運動に専念していた。それゆえ、1932年は創作の空白期にあたる。しかし大庭の政治活動は失敗した。柴紅梅によれば、大庭が加わった笠木良一らの一派は総務庁及び関東軍と対立しており、最終的には新政府に追い出されてしまったため、大庭の建国運動は全くの失敗であった。⁶なぜ大庭が文学創作を中止し、政治に身を投じたのかについては、「モダニズム作家から満洲国官吏へと、大庭の跳躍的な転身ぶりには驚かさ

4 西原和海「大庭武年」『朱夏』(13)(特集 探偵小説のアジア体験) せらび書房、1999年4月、p. 52。

5 柴紅梅《大庭武年偵探小説と大連之关联——以《小盗児市場殺人》为例》《学术交流》2010(6) 黑龙江省社会科学信息中心、2010年6月、p. 186。

6 注5に同じ。

れるし、こちらこそが真の謎だといえる」という西原の指摘のように、未解決の問題である。ただ、大庭は政治活動の失敗をきっかけに、自らが備えていた現実主義の要素を展開し、虚構的な探偵小説の創作から現実の要素を多くはらんだ戯曲創作に活動を移したということは可能かもしれない。

大庭の探偵小説と戯曲の創作とは現実主義という点によって繋げることができる。「満洲国」成立の1932年を出発点に、大庭武年は雑誌『満蒙』を活動の拠点にして戯曲を創作し、探偵小説作家から国策宣伝を担うひとりの「知識人」へと変貌しつつあったのである。彼は「満洲国」が成立した翌月に発行された『満蒙』（第144号）に戯曲脚本「張学良」（上）を発表し、戯曲作家として『満蒙』に正式に登場した。その次号の第145号で「張学良」（下）も発表した。戯曲「張学良」を皮切りに、大庭は「烽火」（第155号）、「清朝終焉」（第158号）、「馬占山」（第159号）、「満洲開基」（第167号）、「蔣介石」（第169号）、「劉愛護村長」（第177号）などの戯曲脚本を発表した。またそれ以外にも、「凱歌あがる下に」（第147号）、「故国」（第153号）という二編の短編小説と、評論「満洲国に翹望する映画政策」を発表している。

2 個人的志向と「満洲国」の建国宣伝——満鉄入社前の戯曲創作

「張学良」から「劉愛護村長」に至るまでの間の、戯曲を創作した時期によって、創作の背景と大庭自身の志向は変わっていつている。大庭が「満鉄」に入社していなかった時期は、国策宣伝の一面は存在しつつもある程度隠されており、通俗歴史叙述者としての個人の志向が強い。大庭自身は「今の僕としては強ひて通俗歴史叙述家としてより以外にして自分を生かさうとは考へてみない」⁷と述べている。

大庭の戯曲は概ね1932年から1935年にかけてのおよそ三年間で執筆されたものである。大庭は1934年に「満鉄」の鉄道総局愛路課へ入社したので、「劉愛護村長」以外の戯曲はほとんどが「満鉄」に入る前に創作したものであると推測できる。大庭の「満鉄」入社に関しては、横井氏によれば、1932年に満洲国資政局弘報処員に「民間人」として起用され、1934年に奉天にあった鉄道総局愛路課長の引き立てで愛護村課長として「満鉄」に入社したというである。⁸「劉愛護村長」が「満鉄」の鉄道総局による愛路運動への宣伝に応じて創作されたものであることは言うまでもなく、創作時期から見れば、それ以外の大庭戯曲は大庭が満洲国資政局弘報処員に「民間人」として起用

7 大庭武年「蔣介石」『満蒙』（169）満洲文化協会、1934年5月、p.170。

8 横井司「解題」『大庭武年探偵小説選Ⅰ』（大庭武年著 論創ミステリ叢書）論創社、2006年12月、p.258。

された時期に創作されたものである。「満洲国資政局弘報処」とはいったいどのような存在なのかは、大庭の創作に直接に影響を与えるものではないかと考えられる。

岡部牧夫の論述によれば、「満洲国資政局弘報処」は弘報処の前身であり、地方自治の指導と建国精神の宣伝を目的とし、リットン調査団対策や満洲国承認のための対日宣伝を行ったが、1932年7月に廃止になった。しかし広報は必要だとみなされており、対外広報のため外交部宣化司が設けられ、1933年4月には総務庁情報処が新設された。情報処は文書による対内宣伝工作が仕事であり、また、治安維持会内の宣撫小委員会で幹事役を果たして討伐にともなう宣撫工作の推進も行った。1937年7月、総務庁強化の改革により情報処は弘報処として改組され、それまでの総務科、情報科に監理科を加えた三科体制となった。⁹

そのことを踏まえれば「満洲国」の初期には新政府機構の変動が大きく、「民間人」として採用された弘報員の大庭は体制から外れていったと推測できるだろう。従って、この時期の大庭の戯曲創作は「弘報」からの影響は弱く、大庭自身の経験に根ざしていたり、私的な関心（たとえば、歴史に対する興味など）に基づいたりしていたと考えられる。

この時期に彼の創作した戯曲は主に三種類に分けられる。第一は歴史物、第二は政治における重要人物を描くもの、第三は物語である。大庭は「民間人」として採用されたとはいえ、弘報員として自作の中で「満洲国建国」を宣伝しなければならなかった。これらの戯曲の中に描かれた場面からは、国策宣伝のためのいくつかの特徴が見出せる。

2.1 侵略性を「平和の為」に置き換える

「満洲事変」は日本人による侵略行為の起点であると考えられるが、大庭は満洲事変の合理性をまず強調する。戯曲「張学良」には「満洲事変」が描かれている。「張学良」は『満蒙』の第144、145号に掲載されたもので、全部で四幕十二場であり、大庭の創作した戯曲の中では最も長いものである。この戯曲は当時「満洲」で発生した「張作霖爆殺事件」（1928.6）や張学良の「易幟」（1928.12）、「満洲事変」（1931.9）などの時局状況に基づいて創作され、張学良派と楊宇霆派の内部闘争や「東支鉄道」をめぐる張学良とロシアとの論争などを描いている。作中には一人の日本軍人と張学良との対談が描かれており、その日本軍人は次のように言っている。

暴力を用ひるのはどちらだ。直接事件の口火を切つたのも、計画的に事件を孕ま

9 岡部牧夫『満洲国』講談社、2007年12月、pp.59-73。

せたのも、一切汝等自身ではないか。支那の一致団結が汝等悪政治家の利欲的な団結である以上、天は永久に汝等と共にないだらう。又汝は我軍を軍国主義の侵略軍と称するが、笑止にすぎた世迷ひ言葉ではないか。我国がしばしば軍隊を動員させて、幾多の貴重な碧血と莫大な国幣を費したのは、いづれもたゞ平和を目的とするのみだった。(略) 汝等は多年紛乱ばかりに終始して、毫も近代的紳士国の体をなさず、軍隊は武装した匪賊とかはらず、累を隣国日本に及ぼす事再々ではなかつた。日本生命線擁護の当然なる帰趨であり、又東洋平和の鍵を確実ならしめんとするに外ならないのだ。満洲に平和なくして東洋に平和はない、又満洲の平和なくして日支の真の親善はないのだ。¹⁰

日本軍人の言葉によれば、「満洲」に軍隊を動員させ満洲事変を起こしたのは「平和を目的とするのみ」であったことになる。この「平和」という大義名分で帝国日本の侵略者の身分も平和擁護者と新国家擁護者へと置き換えられる。それと同時に、日中関係が侵略——反侵略という対立関係から友好関係までに変化させられ、日本による侵略性も不可視になっている。日本が平和の擁護者に変身するのに対して、張学良などの中国の反侵略者たちは逆に「平和破壊者」と言われていた。戯曲「張学良」は張学良という人物を「武力解決」の戦争主義者、または平和破壊者と見なしており、「忘恩の徒、私欲に汲々たるの汝等の一家は、調子にのつて我權益を蹂躪せんとし、暴戾な東北軍憲はあらゆる方面に於て非人道的な行為を敢行したのだ」とされている。侵略性を「平和の為」に置き換えることを通じて、ある程度日本の侵略者の身分をうやむやにしているのである。

2.2 日中の対立関係を転嫁し、日本帝国主義を美化する

日本の侵略者という身分をやむやにした後に、「満洲国」における日中の対立関係、特に中国人の日本に対する恨みまでを他方に転嫁する。例えば、「張学良」には、張学良をロシアとの対立の中に置き、中露の対立関係を際立たせることを通じて日中の対立を転嫁する傾向が見られる。東支鉄道の回収をめぐる描かれた張学良とロシアの労農国総領事メリニコフとの対談はその代表的な一例として挙げられる。

(メリニコフ) ギエネラル・張、私は私共政府が出来るだけの妥協的態度に出てみるに不拘、あくまで貴政府が態度を改めにならないのを残念に思ひます。お察し致

10 大庭武年「張学良」(下)『満蒙』(145) 満洲文化協会、1932年5月、p.147。

す所、続々として東支沿線に送達される支那軍隊は、武力を以て当該問題を解決なさらうとのご意思の表明だと思ひますが、しかし、我々は最後迄事を好み度くはありません。今日ここに携へましたのは十箇條の平和解決策なのですが、出来ます事なら、これを貴国政府でご討議下さいませんか？

(学良) 頂いておきませう。だが念の爲めにお訊ねしておきますが、これは最後の通牒と言ふのでせうね？

(メリニコフ) 如何にも、無論露国にも他国の暴力に対し露国民の合法的権利を擁護するに必要な十分な手段を有してゐる筈です。¹¹

東支鉄道の權益に関して中露の激しい衝突を描いたものの、日中の対立には触れていない。このような例は大庭戯曲の中に数多くみられる。例えば、「馬占山」に描かれた馬占山とフランスのジャーナリストとの対立、「清朝終焉」で言及した袁世凱の英露外交、「蔣介石」¹²に表された中華民国と軍閥との対立などが挙げられる。数多くの対立関係が書かれた一方で、日中の対立は意図的に隠してその様子が覗かれないようになっている。

これが、大庭が戯曲の中で設定した日中対立の転嫁である。この転嫁は内部への転嫁と外部への転嫁に分けられる。前者は、「満洲国」の内部に対立の原因をもとめるもので、「満洲」の人々の苦難と貧困を「満洲国」成立前の軍閥間の戦争及び匪賊の猖獗に押し付け、「新国家」が軍閥や匪賊などを消滅させ利益をもたらしたことを強調する。後者は、日中の対立を「満洲国」の外部に対立の原因をもとめ、ロシア、英米仏などの西洋国家に責任を転嫁するものである。

民族の対立を転嫁すると同時に、帝国日本を出来る限り美化する。例えば、「張学良」の中で一人の日本軍人が次のように言っている場面がある。

日本は満蒙に領土的野心があつて兵を動かしたのではない。総ては東三省悪政から、誘引されたのではないか。そもそも東洋の楽土満蒙は誰れの手によつてこれ程迄に建設されたか。支那人の力によつてか！アメリカ人、イギリス人の力によつてか！今更くどくどしく過去の歴史は茲にくりかへすまい。たゞ従来の日本がきはめて自由主義的な立場に立つてゐればこそ、日本人のみならず満蒙居住支那三千万

11 大庭武年「張学良」(上)『満蒙』(144) 満洲文化協会、1932年4月、pp. 159-160。

12 「蔣介石」は蔣介石が校長として1924年に黄埔軍校を創設したことを背景ににして大庭武年が創作した三幕劇である。この戯曲では蔣介石は新軍閥の独裁者として描かれている。この戯曲からは大庭武年の蔣介石に対する嫌悪感が読み取れる。

民衆の救済に外ならないのだ！¹³

「従来の日本がきはめて自由主義的な立場に立つてゐたればこそ、日本人のみならず満蒙居住支那三千万民衆の救済に外ならないのだ」という言い方からは帝国日本を「楽土満洲」の建設者と見なし、帝国日本を美化する大庭の意図が読み取れるのであろう。

2.3 反日派を醜悪化する

大庭によって戯曲化された歴史上の人物、張学良、馬占山、蔣介石などは醜悪化される傾向にある。特に「馬占山」においては、大庭は馬占山を「如何にして満洲馬賊より大怪力の冒険家」、「満洲の大沼地で大蛇を素手でつかまへ、狼と格闘してこれを生擒つたと言ふ見世物的の人間」と描写している。

「馬占山」は第 159 号に掲載された、フランスのパリを舞台にした三景のものである。1932 年初夏、「悪戦苦闘を重ね、幾度か死地に陥ったが、その都度幸運に恵まれ、やうやくにして生命を全うしてヨーロッパにのがれ」¹⁴た馬占山は援助を求めるためにホテルで仮病を使ったが誰も訪問してくれなかった。さらに、最後にはフランスの新聞記者に騙され、「ムツシュウ・マ・チャン・シアンは満洲の大沼地で大蛇を素手でつかまへ、狼と格闘してこれ生擒つたという見世物的な人間」だと新聞の中で紹介されてしまう。

馬占山はこの戯曲のなかで完全に醜悪化されている。大沼地で大蛇を素手で捕まえたり狼と格闘したりするイメージで描かれた馬占山はどう見ても正常な人間ではない。実に醜悪化された人物である。しかし、馬占山は次のように自己紹介している。

（林相文）皆さん、馬占山・将軍は支那の輿論を世界に訴へる人物です。馬占山・将軍はあらゆる満洲国の魔手をくぐつてたゞ世界に満洲問題に就ての真相を発表せんが為に生きのびて来られた方なのです。

（馬占山）思ふに東洋に於ける帝国主義日本の暴状は今や言葉に絶し、祖国への反逆者満洲国要人をそそのかし、三千万民衆を偽つて、我々の祖国「中華民国」を救ふべからざる窮地に陥れんとしてゐる。¹⁵

馬占山の自己紹介と記者の描写を比較してみると、そのズレは明らかである。馬占山

13 注 10 に同じ、pp. 146-147。

14 大庭武年「馬占山」『満蒙』（159）満洲文化協会、1933 年 7 月、p. 213。

15 注 14 に同じ、p. 212。

の自己紹介を認めず故意に彼を醜悪化するという設定は、東北救国抗日聯軍に対して蔑視の態度を取り、馬占山を醜悪化する大庭の意思を反映している。

周静の論によれば、「満洲国」が成立した後に馬占山はゲリラ戦を展開したものの、軍事的劣勢を跳ね返すことはできず、1933年にはソ連へと脱出した。その後、ヨーロッパ経由で再び中国に入国した。¹⁶大庭はこの時期の馬占山に基づいて醜悪化した馬占山像を作り出したといえるだろう。

2.4 歴史から「中国」を取り除き、「満洲」のイデオロギーを創造する

日本は中国の歴史及び当時の社会的な状況を詳しく考察し、可能な限り歴史の角度から侵略行為の合理性を作り出そうとした。1906年に設立された「満鉄」は一見すると鉄道経営の会社であるが、内実は日本に情報を提供する機関であり、日本関東庁の指示の下で「満洲」の社会文化と歴史を全面的に調査していた。大庭が創作した戯曲はこの背景の下で『満蒙』に発表されたのである。そのなかでも、最も代表的な作品は第158号に掲載された「清朝終焉」と第167号に掲載された「満洲開基」の二本である。

「清朝終焉」は、大庭が1891年から1908年にかけての清朝末期の歴史に基づいて創作した四幕二場劇である。そこでは、袁世凱、李鴻章、張之洞などの北洋派¹⁷や西太后（慈禧太后）、李蓮英、光緒帝、榮禄などの人物が続々と登場し、清朝の内部危機、すなわち、李鴻章などの北洋派と榮禄などの保守派との闘争を描いた。また、西太后、光緒帝、孝欽皇后をめぐる宮中の不和と腐敗、袁世凱の英日露外交、西太后の崩御などの場面も描いている。この戯曲は、「新しき民衆の時代は徒に溟濛な暗黒政治の雲を破つて輝き始めたやうです。古いものは滅びる、腐つたものは倒れる——これは当然な事だと思います」¹⁸と書かれているように、清朝終焉の主な原因を清朝が時代に遅れていたという点に求めているとまとめられる。

「満洲開基」は『満蒙』の第167号に掲載された、満洲発祥の伝説についての三幕劇である。戯曲開始後の独白で「『満洲実録・巻一』を披見すると、我国の神話に類した満洲発祥の伝説が記されてある。もとより荒唐無稽な内容であるが、満洲国誕生の現在、考へてみるとたいへん浪漫的である」¹⁹と述べられているように、この作は「満洲国」

16 周静《馬占山在苏联及欧亚六国的活动考略》《世紀橋》2016(4) 黒龍江省史志研究室, 2016年4月, p. 9。

17 北洋派は清朝末期に李鴻章が結成した地方軍・淮軍が主体となっている。袁世凱は1901年に清朝の北洋通商大臣に就任し、西洋式の新しい北洋軍を設立し、北洋軍が年々拡大し、北洋だけではなく中央や各地方にも鎮守することになった。1911年から1912年にかけて起こった辛亥革命により、袁世凱は革命軍に協力して清朝を打倒し、中華民国の樹立に協力した。

18 大庭武年「清朝終焉」『満蒙』(158) 満洲文化協会, 1933年6月, p. 217。

19 大庭武年「満洲開基」『満蒙』(167) 満洲文化協会, 1934年3月, p. 236。

の歴史的意義を求める創作だと考えられる。この戯曲は主人公の布庫哩雍順の誕生と成長、そして最終的に「満洲」の国王になる過程を語っている。

この二作の史的な正確さについては、大庭自身も「必ずしも史的正確さを第一としなかつた。劇の構成上、時間と空間を極端に圧搾し、人物も必要に応じて自由に取捨した。又史実も可成り単純化され、はぶき去つた所も一二に止まらない」²⁰と述べているように、大庭は正史を追究するのではなく、歴史的言説から見えた「満洲国建国」の合理性を求めているのである。この二本の戯曲では、「中国」の歴史が覆い隠され、「満洲」、或いは「満洲国」という存在に置き換えられている。たとえば、「満洲開基」の中の以下の対談が象徴的である。この対談からは「満洲国」の歴史を構築しようとする大庭の意図が見える。

（布庫哩雍順）最後の強敵も、たうとう滅びてしまつたのだな。これで全国は平定したのだ。

（兵一同）お目出度うございます。

（布庫哩雍順）うむ。しかし、この目出度いと言ふ事は、わしに言う言葉ではなく、今迄兵乱に苦しめられてゐる人民たちに言ふ言葉ぢや。わしは全部の国を引つくるめて、「満洲」と言ふ国を立てる事にしよう。わしが天意によつて国王だ。

（兵一同）国王は天の聖人、国号は「満洲」ぢや！

（布庫哩雍順）「満洲」はこれより以降、連綿として続き、人民は「満洲」を天下の楽土と謳歌するに違ひないのだ。「満洲を享け継ぐ王たちよ、おみらは、我と同じく天より預けられたる神の御子であるぞ！²¹

「国王は天の聖人、国号は「満洲」ぢや！」という語り方はそもそも歴史上に「満洲国」が存在すると言っているようなものである。つまりここでは、「中国」の歴史を抹消し、「満洲国」の新しいイデオロギーを創造しようとしたと言えるだろう。

「満洲国」時代において、日本は侵略行為を覆い隠すため、様々な文化的手段を取つて歴史的事実を捻じ曲げ、新しいイデオロギーを作り上げて民衆の頭に注入しようとした。そうすることで「満洲」を植民統治しようとしていたのである。その過程で文学、映画、戯曲などの芸術的な手段が使われている。日本は「満洲」の民衆に対して思想を変えることを求め、イデオロギーで支配しようとしていた。そこにおいて最も重要な作業のひとつに、「中国」という概念を取り除くことがある。

20 注 18 に同じ。

21 注 19 に同じ、p. 251。

以上をまとめてみると、大庭は実際に戯曲創作を通して「満洲国」の建国を宣伝していたのである。様々な語り方によって側面から「満洲国」の合理性を主張していた。大庭は創作の中に可能な限り自分の意図を織り込み、歴史と時局とに関わる多様な物語を書いた。しかし、満鉄入社後に創作された「劉愛護村長」には大庭の個人的な考えが失われ、国策宣伝の主旨が直接的に現われている。

3 完全な国策宣伝者となる——「満鉄」入社後の戯曲創作

1934年に大庭が「満鉄」に入社した後、鉄道保護という国策を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表された。ここに明確な国策宣伝者の姿が現われたのである。「劉愛護村長」は、「満鉄」によって展開された「愛路運動」を背景に創作された作品である。

この戯曲が創作された時期はちょうど大庭が鉄道総局の愛路課に勤務していた時である。鉄道保護という「満洲国」の国策を宣伝する意思が明確に呈示されている。国策宣伝者としての大庭がいかに戯曲の中で「満鉄」の国策に迎合しつつあったのかを解明するには、これらの戯曲の背後にある国策宣伝という創作上の特徴を検討しなければならない。

政治的国策を文学作品に織り込むために文学作品の中に国策宣伝者を設定するのは、当時の「満洲国」の国策文学作家にしばしば使われた手法である。いわゆる「国策宣伝者」の役割は「満洲国」の民衆を啓蒙することである。これらの国策宣伝者は「満洲国」という新政府の考えを代弁し、国策宣伝の要務を担っていた。当時の新政府は「鉄道は我々の生命線！鉄道は我々の責任！鉄道は我々の義務！」²²という鉄道愛護を提唱し、人々に押し付けようとしていた。大庭戯曲「劉愛護村長」の中に登場した劉村長はそのような国策宣伝者の代表的な一人である。大庭がなぜ戯曲の中に国策宣伝者を設定したのかには、やはり彼の「満鉄」入社と関わっている。

前述のように、大庭は1934年に「満鉄」に入社し、奉天にある鉄道総局愛路課に勤務するようになった。鉄道総局愛路課に奉職したのにともない、彼自身も大連から奉天に転居した。その時に大庭は『昭和十三年版 愛路運動の全貌』（1938年12月）、『護れ愛路旗——愛路文芸集』（1939年9月）の2冊の著書を刊行したのである。『満蒙』の第177号に掲載された「劉愛護村長」も後に『護れ愛路旗——愛路文芸集』の中に収録されている。従って、戯曲「劉愛護村長」は「愛路運動」を背景にして創作された作品といえる。

22 何爽《伪満洲国戏剧中的殖民现代性景观》《吉林广播电视大学学报》2015(3) 吉林广播电视大学, 2015年3月, p. 89.

愛路運動（全称「鉄道愛護運動」）とは「満洲国内に於ける鉄道を沿線住民者の力に依つて積極的に防衛愛護せしめようと云ふ工作のことである」²³。愛路運動の主旨について、1939年に鉄道総局附業局愛路課によって編撰された『鉄道愛護運動の概要』の中では、以下のように述べられている。

元来鉄道は国家の生命線であり、例するならば人体に於ける血管である。若し此の血液の循環が停止したならば国家としても半身不随の状態に陥らざるを得ない事は言ふ迄もない。此の重大な鉄道の安全性を確保する事は鉄道従業員だけの力では到底不可能であり、軍隊や鉄道警護総隊又凡ゆる努力を傾倒してゐるが、満洲国内一万軒を保護監視する事はなかなかの難事である。故に沿線の住民に協力せしめ、各区域的に鉄道防護に任せしめて、運行の万全を期さうと言ふのが愛路運動の主旨である。²⁴

「劉愛護村長」のあらすじは実に単純である。大辺溝愛護村長・劉万祥は鉄道を破壊しようとしていた杜景順、相文兄弟を見かけ、彼らに鉄道の重要さを伝え、景順、相文兄弟のお母さんが重病になった時には防疫医を連れて来て、「鉄道線路の走つてゐる村は、悪い病気でもあればすぐ斯うして医者様が病人を助けに来てくださるのだ」²⁵とこの兄弟に「教育」する。そして最後には、劉愛護村長が匪賊と戦う過程の中で犠牲になるという話である。

ここから劉村長は国策宣伝者という身分で登場し、青少年を啓蒙・教導し、「鉄道保護」の国策を宣伝していることがわかる。劉村長はただの国策宣伝者ではなく、教師の役割も担っていた。

実際、「満洲国」戯曲の中に現われる国策宣伝者は教育者であることが多い。その理由は国策宣伝の説得力と信用度を高めるためである。これによって国策宣伝者は啓蒙者の立場に立ち、民衆全体に「教育」を行う。このように考えると、国策宣伝者の設定には、ある程度、帝国主義の支配的な視野がある。

また、「劉愛護村長」においては、景順、相文兄弟という存在にも注意しなければならない。彼らは「満洲国」を担う次世代として設定され、「満洲国」建設の主力軍と見なされている。実際にも、愛路運動において若者は国策実施の行動者として位置づけられていた。上述した『鉄道愛護運動の概要』にも、この点について「国家的社会運動の

23 『鉄道愛護運動の概要』鉄道総局附業局愛路課、1939年9月、p. 1。

24 注23に同じ。

25 大庭武年「劉愛護村長」『満蒙』（177）満洲文化協会、1935年1月、p. 229。

主対象が青少年層に向けられてゐると同じやうに愛路運動の工作も愛護団内青少年に主力を集中してゐる事は当然である」²⁶との記述がある。「愛護村」にある青少年に関しては、孫佳茹は「日本占領下における満洲国愛路少年隊の役割」のなかで、次のようにまとめている。

愛護村の中で、主に11歳から18歳までの青少年を対象に、愛路少年隊という青少年組織を設立し、鉄道保護の役割を与えた上、「中堅層」育成という期待もかけていた。日中戦争全面化する前年度1936年末の時点で、全満鉄道線路、延べ1万キロに達し、愛護村の数が1270箇村で、収容村民の数は350万に達し、愛路少年隊4315隊、隊員数は実に51823名に達している。²⁷

孫佳茹の論述によれば、愛路少年隊は1935年に結成され、1939年3月1日に満洲国協和青少年組織大綱による協和青少年団の全国一律化にともない、愛路少年隊も進んでその傘下に入り鉄道愛護団協和青年団並同少年団として改編合流した。²⁸この事実を踏まえれば、景順、相文兄弟という人物像を作り出した大庭は「愛路少年隊」に望んだ次世代の育成をも期待していたと言えるであろう。

前述のように、大庭武年はいわゆる「建国運動」に参加しながらも失敗した。挫折後の1934年に大庭は「満鉄」に入社した。大庭は「満洲国」の宣伝活動に従事しながら、『満蒙』、『協和』などの「満洲」で刊行された雑誌の中で時局に応じた戯曲や小説などを発表し始めた。これらの作品に対して、西原は次のように指摘している。

「凱歌あがる下に」「烽火」「劉愛護村長」「農民」などといった小説や戯曲などは、いずれも満洲の時局に材を得たもので、彼の筆達者は相変わらず、一通りは読ませる力を持つてはいるのだが、そのテーマといえは要するに、新国家の歴史的意義や、その理想をただ能天気うたいあげるといったおもむきで、つまりはプロパガンダ文学以外の何ものでもない。²⁹

西原が指摘したように、「満洲国」成立後に大庭が創作した戯曲や小説はプロパガンダ文学である。ところが、大庭の戯曲創作を通時的に見てみると、創作時期によって変

26 注23に同じ、p.5。

27 孫佳茹「日本占領下における満洲国愛路少年隊の役割——愛路少年隊訪日団をめぐって」『早稲田大学教育学会紀要』(12) 早稲田大学教育学会、2011年3月、p.129。

28 注27に同じ、pp.129-130。

29 西原同論文、p.52。

化が見てとれる。満鉄入社前の「張学良」のような戯曲は国策宣伝としての面が弱く、大庭自身の創作意思が強く感じられ、大庭なりの思想が組み込まれていると思われる。しかし、「満鉄」入社後に創作された「劉愛護村長」は完全に国策宣伝のために創作されたものと考えられ、大庭自身の戯曲創作の特色が失われたように感じられる。この変化は、おそらく大庭の「満鉄」入社と関わっている。

大庭武年は鉄道総局愛路課に勤めている間に「劉愛護村長」を創作しただけではなく、『護れ愛路旗——愛路文芸集』、『鐵道愛護運動の概要』、『愛路美談集』などの、鉄道総局愛路課によって発行された書籍の編集にも積極的に参加していた。つまり、「満鉄」入社後の大庭は「満鉄」という「公」の領域に束縛され、戯曲創作も「満鉄」からの影響を強く受けていたのである。この創作背景の変化から大庭武年が最終的に完全な国策宣伝者になった要因を見出せるのではないかと思われる。

おわりに

大庭武年が文学の創作を行ったのは初期の探偵創作を含めれば、概ね1930年から1937年にかけての八年間である。その間に大庭は、「満洲国」の建国をきっかけにして建国運動に加わり、また雑誌『満蒙』を拠点にして戯曲を創作した。「張学良」から「劉愛護村長」までの一連の戯曲があるが、その創作時期によって創作の背景だけではなく大庭自身の志向も変わっていつている。大庭が「満鉄」に入社していなかった時期は国策宣伝の一面はあるものの、ある程度隠されており、通俗歴史叙述者になるという個人の志向がみられる。しかし1934年に大庭が「満鉄」入社した後に鉄道保護を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表されて明確な国策宣伝者の姿が現われた。

大庭は戯曲において自らの創作力を発揮し、「満鉄」入社前に創作した大部分の戯曲において大庭自身の「満洲国」経験と歴史修養を活用し、戯曲創作の過程で歴史・政治・人物に重心を置くという戯曲創作の手法を作り出した。「満鉄」入社後の1934年までに創作した戯曲のほとんどには「満洲国」の建国を宣伝する意図はみられるものの、全面には展開されていない。むしろ、大庭自身が通俗歴史叙述家としてより外に自分を生かそうとは考えていないと述べているように、歴史、政治に対する個人的な考えが展開されているのである。しかし「満鉄」に入社した後に創作した「劉愛護村長」は国策宣伝のそのものであった。大庭武年は探偵小説家から、戯曲作家、そして最終的には完全な国策宣伝者へと変身を遂げたのである。

第三部

問題視された「満洲」——1940年代の旅行記、同人雑記

第5章 北満洲の世相を見る

——田口稔の旅行記

はじめに

「満洲国」成立後、政治・経済・文化の中心は徐々に大連から「新京」に移されていた。それと共に北満洲への「開発」は在満日本人にいつそう注目されるようになった。雑誌『満蒙』の掲載内容に1932年以降北満洲に関する旅行記や研究論文などが増えたのは、そのことを裏づけている。そしてその中では、口稔の旅行記が最も代表的なものだと思われる。

田口稔は1933年から『満蒙』が終刊する1943年まで、主要な投稿者として大量の地理学の研究論文、旅行記、随筆などを本誌で発表した。一般的な旅行記と違い田口稔の旅行記には地理学の要素が多く、その文章表現も地理学の客観的な記述手法を採用している。それ故、彼の旅行記は文学作品であると同時に、地理学研究でもあるといえる。田口稔は汽車或いは汽船で北満洲へ旅立ち、当時の北満洲の風景を詳しく記録している。

田口稔の後期の旅行記は前期より抒情性が強くなり、文学作品として読む価値がある。本章では、田口稔の旅行記を研究対象にして北満洲の実態を考察する。特に彼が雑誌『満蒙』で発表した二本の旅行記「遡江記」と「江上抄」を当時の北満洲の水運に焦点を当てて分析し、水運に繋がる北満洲の世相を検討する。

1 田口稔とその旅行記創作

田口稔は、1896年に広島県安芸郡の巧三津田（現在の呉市西愛宕町）に生まれ、呉一中を卒業した後、造船所の工員として働いて学資を稼ぎ、その後、拓殖大学に入り、人文地理学を専攻した。拓大を卒業した後に大連に渡り、「満鉄」に就職した。1929年にフランスへ留学する機会を得、同年の夏にパリ大学に入り、引き続き地理学を学んだ。¹従って、田口稔とはまず人文地理学者であると言える。田口稔は、拓大在学中に小田内通敏に師事し、その影響で人文地理学を志したのである。小田内通敏に関しては、小木田敏彦の論文の中に言及がある。

1 西原和海「田口稔への接近」『朱夏』(12) (特集 満洲の図書館とライブラリアン) せらび書房、1998年10月、p. 27。

日本の地理学も文化における「中心——周辺」構造の中で、時を同じくして誕生した「中心」はアカデミック地理学、「周辺」は非アカデミック地理学と呼ばれる。非アカデミック地理学には志賀重昂や『地人論』を執筆した内村鑑三、志賀重昂に憧れ『人生地理学』を執筆した牧口常三郎などが含まれ、フランスの社会改良主義者ルブレイ研究で知られる小田内通敏は「中心」と「周辺」の境界領域に位置づけられている。牧口常三郎と小田内通敏は、新渡戸稲造と柳田国男が1910（明治43）年に立ち上げた「郷土会」の主要メンバーでもあった。そして、当時のアカデミック地理学が自然地理学偏重であったため、非アカデミック地理学は人文地理学研究を牽引する役割を果たした。²

日清戦後には、日本の地理学研究界における「中心」であったアカデミックな地理学と「周辺」に位置づけられるアカデミックでない地理学が存在した。「中心」と「周辺」の境界領域に立った小田内道敏は志賀重昂のような文学者ではないものの、アカデミックでない地理学研究者とは緊密な関係をもっており、人文地理学研究を牽引するアカデミックでない地理学に位置づけられると思われる。また、小田内道敏は文学者が参会した「郷土会」の主要なメンバーでもあり、文学からの影響も受けたと考えられる。

田口稔は小田内道敏の弟子として、地理学だけではなく、文学の面でもその影響を受け、大学時代に詩を発表したこともある。1923年の関東大震災の翌月、東洋協会大学（後、拓殖大学と改称）の雑誌（誌名不明）で詩『丘の風景』を発表した。この詩は「一本の檜」「図書館」「雑木林」「つゝましやかな山茶花よ」「遠望」「春の追憶」という六つの部分に分けられる。ここでは「図書館」を例にして見ていきたい。

曝書のバルコンに立つて、私は／露西亜人の教師と司書と三人で／夏の夕空の下に話した。／ゆくりなくも「小石川の妙な家」が／私達の話題に上つて、／司書はその耐震力を誇った。

十月秋風と共に／廢墟のやうな東京に入り見れば、／高くそびえてゐた「妙な家」はくづれ落ち、／露西亜人は倉皇アメリカ流浪の旅に上がり、／司書はまた、落葉林に渡る風をわびしく病んでゐる。／そして無心の天には／たゞ高く、白い断雲がとぶばかり。³

2 小木田敏彦「田園風景の政治地理学——美意識における文化帝国主義」『人文・自然・人間科学研究』(30) 拓殖大学人文科学研究所編集委員会、2013年10月、p. 18。

3 『右手に文化の炬をかかげ——図絵で見る紅陵の青史——拓殖大学創立100周年記念——明治33年から平成12年まで』拓殖大学記念写真誌編集委員会、2000年10月、pp. 64-65。

この詩における「小石川の妙な家」はおそらく「小石川の奇館」⁴を指すものと思われる。田口稔は東京大震災の前後の対比を通して「廢墟のやうな東京」の風景をリアルに描出している。一方、「無心の天」といった表現は作者の震災に対する無念をはっきり写している。これらからは、大学時代から田口稔の文学的な造詣は深かったといえよう。この時期に彼は後の旅行記の創作の基礎を築いた。田口稔はこの詩を発表した翌年「満洲」の大連に渡り、十数年にわたる「満洲」での生活を始めた。

西原論によれば、渡満当初、田口稔は「満鉄」の鉄道部埠頭事務所の陸運課に配属されたが、1925年に大連図書館に転職して司書になった。この間、当館の館報『書香』の第1期第8号に「三崎山と沖、横川一行とに関する蒐書」という論を寄せた⁵。彼は渡満した後、特に「満洲国」が成立した後、図書館の仕事をする傍ら「満洲国」の境内を旅し、自分の学んできた人文地理学の知識を活かして積極的に「満洲国」の地理状況を調査していた。そして、これらの調査に基づいて数多くの旅行記を書いた。

田口稔の渡満は、彼が東洋協会大学の出身であることと関係があると思われる。東洋協会大学は台湾の開拓を実施するための人材を育成する教育機関として開校したが、第二次世界大戦前にアジア開拓など外地に携わる人材育成を目的とする方向にシフトした。つまり、田口稔の渡満には明確な目的があったといえる。一方、日清戦争後の日本国内の地理学研究には国粹保存主義と帝国主義の傾向が見られる。この点については、五井信の論が参考になる。

日清戦争開戦をはさんだ明治二七（一八九四）年五月と一〇月、＜地理＞にまつわる二冊のベストセラーが発行されている。明治の二大地理書とも呼ばれる二冊の著者はともに札幌農学校の出身で、在校中には、二期生がW・S・クラークの感化を受けキリスト教に入信したことから生じた宗教上のいざこざが二人の間にはあったらしい。とはいえこの二人は、二期生である一人が卒業式で述べる答辞を、四期生のいま一人は感激の涙を流しながら聞いた関係でもあったという一。二期生の名は内村鑑三。四期生は志賀重昂。著書はそれぞれ『地理学考』（五月、警醒社書店）と『日本風景論』（一〇月、政教社）である。二冊の著書は、『地理学考』が世界地理について概括的に述べられているのに対し、『日本風景論』は専らその対象が日本であるという違いはあるだろう。しかし両者はともにベストセラーになったという事実にとどまらず、そのナショナリズム的色彩においても共通する要素

4 詩が掲載された当時に劇作家飯沢匡が興味を抱いて毎日新聞日曜版に連載したのである。

5 西原同論文、p. 27。

を有している。⁶

五井信の論に一つの例として挙げられている『日本風景論』と『地理学考』のように、日清戦争以降の日本の人文地理研究にはナショナリズム的色彩があると窺われる。田口稔の渡満及び彼が「満洲」で行った地理学研究は当時のこのようなナショナリズム的色彩がある人文地理研究と全く関係ないとは考えられない。

田口稔は30点を超える著書を残している。西原和海の調査によると、主要な著書が9点、小冊子が6点、編著が17点である。⁷1929年7月、彼は最初の著書『満洲の地方色』を自費で出版した。本の表見返しに関東州の、裏見返しに「満洲国」の地図が掲載されており、作中には39点の写真や地図などが収められ、全書の三分の一が関東州に関する文章で、残りが「満洲国」各地を対象としている。⁸

西原はこの本について「著者の専門とする人文地理学の造詣と、実際にその土地を歩いているの観察とが本書の内容を豊かにして、一読、得るところが少なくない。旅行記ふうなエッセイといった作品がほとんどである。きわめて地理的な思考と抒情的な表現とが巧みに溶け合い、清新な印象をもたらす一冊となっている」⁹と高く評価している。大谷健夫は本書に対して「彼の人文地理学の知識と文学的な才能と軽妙なスケッチをミックスした啓蒙的な好著、今でも読んでみたい懐かしい本」¹⁰と指摘している。

「満洲国」成立後の1933年、田口稔の作品集『満洲随想』が満洲文化協会によって出版された。「序」に「今年六月ふたたび大連に移り住むやうになり、伏見台の家に時折の手記を留めたものが集つて此の小冊を成した。四年の間離れてゐる「満洲」の第二印象記として、これを家郷の人々に贈り又吾が後年追憶のよすがとして遺す次第である」¹¹と書いている。「満洲」の第二印象記としての本書は田口稔がパリ大学での留学を終え、再び大連に戻った後に執筆したものである。その中には「奉天」と「新京」へ旅する記録である「新京は招く」と大連の市民の生活をスケッチする「国際都市のプロフィール」という二つが収録されている。

1937年に田口稔は総裁室弘報課に移ったが、その後は職務ではなく著述に熱心だった様子が窺え、この時期に彼が多くの著書を上梓し、その中で1939年に出版した『満

6 五井信「表象される〈日本〉——雑誌『太陽』の「地理」欄 1895-1899」『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』新曜社、2000年4月、p. 240。

7 西原同論文、pp. 31-32。

8 『「満洲国」文化細目』植民地文化研究会、2005年6月、p. 360。

9 注8に同じ。

10 大谷健夫「思い出すままに」『作文』(97)、1974年10月、p. 10。

11 田口稔『満洲随想』満洲文化協会、1933年12月、序。

洲地理点描』と1942年に出版した『満洲旅情』が特に注目に値すると思われる。¹²西原はこの2冊について次のように述べている。

両著の目次の一部なりもとを紹介しておく、前者では「満洲固有文化の採訪と研究」「満洲に於ける満洲地理教育」「青泥窪よりダーリニイへ」「北満洲半円線の近景地域」など、後者では「エミгранトの除夜」「対向都市」「遼河と文化」「詩形に拠る満洲風土の描写」などといったタイトルが並んでいる。どちらかというとな前者は人文地理学を基調とした研究的なエッセイ集、後者は、紀行を中心とした感想集といった趣きである。この二冊は、田口の最も脂が乗り切ったころの仕事だと見ていいだろう。¹³

この二冊は、ある程度田口稔の創作上の特徴を反映している。つまり、人文地理学の研究と文学の叙情を組み合わせるという手法である。この過程の中には厳密な地理学研究の客観性と文学創作の主観性が融合されている。『満洲地理点描』と『満洲旅情』はそれぞれ、1939年と1942年に出版されたが、その中に収録された文章の多くはすでに『満蒙』などの雑誌で掲載されたものである。

「満洲国」が成立した後、田口稔は『満蒙』を主陣地として多くの自作を発表しており、その中には地理学の研究もあれば、多くの感想に溢れた旅行記もある。特に、1940年代以降、田口稔は「満洲国」の広範囲を旅しており、鉄道があまり発達していない北満洲にまで旅行したこともある。この時期に書き残した作品は文学的抒情が濃く、文学作品として読むことができると考えられる。

2 田口稔と雑誌『満蒙』

『満蒙』の第162号（1933年10月）と第163号（1933年11月）に掲載された「フランスに於ける満洲研究」で『満蒙』誌上に田口稔は初登場した。そこで田口稔はフランスにおける満洲研究をまとめると同時に、自分の「満洲」に対して持っている関心も表わしている。「千九百十一年六月の吉林の大火のこと、満洲驢馬の重荷に堪え得ること、満洲が世界の内でも馬を主要家畜とする地帯に当つてゐること、満洲大豆のことなどに就て地理学上の見解を下してゐる」¹⁴と述べているように、田口稔が当初人文地理

12 西原同論文、p. 30。

13 西原同論文、p. 30。

14 田口稔「フランスに於ける満洲研究」『満蒙』（162）満洲文化協会、1933年10月、p. 80。

学の視角で「満洲」を見ていたことが分かる。

1931年12月、田口稔はフランスでの留学を終えてしばらく大連に滞在したが、翌年には日本に帰国している。再び大連に渡ったのは1933年の夏である。彼の『満蒙』での初登場から考えれば、彼は大連図書館で図書編集¹⁵の作業をする傍ら、自分の人文地理学の知識を活かして「満洲」に対して地理学の研究を行っていたといえる。1934年11月に「「アジア」の語源」、1935年1月に「明治初中葉の満洲文献」、同年の4月に「大連地名考」を『満蒙』で発表した。「「アジア」の語源」の文頭には次の一節がある。

昭和九年の十一月一日から我が満洲の広野の上に最高速力百三十軒、平均時速八十二軒の汽車が走るようになった。この列車に依れば大連新京間は八時間半で突破出来るといふ。そして此の流線型機関車をもつた列車に「あじあ」といふ極めて大きな固有名詞が付けられた。地域的に見てこれ以上、大きな名称は、今後満洲を走る汽車に対しては一寸つけにくいであらうと思ふが、将来、もつとスピードの速い列車が現れないとは又保証も出来まい。¹⁶

興味深いことに、「アジア」の語源を研究するきっかけは旅行中に列車に付けられた「あじあ」という固有名詞を発見したことなのである。つまり、旅行は田口稔の研究と創作の過程で大きな役割を担っているということなのだ。『満蒙』第180号に掲載された「大連地名考」は大連の地名に関してだけでなく、大連の人種や地名と人種との関係を詳しく考察するものである。田口稔はこの論で次のように述べている。

大連市の立地する市域に対して古来名づけられて来た地名を、沿革的に、地理学的に、そして又言語学的に考察しようとするのは此の小論の目的である。私の見るところでは、現在の大連市の土地なり、抱く小湾なりに地名の賦与せられたものを跡づけて四つのエポックとすることが出来る。そしてそのエポックを生んだものは四つの種族であって、人種と地名とが不可分の関係に立つてゐることが知られるの

15 西原和海の「田口稔への接近」の論によれば、この時期において大連図書館では『和漢図書分類目録』の編纂という大きな仕事が進行中であった。同館に赴任した田口稔はさっそくこの『目録』の一冊『第八編：満洲・蒙古』の編纂に取り組むことになる。その作業は7月1日から12月31日まで続き、同書が刊行されたのは翌年の1934年3月であった。この本は、満鉄ライブラリアンであった田口稔の、今日までその形を残すことになった業績のうちで最も重要なものの一つである。

16 田口稔「「アジア」の語源」『満蒙』(175) 満洲文化協会、1934年11月、p. 112。

である。¹⁷

「大連地名考」のような初期に田口稔が書いたものは、主として「満洲」で見聞きしたものに対する地理学的な研究である。その中では自然地理だけではなく、人文地理、即ち、当地の人種や文化などにも大きな興味を寄せていた。また、1933年の渡満から弘報課の転勤にいたるまでの期間（大連図書館勤務期間）には図書館の仕事で長時間の旅行ができなかったと思われるが、「満洲国」を鉄道によって旅行をして多くの旅行記を書いた。『満蒙』には「通北県を過ぎる」（1935年9月）、「北満洲三角線の近景地域」（1935年10月）、「拉濱線の観察」（1936年1月）、「東部京図線の特質」（1936年2月）、「旧図寧線紀行」（1936年4月）、「西部濱綏線紀行」（1936年5月）などの鉄道旅行記を寄稿している。

この時期から田口稔は北満洲へ旅行し始め、汽車の車窓を通して鉄道沿線の人口状況や経済状況、交通状況、植民状況などを考察しつつ、旅行記の形で詳しく記録していた。その旅行記の特徴といえ、一つには車窓を通した遠距離の考察というものがある。「車窓」という言葉も殆どの旅行記の中で書かれている。例えば、「通北県を過ぎる」の中には「車窓望見」という小見出しが付けられた文章があり、その文頭では「北満洲の廣野の中に珍しくもカトリック寺院の尖塔の聳えた海北鎮の村落を見つゝ過ぎれば、汽車は程なく通北県境に入るのである。（略）こゝから楊家、李家、通北、白家の四駅まで県内に存在するが、夫等を連ねる線路は県の最も西寄りの縁辺を走つてゐるのであつて、県としての土地は鉄道から東方に向かつて広く横はつてゐる」¹⁸と述べている。ここには土地と鉄道との関係が明らかに反映されている。

また、「北満洲三角線の近景地域」の中でも、「居住形態の車窓観」という小見出しを付けて「沿線の聚落にして車窓から旅人の眼に映じるものは先づその大部が漢民族のもものと見てよい。従つてそれら聚落は彼等が定着して三十年前後の年月を経過したものが一般的に古いものとしてよい。尤も齊々ハ爾や呼蘭地方の如く軍事、政治上の特殊な理由から古く支那植民の始まつた処は例外とするのである」¹⁹と述べている。田口稔は遠目に当地の民族状況を把握しているだけである。それはこの時期の田口稔の考察が車窓を通して可能となったものであるため、遠距離からの観察にならざるをえなかったことを示している。

もう一つの特徴は、人文地理学の研究に偏っているという点である。執筆のスタイル

17 田口稔「大連地名考」『満蒙』（180）満洲文化協会、1935年4月、p. 24。

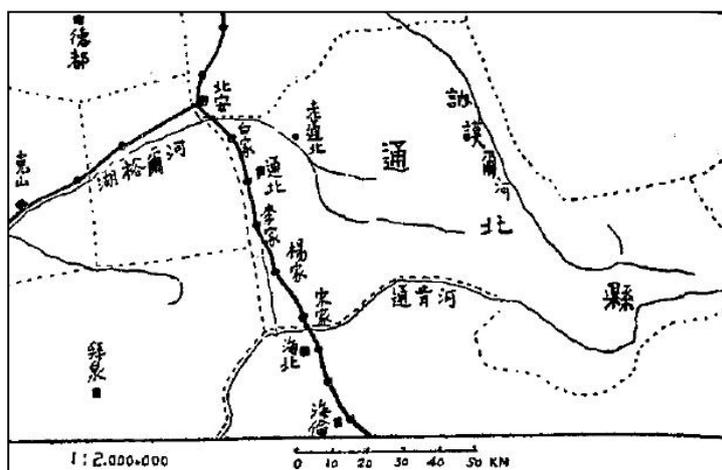
18 田口稔「通北県を過ぎる」『満蒙』（185）満洲文化協会、1935年9月、p. 409。

19 田口稔「北満洲三角線の近景地域」『満蒙』（186）満洲文化協会、1935年10月、p. 106。

は論文の形式であるため、田口稔なりの文学的な抒情は殆ど見えない。例えば、「通北県を過ぎる」では「県民の貧困」や「県の状況」や「発達の進度」などの小見出しが付けられている。また、「北満洲三角線の近景地域」でも、「満洲地理区としての位置」「自然風景と遺棄耕作地の自然風景への復帰」などの小見出しが付けられている。これらのような地理学的言葉遣いがこの時期の田口稔の旅行記の特色の一つなのである。

これらの旅行記を概観してみると、田口稔の植民意識が明らかに浮かび上がってくる。彼は「車窓」から植民可能地の最大の必要条件である土地資源をまず見ていた。一方、当地の社会状況、民族状況を詳しく考察し、歴史を遡ることを通じて当地の漢民族、蒙古民族、満洲族の植民史を研究してもいて、当時の日本による植民統治の状況にも大きな関心をもっていたことが窺える。日本が「満洲」を植民地化する過程では、鉄道が重要な役割を果たしていた。鉄道交通の結節点に当たる北満洲の都市には「銀器商」「雑貨商」「苦力達の娯楽場」「旅館」「カフェー」等が現われ、急速に発展している様子が窺える。ここで、植民の利器としての「鉄道」が特に強調されるのは植民意識の表れではないかと思われる。

田口稔はこの時期に鉄道を利用して旅をしていた一方で北満洲の河川と水運にもすでに関心を示していた。「通北県を過ぎる」には田口稔の手書きの通北県の地図（図5-1）が掲載されている。この地図には鉄道の線路だけでなく、「湖裕爾河」と「訥謨爾河」も描出されている。



〔図5-1〕通北県の地図

田口稔が車窓を通して北満洲の河川をいかに描写したのかは次の例で見たい。彼は「西部濱綏線紀行」で次のように記している。

露書でも北鉄経済調査局編「北満洲及北満鉄路提要」（一九二七）には螞蟻河を採用してゐる。此の点未だに不明瞭である。螞蟻河は一面坡を去つて平坦な野に出、乱流してゐる。亜庫尼を過ぎ、烏吉密河からは北に折れて、同賓を過ぎ、通河に於て松花江に合してゐる。烏吉密河駅では、日本の娘子軍が四、五人乗込み、煙草を吹かし俗謡を歌い、人もなげな体にふるまつた。何処へ行つても彼女等が先行部隊

を承つてゐるのには寒心する。こゝは、螞蟻河の本流へ水曲柳河、岔魯河、烏珠河の三支流が合流する地点で、標高二三三米、一帯に広い平野を作つてゐる。こゝから北へ二軒、松花江本流に至る間は、同賓を中心に螞蟻河の灌域で農産物が多い。

20

車窓を通して見た北満洲の風景は単なる「日本の娘子軍」のような遠景である。露書などの書籍を通して螞蟻河を調査することで河川の本流や支流などにまつわる知識を多少は持っているにせよ、「不明瞭」の点が未だ残っている。つまり、この時期において、田口稔はすでに北満洲の河川に注目していたが、車窓から遠景でしか見られないために当地の水運の状況を具体的に知ることはできなかつたのである。

無論、この時期に書かれた旅行記の中には水運に関するものは少ない。1937年、田口稔は弘報課に転勤したため図書編纂の仕事がなくなり、長時間の旅行ができるようになった。そのため、船で北満洲へ旅に出た。そして黒龍江で江上と沿岸の風景を自ら見て「遡江記」と「江上抄」という2本の旅行記を書いた。この2本には当時の北満洲の水運の状況が詳細に記録されている。

3 『満蒙』と北満洲の水運

日満両国は軍事協力と共に経済的協調の為に両国力を合はせて未開なる北満の開発に全力を注ぐべきである。是が為めには実情の調査を第一の前提とする。今は官民挙つて北満の実情、将来開発さるべき資源、産業、又は改革すべき各般の事項に対する徹底的の研究が必要である²¹

これは、当時の南満洲鉄道株式会社哈爾濱（ハルビン）建設事務所長である金井清が『満蒙』の第159号に寄せた言葉である。「満洲国」成立後の1933年7月、『満蒙』は、「拓けゆく北満洲」という特輯号（第159号）を発行し、北満洲の交通、林業、工業、商業などを詳しく紹介した。そのなかでも、吉武正男と秋吉勝広の共同執筆である研究論文「北満洲の交通」は最も大きな成果として掲載され、北満洲の陸運、水運、空運について詳述している。吉武正男らは「北満地方は比較的其開発地の地方に遅れ鉄道の敷設されたのは極く近代の事であつて、従つて最近迄水運又は馬車によるの外交通の便なく、近時各地に鉄道建設されあるも其延長僅に三千軒に及ばず、今尚水運は北満に

20 田口稔「西部濱綏線紀行」『満蒙』（193）満洲文化協会、1936年5月、p.132。

21 金井清「拓けゆく北満洲」『満蒙』（159）満洲文化協会、1933年7月、p.1。

於て重要なる交通機関の一つである」²²と指摘している。

実は、「満洲国」が成立する以前から、在満日本人はすでに北満洲の水運に注目していたのである。星田信隆の研究論文「北満洲の水運」がその成果の一つとして『満蒙』の第100号（1928年8月）に掲載されている。星田によれば、北満洲の水路としてその発展に大貢献をなした黒龍江の水運の濫觴は1643年に露国の探検家が独木舟を浮かべたことにまで遡ることができる。彼は論稿内で黒龍江だけではなく、松花江や烏蘇里江（ウスリー川）及びそれらの支流の水運状況を詳しく記録している。しかし、この時期には北満洲の水運は未だ重視されていなかったことが窺える。「北満の水運は多く鉄道の補助輸送機関としての機能を営んでゐるに過ぎぬ状態である」²³と星田は明確に指摘している。

1932年に「満洲国」が成立すると、金井の述べたように「未開なる北満の開発」が開始された。北満洲の開発が注目されるとともに、水運を含めた交通の運営は一つの重大の課題として在満日本人に認識されていった。この時期においては北満洲の水運はツーリズムの機能を果たしているように見える。

1938年4月に北満の水運を統合的に経営する企業集団哈爾濱航業連合局によって発行されたパンフレット「北満船の旅」（山根信吉著）は北満の水運の観光業としての機能を明らかに示している。このパンフレットは哈爾濱航業連合局の「営業航路略図」「営業航路案内図」、乗船、運賃などの事項を掲載しているだけではなく、江岸の主要な都邑も詳しく紹介している。加えて紙面に「御旅行に関する御問合はせ」、「關於旅行事務問詢処」のような用語が使われ、哈爾濱航業連合局の観光事業を明らかに示している。特にこのパンフレットの表紙には江岸の風景を眺めている婦人の姿（図5-2）などが描かれ、水運の観光業としての機能を直接に表わしている。



[図5-2]
パンフレット「北満船の旅」の表紙

1939年4月に満鉄内に新設された北満江運局は、哈爾濱航業連合局の業務を引き継いだ。北満江運局の開局について、北満三江会事務局によって刊行された『北満江運局

22 吉武正男・秋吉勝広「北満洲の交通(2)」『満蒙』(161) 満洲文化協会、1933年9月、p. 36。

23 星田信隆「北満洲の水運」『満蒙』(100) 中日文化協会、1928年8月、p. 77。

沿革』は次のように記している。

その後北満産業の急速なる開発に併せて辺境地区の治安確保と産業開発を緊急促進するという国策的見地から北満江運事業を会社の直営に移すことになり、昭和14年3月迄に新ハルビン江運連合会所属の民有船舶と、それ迄未買収だった一切の民有船を買収の上国有化し、同連合会も解消して、昭和14年4月1日、北満江運局を開設し、会社直営による営業を開始した。ここに北満の鉄道、船舶の一貫経営の実現を見るに至ったのである。²⁴

哈爾濱航業連合局の業務を引き継いだ北満江運局も観光業としての機能を果たしていたと思われるが、その開局の理由の中では明言されていない。北満洲の水運経営を一手に担う理由が「北満産業の急速なる開発に併せて辺境地区の治安確保と産業開発を緊急促進する」というものであったことがここからはわかる。

『満蒙』の1939年の新年号の巻頭言には「この昭和十四年なる新年は実に千載一遇、しかも稀に遇ふところの非常重大時局の年であつて徒らに戦捷を慶祝すること等に満足すべき秋ではないのである。しかも単なる重大覚悟だけでなく、その覚悟を形の上に現はし、これを現実に行き、依つて以て「長期建設」の新意義を發揮せねばならぬ第一年の昭和十四年を迎えたものといはねばならぬのである」²⁵と記されている。「北満江運局」による衰運経営の一元化をここで示された「長期建設」の新意義とあわせて考えてみると、北満の水運の観光業の機能が消失した（或いは字面から消失した）理由は想像できるであろう。

1939年以降の北満洲の水運は北満江運局が独占し、水運による経済の開発という目的性が強化された。また、水運と繋がる沿岸の人々の生活状況などが可視化されるようになった。このような傾向は在満日本人の北満旅行記の中からも多少窺える。

4 田口稔と北満洲の船旅

1943年8月下旬、田口稔は、黒河²⁶から漠河へ向けて黒龍江（アムール）を遡る客船・「午城丸」に乗り、北満洲の風景を満喫した。彼はこの船旅を通じて北満洲の地理的環境、産業発展、及び当地の人々の生存状態を詳しく考察し、様々な見聞を集めて「遡江

24 『北満江運局沿革』北満三江会事務局、1986年10月、p.6。

25 「巻頭言」『満蒙』（225）満洲文化協会、1939年1月、p.1。

26 黒河と漠河は中国の黒龍江省に位置する市である。

記」と「江上抄」2本の旅行記を完成させた。この2本はそれぞれ雑誌『満蒙』の第279号（1943年8月）、第280号（1943年9月）に掲載されている。

従来の鉄道旅行とは違い田口稔はこの船旅に対して「満洲を歩くこと多年に亘る私でも此の黒龍江上流遡航の旅ほど珍らしく感じたことは嘗てないのである」²⁷と述べ、北満洲の河川及び江岸の風景を珍しいものとして見ていた。彼は旅行記でまず自分の乗った客船・「午城丸」について次のように記している。

私の黒河から乗つて来た此の午城丸は一九二九年に哈爾濱で進水したものである。（略）この船の最上甲板には運転室があるのだが、その甲板としての先端に備付けられたものを見ると次のやうなものがあつた。——レコード拡声器、機関部への伝声器、把手（引けば汽笛が鳴る）、探照燈、航行燈（中央マストの上の分は白で八軒の遠方でも認められる。左舷のは赤で四軒、右舷のは青で四軒まで光が達する）、手振信号燈（船がすれちがふ時の合図に用ゐる）。²⁸

寝台に横はつたり甲板に立つたりする以外、日中の大部分を共処で過ごす食堂は装飾的に見ても少し何とかしたいと思つた。壁にはカレンダー一枚かかり、備付の小さな本箱には次のやうな本が十冊ばかり、本年の初航の時に入れたまゝで一年中取替へられないといふ。これは北満江運局船舶庫と称する巡回文庫の制度である。

²⁹

ここで、田口稔は当時の客船「午城丸」の装飾などを詳細に記している。午城丸は黒河から漠河までの定期客船の一つであり、これ以外に、永安丸、紹興丸、西京丸、北海丸がある。午城丸の運行状況は表5-1にまとめている。黒河からの出帆日は毎月8日、20日であり、航行日数はおおよそ7日間である。

「遡江記」には、「八月も押しつまつて三十一日なつた。（略）午後八時に漠河の手前、対岸の三四十戸とも見えるイグナーシェフ村の前を過ぎた」³⁰と記されている。

27 田口稔「江上抄」『満蒙』（280）満蒙社、1943年8月、p. 95。

28 田口稔「遡江記」『満蒙』（279）満蒙社、1943年7月、p. 49。

29 注27に同じ、p. 101。

30 注28に同じ、pp. 53-54。

つまり、田口稔は20日出発の午城丸に乗ったのだが、予定の26日に漠河に到着できず、五日間遅れて31日の夜にやっと着いたことが推測できるのである。客船運行の遅れの原因について、田口稔は「越冬物資（食糧品）を上流の諸地へ送るが、毎年、秋になつてどつと多く而も急がれるので客船まで動員し（船底の浸水を汲み出す）、従つて客船の時間も遅れがちになる」³¹と記している。

また、午城丸は北満江運局の客船である。この点は旅行記のなかに記された「北満江運局船舶庫」からも読み取れる。

前述したように、北満江運局は「満鉄」が北満洲の水運経営を担うために満鉄内に設立した機関である。1986年に北満三江会事務局によって編纂された『北満江運局沿革』の記載によれば、1941年9月までに北満江運局の直営航

路は4946キロメートルに及んだのである。主要な航路には松花江航路（ハルピン—同江、690キロメートル）、黒龍江航路（撫遠—漠河、1768キロメートル）、額爾古納航路（漠河—吉拉林、499キロメートル）、烏蘇里航路（撫遠—龍王廟、655キロメートル）、嫩江航路（ハルピン—チチハル、635キロメートル）、第二松花江航路（三岔—小豊満、392キロメートル）、呼蘭航路（ハルピン—呼蘭、49キロメートル）などがある。また、汽船は6468隻あり、他の船舶は5603隻ある。

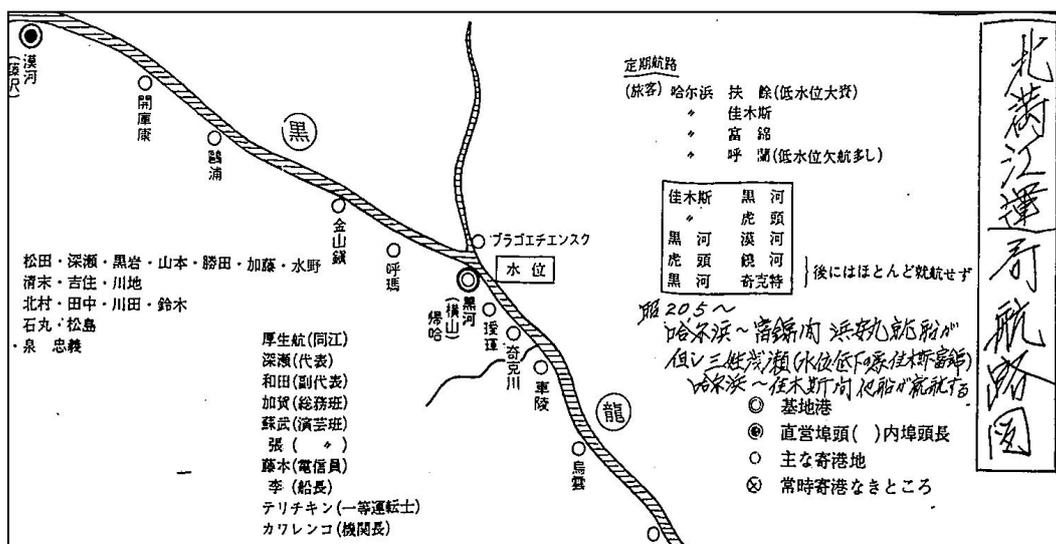
田口稔の船旅の路線は、黒龍江航路の黒河から漠河までの航路である。航行中に経過した埠頭は図5-3³²にあるように黒河、呼瑪、金山鎮、鷗浦、開庫康、漠河等である。

黒河—漠河間定期客船									
黒河 出帆口	1, 1 3, 20	4, 16 , 24	4, 18, 30	8, 20	11, 23				
漠河 出帆口	8, 20	11, 23	1, 13, 25	3, 15, , 27	6, 18 , 30				
就航 船名	永安 丸	紹興 丸	西京 丸	午城 丸	北海 丸				
往航									
寄 港 地	黒 河	三 道 卡	湖 道 鎮	呼 瑪	金 山 鎮	鷗 浦	桂 花 駅	馬 林 駅	漠 河
時 刻	二 時 発	六 時 着	三 時 着	四 時 着	八 時 半 着	十 五 時 着	十 九 時 着	八 時 着	十 六 時 着
	第 一 日	第 二 日		第 三 日		第 四 日		第 六 日	第 七 日

[表5-1] 黒河—漠河間定期客船

31 注27に同じ、p. 96。

32 注24に同じ、pp. 11-12。



〔図 5-3〕 北滿江運局航路図 (一部分)

『満洲日日新聞』(1936. 10. 11~36. 10. 14) の新聞記事には当時の黒龍江の事情が詳しく記載されている。

(黒河) この街は一八五八年愛琿条約締結後対岸露領に出稼の採金労働者の娯楽地又は金鉱地帯への物資供給地として建設され、爾後対露貿易の旺盛と採金事業の勃興に伴れ徐々に発展し、一時は人口五万を擁せし時代もあった。(呼瑪) 附近は有名な金鉱地帯である。(鴉浦) 附近には有望なる金鉱地帯がある。年移入量は麦粉、豆油、飲食料品等約四〇〇吨を算するに過ぎない。(漠河) 漠河県城の地にして人口六、七千に過ぎないが、蘇連との密接なる国境街の事として、全戸数の四割が露滿人共棲家庭である。附近は砂金の産出が盛んであるが、治安挙げず、城内に国境警備隊、江省軍駐屯軍、杉頭奉志団等の治安警備団がある。哈爾濱航運局に於ては漠河方面に於ける採金業の将来に着目し、最近漠河航路を開いて同地方の産業開発に積極工作を施しているから、漠河方面の将来の発展は刮目に値する。³³

簡単に言えば、この一帯は「黄金地帯」と言われていたのである。当時、東京帝国大学門倉三能は「古来黒龍江省は大黒河を中心とし、黒龍江上流の大興安嶺一帯と下流の

33 (神戸大附属図書館のデジタルアーカイブ「新聞記事文庫」に収められた『満洲日日新聞』の記事) http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00464438&TYPE=HTML_FILE&POS=1&LANG=JA を参照した。(2019年1月10日)

小興安嶺一帯とに砂金を産し、満支人の間には黄金世界或いは金国と呼ばれ³⁴ていると述べ、北満洲の金鉱に対して次のように指摘している。

最近我が満蒙移住方針として集団移民の必要を論ぜらるゝ現状に於て、北満砂金地の開発は指導的な労働者の進出に対して絶好の機会なるべく、一般労働者に比して大に恵まれたる採金労働者の収入も亦侮るべからざるものあり。然れども永久性に乏しき砂金鉱業のみにより、是等移住民を扶養し得べきにあらざれば、率先邦人の科学的探査により必然的存在の山金鉱床を速に発見し、砂金と共に之を稼行して恒久性を保持せしむることは、国境警備並に植民政策上最も緊要なり。³⁵

このように「黄金世界」と呼ばれた黒河から漠河までの一帯は当時の「集団移民」の地として宣伝されていたのである。そこで、「遼江記」、「江上抄」の中で作者の田口稔が如何に北満洲の風景、特に植民による人々の生存状態を描写しているのかを検討してみたい。

田口稔は旅行記の中で日満露通婚及びそれによる混血児の状況を描いた。多人種多民族通婚の状況に対する描写は「五族協和」のスローガンと一致していたが、面白いことに、具体的な描写対象はそれと一致していないところもあるのである。苦力、二毛子（白系ロシア人）、天草女にたいする描写には、一種の哀れの抒情が現われ、「満洲国」の宣伝した「王道楽土」と「五族協和」に背いていると考えられる。例を挙げて見ると、「遼江記」には次の一節がある。

黒龍江省に属し卡倫制度を布いてゐたが、今の鴉浦県の二十一站（嫩漢街道に沿ふ）といふ所にも金鉱があつた。当県の苦力層は一攫千金を夢みた山東人や河北人から成つてゐる。（略）露支紛争の時には、人民は嫩漢街道から呼瑪方面へと、金廠を伝つて海拉爾方面へと逃亡して行つた。倒れた人間の太股の肉を割いて食つて飢餓を免れたものもあつたといふ。その後一部の人々は帰還した。（略）採金苦力は次第に木材伐採業へ転向しつゝある。採金苦力五百名位、木材苦力千五百名位になつてゐる。苦力には搬出量によつて労銀を支払う制度がある。苦力賃は多い日は十四五円に及び公定賃銀（四円）を乱す処もある。（略）漠河県の人口は六千人でその内に二千人ある。然し木材伐採を理想的にするには尚千五百人の不足といふ。

34 門倉三能「満洲国の金鉱業」『日本鉱業会誌』49(578) 資源・素材学会、1933年4月、p. 384。

35 門倉同論文、p. 412。

「苦力には搬出量によつて労銀を支払う制度がある。苦力賃は多い日は十四五圓に及び公定賃銀（四圓）を乱す処もある」や「漠河県の人口は六千人でその内に二千人ある。然し木材伐採を理想的にするには尚千五百人の不足といふ」などの記述からは当地で大量の苦力が求められている事が窺える。一方、田口稔は「倒れた人間の太股の肉を割いて食つて飢餓を免れたものもあつたといふ」苦力の悲惨な生活を描き出してもいて、苦力への同情も窺える。

これは客観的な人文地理の立場から「満洲」を眺める田口稔にとっては珍しい抒情的描写である。このような「抒情」は北満洲で暮らした人々、特に白系ロシア人と在満日本人の生存状態への描写の中にも多少見ることができる。「娘もまだ結婚せず、ひどく痩せて寂しい顔をしてゐる。彼女は漢人嫌だし相手になるロシヤ青年は無しといふわけで今日に及んでゐるのだといふ」³⁷と記しており、当時の各民族の不協和の実情をある程度反映している。

また、田口稔は旅行記で在満日本人の生活状況について多く書いている。そこには北満洲で暮らす日本婦人の姿がよく現われる。次の例を見ていきたい。

この大墓標を中心として柵のほとりには二十一人のさやかな木柱の墓標が並んでゐる。左にその名を列記するが、姓だけの者（男は極めて少数らしい）、名だけの者、年齢の判つてゐないのや原籍の判らぬ者の方が大多数であることは、まことに無縁仏の悲しさである。はるばる天草女が流れ来て此処北満の涯で若い身空で病毒のために散り失せたことは因果とは云へ一沫哀愁の念を禁じ得なかつた。

（略）此の女は堤田ナツエと呼ぶ。王といふ漢人の妻になつた者である。十二人の家族が二棟の一廓に住んでゐる。内、成人の男は三人である。主人は既に死亡して、此の三人（それは孰れも貰ひ子）を彼女が養育して来たのである。その内の一人はロシヤ女を妻にしてゐて、その混血兒の十四五歳の男の子が老婆に懐いて老婆の内地引揚の決心をいつも鈍らせる。昨年故郷へ帰省したが復た舞戻つて来たのだといふ。（略）将来帰国の意志を持つてゐると語つた。³⁸

ここでは、天草女の悲しさも、「将来帰国の意志を持つてゐる」在満日本婦人の郷愁

36 注 28 に同じ、p. 58。

37 注 28 に同じ、p. 56。

38 注 28 に同じ、pp. 59-61。

も、「満洲」を植民地化したことによる負の側面を示すものになるのではないかと思われる。ここには田口稔の哀れの抒情（郷愁）が暗示されているといえる。

また、漠河で田口稔を驚かしたのは阿片中毒者である。彼は、「漠河県の中毒者に就いて聞くに、その数は一千人に及び、女では売春婦に多い」³⁹「富者は恒産維持の消極的方法として阿片をのむ習慣がある。然し一般には阿片をのむためには殺人もし娘も妻も売る者さへある」⁴⁰などと旅行記の中に記している。

田口稔は客観的な立場から当地の阿片中毒者の状況を伝えている。おそらく、阿片中毒者という不協和、不安定な描写が「満洲国」への移民政策、乃至「王道楽土」「五族協和」という「満洲国」の理念に逆らうことは田口稔自身も理解していたであろう。それ故に表立っては戒煙所、阿片の漸減政策をまず主張し、そのうえで「満洲国」の功績を強調した。それにもかかわらず、「満洲国」の負の一面の反映もみられる。田口稔は、「満洲国」の政策や理念に迎合していた一方で、「満洲国」に存在する不協和の一面からその政策や理念の不徹底性、不合理性も感じていたのである。

おわりに

田口稔の旅行記の中には地理的な思考と抒情的な表現の双方が織り込まれている。田口稔は拓大在学中に、人文地理学を専攻していた傍ら文学の修養も蓄積してきた。彼は、拓大を卒業した後に「満洲」に渡り、多くの旅行記を書いた。本章では雑誌『満蒙』に掲載された彼の旅行記「遼江記」と「江上抄」を中心に分析することを通して彼の旅行記創作の特徴を明らかにした。

また、彼の旅行記を通じて北満洲の水運に焦点を当てて田口稔の北満洲の船旅を検討した。彼が旅行記の形で北満洲の水運による経済の開発を詳しく記録したことは植民意識の表れであるものの、その旅行記には「満洲国」の政策や理念に対する不徹底性と不合理性を浮かび上がらせる描写も存在する。

田口稔は「遼江記」と「江上抄」の中で北満洲を重要な開発の地、「黄金世界」、多民族群居の地として描いて「満洲国」への移民政策に迎合していた。一方、当地の人々の生存状態を描写する際には、苦力の悲惨な生活、白系ロシア人が漢人を嫌っていること、天草女の墓地、在満日本婦人の帰国願望、阿片中毒者などの、移民政策に逆らう内容も書いたのである。

このような内容からは、なるべく客観的な立場で、あるいは多角的に物事を捉えよう

39 注 28 に同じ、p. 49。

40 注 27 に同じ、pp. 100-101。

とする田口稔の姿勢が窺える。このような表現方法は、彼自身が「満洲」で行われている政策に対して自分が非力であることを感受していることを表わしている。従って、彼の旅行記には一種の哀れの抒情が底流しているのである。田口稔は船旅で北満洲を眺めるとき、「川旅の寂しさをレコード音楽でまぎらす。流行歌は哀調を帯びる」⁴¹と述べており、情景描写を通じて哀れの気持ちを表現することもあったのである。

41 注 28 に同じ、p. 48。

第6章 文化建設と物質生活との間の乖離

——満蒙社と「同人雑記」

はじめに

1939年2月からは「満洲文化協会」にかわって「満蒙社」による雑誌『満蒙』の発行が始まり、それとともに雑誌の誌面も一新した。「満蒙社」同人らは、創設当初から「学芸の昂揚、文化の宣布」を雑誌『満蒙』の編集志向とし、都市・大連を主陣地にして文化の「長期建設」を目指していた。「満蒙社」同人が本誌を編集するようになった時期には、誌面に「同人雑記」欄が新設され、数多くの雑記が掲載されていたのである。「同人雑記」欄は同人らの言論の場になり、大連をめぐる文化建設の同人らの提案などを次々と掲載していた。

「満洲文化協会」から雑誌『満蒙』を引き継いだ「満蒙社」の同人らが、『満蒙』を如何に変貌させたのかを明らかにするためには、まず「同人雑記」を通して彼らの編集志向を確認する必要がある。一般の同人雑誌は同人が多く投稿するが、『満蒙』においては同人の投稿が多いわけではない。誌面から見ると、同人らの投稿したのは少しの随筆を除いて、「同人雑記」しかないのである。それ故、同人らの編集志向を確認するため、また「満蒙社」の時期における本誌の文芸面の動向を把握するためには、「同人雑記」を考察する必要がある。

当時の大連は娯楽などの文化的方面は発展しつつあったが、一般の民衆にとって基本的な物質生活は、いまだ満たされていなかった。従って、同人らの「文化の宣布」という目標と、大連の民衆の物質生活の間には乖離が生じていた。「同人雑記」には大連の文化生活を宣伝する同人らの意思が現れている一方、民衆の物質生活の低さも書かれている。つまり、「同人雑記」から当時の大連における文化生活と物質生活との間の乖離もうかがえるのである。

本章では、雑誌『満蒙』の新しい発行機関であった「満蒙社」の成立から論をはじめ、「満蒙社」及びその同人らの構成、編集志向、雑誌の変貌などを明らかにする。それに加え、「同人雑記」を主な考察対象にして、同人らの文化の「長期建設」と大連の民衆の低下していく物質生活を検討する。

1 「満蒙社」の成立

『満蒙』の刊行は、発刊の1920年から終刊の1943年までの間に、満蒙文化協会の時期（1920年9月—1926年10月）、中日文化協会の時期（1926年11月—1932年3月）、満洲文化協会の時期（1932年4月—1939年1月）、満蒙社の時期（1939年2月—1943年10月）という四つの時期区分ができる。前の三つの時期の改称とは違い、最後の満蒙社の時期は単に発刊機関が改称したのではなく、新しい発行機関「満蒙社」が成立し満蒙社同人一同が雑誌の編集を担当するというように、実際に雑誌が刷新された時期である。

『満蒙』の第225号（1939年1月）の編集後記には、満洲文化協会による『満蒙』の発行終了が告げられている。当時の編集人・武田豊市はこの後記に「『満蒙』も此の一月号を以て二百二十五号を数へる。十七箇年半の歳月を閲する。（略）然るに『満蒙』社団法人満洲文化協会の機関誌である関係上、この協会が経営困難となり、事業の一部を休止することになったので、已むなく協会からの発行は一月号を以て最終といふことになった」¹と述べている。また、満洲文化協会の理事長・貝瀬謹吾は本誌の第226号（1939年2月）の巻頭で本誌の発刊機関の変更を正式に声明したのである。

満洲文化協会は種々の都合上、満洲法政学院及大同女子技芸学校の経営に主力を注ぐことに相成り、この歴史ある『満蒙』は之を続き発行することが出来なくなつたのでありますことは洵に残念の至りでございます。（略）処が今回「満蒙社」同人なる有力団体が生まれ、引き続き『満蒙』を発行しやうといふことに相成りましたことは本協会としても心から喜びに堪へぬところであります。茲に於て本協会も進んで『満蒙』の発行を「満蒙社」同人に移譲することに致したのであります。²

満洲文化協会による『満蒙』の刊行が終了し、その続刊のために「満蒙社」が結成された。創設の当初、その同人は22名（即ち、伊藤修、稲葉好延、井田透三、早川正雄、小野敏夫、大岩峯吉、大野斯文、柿沼介、米野豊実、上村哲弥、田中芳、長永義正、松本豊三、佐藤四郎、宮本通治、宮崎小市、水口正一、紫藤貞一郎、島田好、柴田一郎、鈴木伸二、菅沼正風）、顧問は6名（即ち、「関東州」庁長官・三浦直彦、大連市長・丸茂藤平、満鉄総裁・松岡洋右、大連市会議長・貝瀬謹吾、大連商工会議所会頭・高田友吉、大連市商会会長・張本政）いた。本誌の第226号において、同人らは今後も雑誌

1 武田豊市「編集後記」『満蒙』（225）満洲文化協会、1939年1月、p. 1。

2 貝瀬謹吾「巻頭の挨拶」『満蒙』（226）満蒙社、1939年2月、p. 4。

を続刊する動機と編集方針を一同に「宣言」している。

「満蒙」を続刊しようとする動機は二十年の歴史を有する「満蒙」の廃刊が痛惜に堪へないこと、斯の如き文化的香の高い雑誌が一つ位は満洲に有つて然るべきではないかと確信したこと以外に何もありません。「満蒙」の刊行を中断せしめたくないで、二月号は差当り旧態のまま同人の責任に於て発刊致しますが、三月号以降は同人一同の責任編輯によって面目を改めたいと考へて居ります。「満蒙」の続刊が満洲に於ける学芸の昂揚、文化の宣布に若干なりとも寄与することが出来たならば同人の望外の幸甚とするところであります。³

ここでは「学芸の昂揚、文化の宣布」という編集志向が示されている。この編集志向に従い、1939年3月以降、雑誌『満蒙』の面目が一新されたのである。発行機関の変更後に発刊された第227号（1939年3月）の目次は変更前の第225号と比べてみると、誌面上の文化性が強くなったことが分かる。第225号の目次を見ると、政治的（「『満蒙』評壇・世界の大勢、東亜の更正、生活の刷新」、岸田唯一の論・「華盛頓会議と支那問題」等）、経済的（小倉隆の論・「支那に於ける手紡絲と手織」等）、文化的（崔栄翰の論・「朝鮮民謡序説」、柴田天馬の支那怪奇談・「狼怪禽異」など）内容が混じり合っているのがわかる。

それに対し第227号になると、政治的、経済的な内容はほとんど見あたらず、文化的な内容が中心になっている。その目次を見ると、思想（桑江常夫の論・「孫文主義修正の諸問題」）、医学（白仁五男の論・「満洲の医学的開拓」）、文学（随筆四題：大岩峯吉の「旅の晩餐」、水口薇陽の「立腹掃談」、大野斯文の「長屋住居」、横田一路の「ぶんや談議」；短歌：甲斐水棹選の「廣野集」、津田彦六選の「春の歌」；旅行記：呂同仁作・中村正訳の「戦火の西南中国踏破記」、金勝久の「秘境間山探勝」、小川治男の「大興安嶺の半歳」、和訳：柴田天馬の支那怪奇談・「人妖」等）、民族風俗（大野恭平の論・「支那の民族性」、島田好の論・「支那風俗の変遷」等）というように文化的な内容が誌面を独占している。従って、1939年以降、『満蒙』は総合誌から文化誌に変わりつつあったと言えるのである。

この変化は当時の社会背景と関わっている。本誌の第225号の巻頭言「昭和十四年を迎ふ」には、次のように記されている。

3 「満蒙社同人御挨拶」『満蒙』（226）満蒙社、1939年2月、pp. 1-2。

多事多端なる昭和十三年を突破して吾等は新に多望多幸なるべき昭和十四年を迎へた。(略)そこで所謂「長期建設」といふことになつた次第であるが、この「長期建設」を実現するがためには、それこそ我が国民は総国力を、総民力を傾注して、その達成に懸命せねばならぬのである。しかも吾等に迎へたる今昭和十四年は、この「長期建設」の初一年ともいふべく、むしろ「長期建設」の基礎を置くことになるのではあるまいか。そんな意味においても、この昭和十四年こそは実に非常時局の「長期建設」中にあつても最も意義の深い、従つて又、多事多端なるべきを思はせる年であらうといはねばならぬ。(真の「長期建設」を着着として実行して行くことに努力せねばならぬのである。(略)物質的、経済的のみならず文化的、精神的に支那が新秩序の上に確保され、真の「長期建設」の実現を期さねばならぬのであるから、事は決して容易また簡単ではないのである。⁴

ここでは「長期建設」を主張していたものの、別のところでは「建設」の緊迫も強調していた。第227号には「長期建設」に関する同人雑記が掲載されている。二人の会話を通して「長期建設」の緊迫を示している。

甲 併し、そんなに駈足で押し通し邁進してゐたのでは、結局、疲弊してやりきれないことにならぬか。ローマは一日にして成らずと毛唐もいつてゐる位なのだから。

乙 だが、暢気なことなどいつてゐられないではないか。それでなくとも…

甲 いや、その心持ちはよく判る。併し、広義の戦争なんだよ、長期の建設なんだから日常のビジネスとして、倦まず、撓まず、積極的に、大乘的にコツコツとやつて行かうではないか。

乙 それもさうだが、とにかく急いで、駈足で、行けるところまで行くよ。それではなくては、日くれて路遠しだ。⁵

「長期建設」がいったい何かについては引用では明確に述べられていなかったが、この巻頭言から文化の建設がその重要な一環であることが分かるだろう。1939年2月に結成された満蒙社同人は文化の建設を目標とし、その後の雑誌『満蒙』を編集していったと思われる。同人らは本誌の編集を担当するとともに、「同人雑記」欄を設けて毎号に自分の書いた雑記を載せていたのである。それらの雑記には大連での同人らの日常の

4 「昭和十四年を迎ふ」『満蒙』(225) 満洲文化協会、1939年1月、p.1。

5 「同人雑記」『満蒙』(227) 満蒙社、1939年3月、p.143。

ささやかなことや文化建設の提案などが書かれている。

2 満蒙社同人と同人雑記

「満蒙社」の成立当初、同人は22人集まった。その後、その人数の変動（232号から大西秀治が同人になり、245号から、高橋公彦、高山謹一、橋本八五郎、日高為政らが同人になった）はあるが、絶えず同人雑記を掲載していた同人らは変わっていない。

『満蒙』で掲載された同人雑記を統計してみると、掲載数が20篇を超える同人には大野斯文（46篇）、早川正雄（36篇）、長永義正（35篇）、橋本八五郎（31篇）、高山謹一（29篇）、柴田一郎（柴田天馬、25篇）、佐藤四郎（22篇）、伊藤修（21篇）がいる。彼らが「満蒙社」同人という身分以外に、どのような経歴及び身分をもっていたのかについては、筆者が調査⁶を行った。

大野斯文は画家である。彼は1895年に福島県に生まれ、1919年に川端画学校で日本画を専修し上海師範大学及び上海東方芸術専門学校に招聘されたが、1925年5月に大連を訪れ、翌年の2月に創立当時の満洲広告研究会主事に選任を受けた。また同協会を同年11月に辞して日下中華女子手芸学校に図案及染色等の教壇を担任した。大野は満洲画壇に嶄然頭角を現し、「満蒙社」が成立する前に、雑誌『満蒙』で満洲風物を対象にする研究と一連の画作を発表した。

その中では、第94号（1928年2月）で掲載された「南画雑考」と第99、101号で掲載された「路上風物抄（大連の巻）」が代表的なものとして挙げられるべきである。「南画雑考」は論考であり、南画の発程、画論及びその日本への渡来について詳しく記している。「路上風物抄（大連の巻）」は三巻からなる画作で、その中に花屋、豆腐屋、靴直し、金魚屋などの大連の風物を生き生きと描いている。

大野は画の創作と研究の一方で、デザインにも長所を見せた。彼は『満蒙』の表紙をデザインした。「支那古磁器模様」（第87号）、「満洲里の風車」（第100号）、「神王」（第116号）、「満洲の風物」（第174号）などが挙げられる。その中では「満洲」の農作物である高粱を描いた「満洲の風物」が特に印象的である。要するに、大野は『満蒙』と深く関わっている人物であるといえよう。

早川正雄は大野と違い、「満蒙社」が成立する前にはその姿を現していなかった。彼は1885年に長野県に生まれ、東京外国語学校に学んだ。早く渡満し、一時は泰東日報社記者として健筆を揮った。俳句を幼時よりよくし、1909年頃には柴田博陽、渡辺凌

6 参考：芳賀登 [ほか] 編『日本人物情報体系 12（満洲編）』皓星社、1999年10月。

雲、林宋司、柳原柳江等と「うちむし会」を組織して俳壇三昧句作を続けたこともある。「満洲国」時代には、彼はまた満鉄齊々哈爾公所長を務め、日支露三国間の協調斡旋に満鉄会社を代表して異常な功績を残していた一方で、支那風俗の研究を志していた。1943年には早川正雄が執筆した『大陸生活四十年』が博文館によって出版されている。そのなかには「満洲国」に在住する各民族の言語、交際、心理、結婚と葬式の習慣などが詳しく記されている。また、彼が蒙古を旅する時に書いた俳句も残されている。

東蒙の 原いつぱいに 初日の出
天山は まだあの西か 曇の峰
馬の尻を 嗅ぎ分けて千里 枯野原
明月に 聞かぬは惜しき 胡茄の声
狼の 遠咆え聞きぬ 包の宴⁷

従って、早川は、ある程度文学の教養を持っていたといえる。この点は、彼の書いた同人雑記からも窺える。

早川正雄と同じく長永義正は「満蒙社」が成立した後に現われた人物であり、当時大連商工会議所理事を務めていた。彼は1896年に東京で生まれ、1921年に慶応大学理財科を卒業し、その後大連に渡り、大阪毎日新聞社経済部副部長、京城支局長、大連商工会議所書記長同理事長、満関貿易連合会常務理事、大連支部長、関東州毛麻糸布統制組合理事長等を歴任した。「支那」に関する著書が十数冊ある。従って、長永はまず経済学者として認められているといえる。特に彼の書いた『支那経済物語』（1929年）、『グロテスク支那』（1930年）、『経済都市大連』（1933年）などは当時の中国の経済の状況と問題を詳しく取り扱い、現在でも当時の中国の経済を研究する重要な資料である。彼は経済学者である一方で、文学者としての資質もある。この点は彼の書いた同人雑記から窺える。彼の雑記は散文のようなものが多く、その文才は拔群である。

橋本八五郎は『満蒙』の第246号で登場した同人で、当時、満洲電信電話株式会社嘱託の職を勤めていた。彼は1888年に福井県で生まれた。1916年4月東京中央報徳会において雑誌『斯民』の編集に従事しており、翌年3月に「満鉄」に入社し人事課勤務、社長室社会課勤務、大連図書館勤務、北公園図書館長兼大連図書館勤務を歴任した。1926年4月に日本橋図書館長となり、次いで兼埠頭図書館主事、埠頭実業補習学校講師兼大連医院附属看護婦養成所講師兼伏見台図書館主事兼近江町図書館主事、大連図書館司書

⁷ 早川正雄『大陸生活四十年』博文館、1943年6月、p. 171。

係主任を務めた。この経歴からみると、橋本八五郎は満鉄関係者であり、雑誌編集の仕事の経験もあったことがわかる。そのため、彼は雑誌『満蒙』を編集すると同時に、「満鉄」の政策宣伝にも力を入れていたと考えられるのである。

『満蒙』を繙いてみれば、彼の随筆や時評などが見つかる。彼の随筆「菊・月・郷愁」⁸（第248号）と「詔書・天皇・日本精神」⁹（第262号）には日満親善の意思が読み、その中には「日満両国はもとより不可分一体、国民の大多数を占める満系に於いても、日本精神に対して深い関心を有すべきだが、特に、我々としては、之を忘れるどころか、一日も離れられないのである」¹⁰と述べられている。

高山謹一は橋本八五郎と同じく後期に登場した同人であるが、「満蒙社」成立前の第185号（1935年9月）で随筆「満洲国へ日本片仮名採用を提唱す」を発表したことがある。そしてその後も本誌で随筆を発表し続けていた。彼は1882年に愛媛県に生まれ、1904年3月に日本郵船に入社し、その後天津支店ロンドン支店本社客船課等に転勤した。彼は1910年にロンドンに赴き、後にロンドン大学に留学した。1930年5日に大連汽船株式会社に入社し、大連汽船（株）船客課長を務めた。この経歴からは、高山は船について詳しいと言える。

彼の書いた「満洲を背景とした船の今昔」（第252号）は満洲、特に大連港にある船の歴史を考察したものである。彼は、大連汽船（株）船客課長を務める間、大連の客船を詳しく考察し随筆「客船」（第240号）で当時の大連の客船の状況と問題を詳しく記している。一方、高山は1931年6月に満洲俳句会を起し雑誌『満洲』を主宰していた。従って、趣味として文芸の資質を持っていたといえよう。

柴田一郎は第2章で取り上げた柴田天馬である。彼に関する解説はここでは省略する。

佐藤四郎は大野斯文と同じく「満蒙社」成立前に当誌に大量に投稿した人物である。彼は1885年に茨城県に生まれ、1908年に早稲田大学政治経済科を卒業した。早大卒業後は台湾日日新聞社記者として多年在社し、1921年の渡満後は奉天新聞遼東新聞等の主幹及び編集長を歴任し、次いで哈爾濱日日新聞社長となった。1929年7月に高柳保太郎が満洲日報社長に就任すると同誌に編集局長として招聘され、哈爾濱日日新聞社長を兼務しつつ1932年に両社共に辞任し社団法人満洲文化協会書記長に就任した。

佐藤四郎は主に中国の政治・経済・文化に対して研究と時評に筆を振るった。最も早いものは『満蒙』の第57号で掲載された「南面五千年の支那史変革期」という論である。その後も、満蒙を対象にして多くの時評を発表した。代表的なものは「満蒙二十年

8 橋本八五郎「菊・月・郷愁」『満蒙』（248）満蒙社、1940年12月、p. 47。

9 橋本八五郎「詔書・天皇・日本精神」『満蒙』（262）満蒙社、1942年2月、p. 86。

10 注9に同じ、p. 87。

来の開発」(第60号)、「満洲大勢」(第68号)、「北満に於ける邦人の現状」(第100号)、「満洲国」独立の真意義」(第148号)、「北満洲経済発達小史」(第159号)などが挙げられる。「満蒙社」成立後も、佐藤は『満蒙』で雑記だけではなく多くの随筆も発表している。これには「満洲を顧みて」(第234号)、「常識的処置の危険」(第237号)、「三人記」(第271号)などの随筆が挙げられる。

伊藤修は当時、関東庁経済監査室主査を務めていた。彼は1905年に千葉県で生まれ、1931年に満洲医学大学を卒業した。同年3月に満洲医学大学副手生理学教室に勤務し、翌年2月に衛生部幹部候補生として歩兵第三隊連に入営したが11月に除隊した。12月からは命助手生理学教室に勤務し、1935年4月に専門部講師を兼務、10月に講師兼専門部助教授になった。「満蒙社」成立後、同人名簿には彼は第一位に位置づけられており、その高い地位を示している。つまり、関東庁の官僚としての伊藤は「満蒙社」による雑誌『満蒙』の編集を「監査」していたように考えられるのである。

以上から見てみれば、「満蒙社」同人の特徴は次のようにまとめられる。

第一には、同人らがそれぞれ違う分野に属している。画家である大野斯文、記者でも満鉄社員でもある早川正雄、官僚である長永義正、図書館関係者である橋本八五郎、汽船会社に勤めた高山謹一、著述家の柴田一郎、新聞社関係者の佐藤四郎などの同人らは、違う職業を持ちながら集まってきた。

第二は、同人らの文芸創作の資質は多少あるように思われる点である。大野は画家として絵を描くと同時に画論の文章も書いていた。早川は「満鉄」に務めていたが俳句に非常な興味をもって俳句を創作していた。長永は官僚であるが経済学者でもあり、多くの経済学論著を執筆した。橋本は図書館の仕事をする以外に随筆と時評に親しんでいた。高山はかつて満洲俳句会を起し、俳句に造詣が高い。柴田は「満洲」にいる間に中国の『聊斎志異』に興味を持って『聊斎志異』の和訳に夢中になっていた。佐藤は当時の有名な時事評論家として活躍していた。

第三には、雑誌の誌面に少量の随筆や同人雑記がほとんど毎号に掲載されていたが、全体から見ると同人らの投稿が少ない。前述のように、この時期の雑誌『満蒙』は「満蒙社」の同人らに編集されていたものの、一般の同人雑記と違い、同人中心の投稿ではなく、変わらずに全社会向けに投稿を募集していた。従って、「満蒙社」同人の主な仕事は雑誌『満蒙』の編集である。「同人雑記」欄はその編集を改善するために設けられたと考えられる。

第四は、同人の中には官僚もいるということである。特に「満蒙社」は6人の顧問が設けられていた。彼らは、関東州庁長官の三浦直彦、大連市長の丸茂藤平、満鉄総裁の松岡洋右、大連市会議長の貝瀬謹吾、大連商工会議所会頭の高田友吉、大連市商会会長

の張本政である。よって、雑誌『満蒙』を文化誌にするために集まってきた同人らは、関東庁及び「満鉄」に監査されていたに違いない。

一方で、「同人雑記」欄が設けられることによって同人らの言論の場が作られたのである。「同人雑記」欄の出現は1939年以降の雑誌『満蒙』の新現象であると思われる。同人らによって書かれた雑記は、まずは文化の「長期建設」を目指して、大連の文化生活の問題を多く指摘し、また、改善しようとする自らの努力姿勢を見せていたのである。

3 大連の文化生活への宣伝

前述の同人らはほとんど大連の在住民である。彼らは大連での暮らしを通して都市・大連に対して深い愛着が生じてきた。伊藤修は「同人雑記」で次のように述べている。

大連に来てやつと一年余りといふ新参者だが、この土地を愛する気持ちは人一倍に深いと思ふ、ここに来てからの僕の健康はすっかり恢復した、それ以前の約一年半をだらしなく薬餌に親しむでゐた此身体が、どうした廻り合せでこれまでに成つたか寧ろ不思議といふに近い現象だ、一口にいへば、此土地の空気が僕に適したのであらう。¹¹

この「同人雑記」の一節から伊藤の大連に対する愛着が読み取れるであろう。

同人雑記の掲載は、満蒙社が発行し始めた第226号から始まった。雑記の内容を簡単にまとめてみれば、主には①個人の生活雑談、②時事評論、③大連の生活状態、④習慣、民俗及びその中日間の相違、⑤雑誌『満蒙』の消息などに及んでいる。「同人雑記」欄は新設欄として最初から同人らによる多くの投稿があった。おおよそ、毎号八、九人の雑記が掲載されている。これらの雑記は、前述した「文化の宣布」という編集志向に従い、大連の住民の文化生活の様態を数多く記している。

1939年以前の『満蒙』ではその文化の宣伝は主に「満洲国」の文化的政策であったが、一般的な平民の文化生活はほとんど無視されていた。1939年以降、雑誌の誌面が一新し、大衆の音楽、ラジオ・映画・広告の放送、書店の経営、野球の試合、子供の教育問題などの平民の文化生活と深く関わる多くの方面に及んでいる。「同人雑記」欄は同人らの言論の場として、当時の大連の在住民の文化生活の様態をリアルに記録している。第235号で掲載された稲葉の雑記では当時の苦力の趣味が紹介されており、非常に

11 伊藤修「同人雑記」『満蒙』(226) 満蒙社、1939年2月、p. 329。

面白い。

由来苦力は趣味も何もない者のやうに考へる人もあるが、必ずしもそうではない。何円何十円といふ盆栽は有たぬが、どこかで拾つて来た缶詰の空缶に石竹かヲシロイ花位植へ一日の仕事を了へて帰るや先づそれに水をそぐのを筆者はよく見受ける。又それを前にして食事をしてゐるのを見る。夕食後は石に腰をあげて手製の胡弓などひいてゐるのもある。¹²

稲葉が大連の下層階級である苦力の趣味を発見し、わざわざ雑記に書き記すということからは、当時の満蒙社同人らの大連の人々の文化生活に対する関心が説明されるのだろう。従来、苦力は人力車の車夫、炭坑作業員、伐木作業員、採金作業員などの下層労働者として描かれていたが、ここでは「盆栽」を植え、「胡弓」を弾くことを楽しむ一般的な民衆として書かれている。苦力にまで浸透していった人々の文化生活が完璧に表されている。

しかし興味深いことに、「文化の宣布」でありながら雑記の中では文化生活の広い範囲にわたる各種の問題も指摘されていた。もちろん、そこには各種の問題をいい方向に改善しようという同人らの姿勢が見られるが、当時の文化生活の問題をもリアルに反映している。従って、いわゆる同人らの「文化の宣布」は一方に偏っている傾向があるのである。長永は第236号でラジオ放送について次のように述べている。

放送局が音楽学校の通信教授を試みてゐるのならとも角、大衆の聴取者に健全にして清新な娯楽を提供する意味で音楽放送をやつてゐるのだとすれば、この和洋楽放送量の議論は結論に近い。若干の指導的意識の動くことは是認するとして、大衆の欲する音楽を放送すべきであると結論して差支へなからう。和、洋楽いづれにも偏してはいけない。特に最近の大連中央放送局のやうに洋楽に偏することは慎まねばならない。ラジオ放送の対象は大衆だ。プロの編成者は大新聞の編集者のやうに広い視野から大衆の動向を凝視していなければならない。¹³

「ラジオ放送の対象は大衆だ」と述べられているやうに、「大衆」は音楽という文化生活の享受者になる。ただ、「最近の大連中央放送局のやうに洋楽に偏すること」に対する「和、洋楽いづれにも偏してはいけない」という指摘からは、「和」楽を享受する

12 稲葉好延「同人雑記」『満蒙』(235) 満蒙社、1939年11月、p.147。

13 長永義正「同人雑記」『満蒙』(236) 満蒙社、1939年12月、p.146。

「大衆」は「満洲」に在住する日本人を指すと考えられるだろう。大連の人口の大部分を占める中国の下層の民衆はその「大衆」から排除されている。実際は、「満洲国」という特殊な背景の下では多言語放送が実施されていたのである。この点については白戸健一郎が次のように指摘している。

満洲国は日本人向けの第一放送、満系向けの第二放送、ロシア語による第三放送や朝鮮語、モンゴル語といった多言語放送を大きな摩擦なく推進できた。ここに満洲国のラジオ放送の特殊性が存在した。「五族協和」を掲げた、あるいは掲げざるをえなかった満洲国は、不完全という評価はあっても主流民族である日系以外にも制度的な門戸を広げなければならなかったし、そこで実践される文化政策も多元的なものであった。¹⁴

「満洲国」には多言語放送が存在してはいたものの、放送されたものの第一の対象は主流民族の「日系」であったと考えられる。稲葉の言った「大衆」は恐らく「日系」を指すのだろう。そうすると、音楽の享受、大きく言えば文化生活の享受は在満日本人の特権になっている。従って、稲葉の言う「大衆」は一方的なもので、彼らの代表する「文化の宣布」もまた一方的なものであったといえる。

また、同人らは雑記で大連の文明的ではない現象をしばしば指摘していた。ここでは一種の文化の秩序が樹立されている。彼らは文化の秩序に背く一切の行為を批判していた。たとえば、長永は第 232 号で小学生の立ち読みの問題に言及したのである。

小学校の先生方に一つお願いして置きたいのは、あの書籍店の店頭で蝟集して絵本や子供の雑誌を見てゐる子供達を取締りして戴きたいことだ。(略) この悪癖は大連の子供が特にひどいと思はれる。日曜日の休みにゆつくり本でも見に行かう、といふことは大連では不可能だ、こんな子供が大きくなると雑誌の連続小説を二、三軒の本屋を読んで歩く不徳漢をつくるのではないかと心配する。¹⁵

長永は、書店店頭の立ち読みという行為が「不徳漢をつくる」としっかり指摘している。確かに立ち読みは文化の秩序（あるいは文明）に反する行為である。しかし、同人らの指摘はその非文明的行為の表面にとどまり、行為の裏の原因を探そうとはしていな

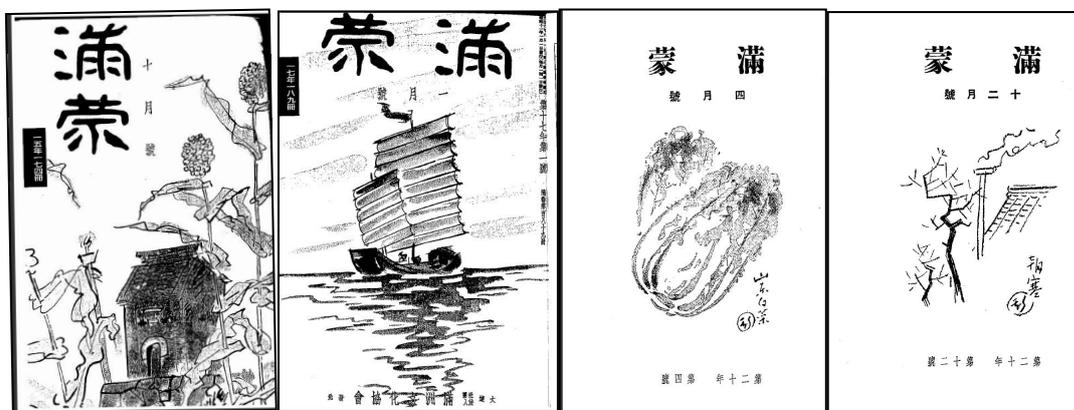
14 白戸健一郎「満洲電信電話株式会社の多言語放送政策」『マス・コミュニケーション研究』(82) 日本マス・コミュニケーション学会、2013年1月、pp. 91-92。

15 長永義正「同人雑記」『満蒙』(232) 満蒙社、1939年8月、p. 147。

かった。書籍などを買う金銭は下層の民衆にとって負担できないものだというような実情は、長永は考えていなかったのであろう。言い換えれば、同人らの文化的問題に対する指摘は、かなりの程度表面的なものであり、その背後に隠れた一般的な民衆の物質生活の低下は見出せなかったのである。

4 大連における文化生活と物質生活との間の乖離

同人らは大連の文化を宣伝する一方で、大連に在住する民衆の物質生活をも曝し出している。大連における文化生活と物質生活の乖離がここからははっきりと見える。同人らは人々の飲食生活、住宅問題、苦力、泥棒（小盗兇）などの方面の問題を取り上げ、当時の大連の食糧の不足、不公平な資源分配、混乱した社会秩序などの社会現実を提示している。大野斯文はそうした同人の中の最も代表的な者である。前述のように大野は画家である。彼は画家として民衆の生活への関心がほかの同人よりも強かったと思われる。この点は彼の描いた表紙から窺える。彼の画作の主題は民衆の物質生活上の物事である。



〔図 6-1〕 雑誌『滿蒙』の 174 号、189 号、228 号、236 号の表紙

「満洲」の農作物・高粱（第 174 号の表紙）、船帆（第 189 号の表紙）、白菜（第 228 号の表紙）、煙突（第 236 号の表紙）などの日常生活でよく見られるものが大野のよく観察した対象であった。それだけでなく、大野は同人雑記の中で大連の食糧や住宅などの人々の物質生活をしばしば書いていたのである。第 242 号の「同人雑記」には大野が大連の米の問題を次のように述べている。

最近の大連はどこへ行つても麦めしだ。(略)ところがこの胚芽米は名ばかりで、私の家でも暫く食べたが、胚芽の完全に附いてゐるのは百粒の中七、八粒で、結局いゝ加減に搗いたものを胚芽米と僭称して高く売つてゐるに過ぎなかつた。(略)我慢の出来ないのは、粳、稗、赤米、粉米、小石などの夥しく混つてゐることである。(略)何よりも困るのは小石をガリ、と噛むことである。私等のやうに役に立たない歯の多くなつた者はよいが、子供たちの、これから何十年も使はなければならぬ歯を損じることが怖くて仕方がない。¹⁶

米の不足(「どこへ行つても麦めしだ」)、売られた胚芽米の質の悪さ(「小石などの夥しく混つてゐる」)などが指摘されているように、ここでは食糧の不自由(あるいは不足)が呈示されている。つまり、当時の大連においては、余裕のある文化生活どころか、基本的な食生活も不自由で不足があつたと考えられる。

また、大野は大連の住宅問題をも指摘している。

七月以来、住居のことでかなり悩まされてきた。大連へ来た当時は一年未滿づゝで五回ほど転居した。(略)いま二、三年動けないなと思つて居つたところ、この夏、三人目の家主から乞食同様の扱ひで逐ひ出されかけた。その問題は、警察の手を籍りたり、新聞が家主の非を鳴らしてくれたりしたので、多少は有利——と云ふより世間並に解決したが、逐ひ出されることには変りなかつた。¹⁷

今のところ、食糧品・衣料品がかなり窮屈になつてゐるため、この方面では富の多寡に拘らず誰でも切詰めた生活をしてゐるが、その他のものでは、必要限度を超えてゐるものも相当ある。例へば住宅がさうである。現在大連でも、住宅のため頭を悩ましてゐる人が、家族を合はせれば夥しい数である。ところが一方には、僅かな家族に広い邸宅を擁してゐる人もあり、夜の僅かな時間を遊興に当てるため沢山の部屋を空けてある料理屋も相当ある。¹⁸

ここからは大連の住宅の問題が分かるだろう。大野は住宅分配の不公平を指摘している。当時、大連においては多くの人が住宅の問題に悩んでいた。決して、自宅にすわつてゆっくり和樂を聞くという、同人の長永の想像した豊かな生活ではなかつただろう。長永と違って、大野の雑記には衣食住が未だ満たされない大連の下層民衆の生活状態が

16 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(242) 満蒙社、1940年6月、pp. 121-122。

17 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(235) 満蒙社、1939年11月、p. 150。

18 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(277) 満蒙社、1943年5月、p. 101。

書かれている。従って、同人らの目指した「文化の宣布」によって要求された文化生活の向上と民衆の物質生活の低下との間には乖離が生じていたといえよう。

衣食住だけではなく、大連においては社会秩序の混乱も同人らによって指摘されている。早川は大連の乞食について次のように記録している。

大連市の中心、大広場と云へば、すぐに舗道に這ひつく張つてゐる多くの支那人乞食を思ひ出す。(略)先頃幾人もの子供を使つてゐる或る女乞食が、子供が僕にくっついて金をねだつてるのを見て、「ダメダ、ダメダ。其の人は毎日通るけれども一文も呉れやしないんだ。早くあの子の女の人の方へ行けツ」。こんな時には支那語が出来ることの悲哀を痛切に感ずる。¹⁹

大連には「支那人」の乞食が多かったと指摘されている。これは、大連には生活できない貧乏な下層民衆が未だ多く存在していたという一側面を反映している。しかし、早川はこの点を意識していなかったようである。彼は、乞食が多かったことが「文化の宣布」の障害だと思っていたのだろう。「ダメダ、ダメダ。其の人は毎日通るけれども一文も呉れやしないんだ。早くあの子の女の人の方へ行けツ」というような皮肉かつ冷酷な記述の調子からは、乞食に対する同情が全くなかったと窺える。早川は下層民衆の生活を見ていなかったのである。

早川と比べ、大野は下層民衆の観察を相当熱心に行っていたことが窺える。彼は、大連の汽車の四等票について次のように記している。

こゝで、大連に在る満洲人といふものを吟味してみる必要がある。／われわれ日本に生まれ日本育つてきた者には、汽車に乗つても船に乗つても三等までしかあることを知らなかった。ところが、満洲へ来てみると汽車には四等票を買つて乗る人が年に何十万かあるのを知つて驚いた。また、大連・北支、大連・山東間を往来する船の甲板にうづくまつて搬ばれる客の夥しくあるのにも驚いた。所謂第四階級である。(略)四等票の座席も甲板も、人間は搬び得るが貨物を積載するための所である。／然るに、これら貨物と同様の待遇を以て来往する人々が、大連に於ける市民の一部として相当の数をなしてゐるのである。²⁰

19 早川正雄「同人雑記」『満蒙』(241) 満蒙社、1940年5月、p.148。

20 大野斯文「同人語 大連の一面」『満蒙』(250) 満蒙社、1941年2月、p.3。

「大連にをる満洲人といふものを吟味してみる必要がある」と言う指摘からは、大野の満洲人（の一般的な下層民衆）に対する非常に強い関心が窺える。それに、彼は観察だけではなく、この第四階級を詳しく調査していた。「これら貨物と同様の待遇を以て来往する人々が、大連に於ける市民の一部として相当の数をなしてゐる」ということは、当時の大連の交通問題をも反映している。

つまり、先に述べた「衣食住」の問題以外にも、「行」の問題も存在するのである。衣、食、住、行からなる人々の物質生活は大連においては未だ問題視されていたと考えられる。

大野は大連の下層民衆をよく観察して関心をもっていたものの、それに同情心を示してはいなかった。つまり、大野の下層民衆に対するすべての発言は民衆の立場からではなく、「満洲国」の建設という官的な角度からされていたのである。彼は、「満洲」の苦力について次のように述べている。

問題は苦力及び苦力に準ずる階級である。（略）苦力は概ね北支・山東に家郷をもつてゐる（中に満洲国・大連に家居を移してゐるものもある）。（略）彼らにとって、国家の危急存亡よりも生命の安全が得られ、賃金収入が多ければ、いかなる国家いかなる民族の下に顧使されやうとも、それがまた自国及び自国民にいかなる結果を及ぼさうとも、唯々として行動するのを見れば、尠くともわれわれの考へる国家観念なるものは絶無と思つてよいのでなからうか。（略）大連といふ都市の建設運営に協力するといふ意志は毫ももたないであらう。²¹

苦力及び苦力に準ずる階級が「大連といふ都市の建設運営に協力するといふ意志は毫ももたない」と指摘されたように、都市大連の建設には（文化生活の建設であっても物質生活の建設であっても）苦力のような第四階級といえる存在は排除されているようである。この視点は大野の大連の泥棒に対する記述にも現われている。

去る四月十八日の夜半、開拓地の瑞穂村に匪襲があつて、村長はじめ幾人かの人
が不慮の死を遂げた。私はその新聞記事を読んで気の毒なことだと思ふと同時に、
戸締りをせず寝てゐたゝめ匪襲の乗ずるところとなつたといふので、驚くと共に羨
ましく思つた。それに比べると、満洲での大都市である大連に住む私共は、匪襲を
受けて命を殞とすやうなことは絶対ないが、戸締りをせず寝るなどといふことは夢

21 注 20 に同じ、pp. 4-5。

にも考へられない。第一、どこの都会にも居るやうに泥棒が横行する。(略) ゴミ箱あさり兼小盗児が天下御免…²²

大野の雑記には大連に泥棒が多かったことが書かれているが、泥棒の悲惨な生活は描かれていない。大連の泥棒(小盗児)に関しては、探偵小説家の大庭武年が創作した小説「小盗児市場」では言及されている。この小説には小盗児市場の泥棒、売春婦などの下層民衆の悲惨な生活状態がリアルに描写されている。しかし、大野は同時代の大連の泥棒のような下層民衆の生活の悲惨さを見ていなかった。ただ開拓地の瑞穂村の「戸締りもせずに寝られるほど安んじて生活できること」が羨ましかったのである。

以上のことから、「同人雑記」の中で書かれた民衆の衣、食、住、行の問題、及び苦力、乞食、泥棒が多かったといった社会問題が、まずは都市大連の文化建設の障害であると「満蒙社」同人らには一般的に認識されていたことがわかる。ここでは、文化生活が宣揚されていた一方で、下層民衆の基本的な物質生活がかなりの程度無視されていた。つまり、「満蒙社」が成立して以来出されていた「学芸の昂揚、文化の宣布」という方針は、民衆全体の物質生活が向上した上に立っているのではない。少なくとも、大連にいる中国の下層民衆を対象としてはいなかったのだと思われる。「満蒙社」同人らのいわゆる大連の「長期建設」という志向には、文化生活の建設と物質生活の建設の間で乖離が明らかに生じていたのである。

おわりに

「満蒙社」は1939年2月から雑誌『満蒙』を編集し始め、大連の文化の「長期建設」を志し、文化生活を向上させようと「努力」していた。その同人らは「学芸の昂揚、文化の宣伝」という編集志向に基づいて『満蒙』の誌面を刷新し、誌面から政治、経済関連の記事を取り除き、その一方で「随筆」欄、「同人雑記」欄を設け特に文化建設を主張していた。しかし、大連は近代化した都市として娯楽などの文化生活の方面は向上していたが、それと物質生活との間には乖離が生じていたのである。それ故に「満蒙社」同人らの求めた「文化の宣布」と中国の下層民衆の「物質生活」の低下との間には鮮明な対立感が存在する。

彼らは下層民衆の物質生活の低下をほとんど見ていなかった。たとえ下層民衆に触れたとしても、「文化建設」の秩序に対する悪影響という角度からの言及である。言い換

22 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(243) 満蒙社、1940年7月、p. 163。

えれば、満蒙社同人らの期待した文化の「長期建設」とは中身のない「空想」、あるいは愚痴である。雑記の中に反映された中国の下層民衆の物質生活の低下という現実、「文化の宣布」という「長期建設」の目標との間に大きな乖離が見えてくるため、同人のいわゆる「長期建設」は民衆の物質生活の上に立っていなかったことがわかるのである。

結章 総括と今後の課題

1 本論文のまとめ

本論文は文芸を切り口として総合誌『満蒙』を考察する試みである。『満蒙』に現れた主要な文芸は、文芸評論、翻訳文学、詩歌（民謡、漢詩、短詩、短歌、俳句、川柳）、小説、戯曲脚本、旅行記、随筆、雑記などが挙げられる。これらの文芸作品は、多分野にわたる在満日本人によって創作されたもので、在満日本人の満蒙観・満洲観を反映している。そのため、本文論では雑誌『満蒙』を考察する際に「満蒙観」を研究の視座とした。

序章では、「満蒙観」の概念、在満日本人の文芸活動、雑誌『満蒙』の概況及びその「半官半民」の性質、戦後に開始され「満洲」時代の日本語雑誌の復刻を解説した上で、雑誌『満蒙』研究の可能性を示した。そこで本論文は、1920年代から1940年代にかけて在満日本人が文芸活動をいかに展開していたのか、またその過程の中で現れた「満蒙観」にはどのような変化があるのか、これらを明らかにすることを目的とした。

本論文は、『満蒙』の変貌に影響を与える二つの出来事、即ち、「満洲国」の建国と「満蒙社」の成立を境目にして、『満蒙』を三つの時期（1920年から1931年までの詩歌、翻訳文学の時期；1932年から1938年までの小説、戯曲の時期；1939年から1943年までの旅行記、雑記の時期）に分けた。この三つの時期における異なった文芸面の掲載状況は在満日本人の文芸活動の動向を示し、同時に彼らの「満蒙観」の変化を表わしている。

第1部の「調査された「満洲」——「満洲国」成立前の歌謡、翻訳」において、1920年代における在満日本人の文芸活動（民謡の翻訳と創作、中国文学の翻訳）の考察を通じて、調査対象としての「満蒙」というイメージを提示した。1920年代及びそれ以前には、「満蒙」は未知の地として在満日本人に調査されていた。在満日本人の文芸活動の出発点は「満蒙」調査であったといえる。『満蒙』に掲載された詩歌、翻訳文学は、在満日本人の「満蒙」、あるいは中国全土に対する調査であった。

第1章の「支那像」を求める——在満日本人による中国民謡の翻訳と創作」では、中国の国民性を調査する手段として利用された中国民謡を分析した。1920年代に在満日本人は中国民謡に注目し始め、多くの中国民謡を翻訳・創作した。在満日本人は民謡を通して、「安楽」な労働生活、「勤勉至上」「金銭至上」という中国人の価値観を表した。つまり、在満日本人は民謡の翻訳と創作を通して「支那像」を求めていたのである。また、「満洲国」成立後には、「満洲国」の「建国」という背景の下で「王道楽土」

「五族協和」の理念を鼓吹する満洲新民謡が数多く創作されていた。そこからは中国人の排日に抵抗する在満日本人の見解が読み取れる。一方で、中国側には日本帝国主義が宣伝した「王道楽土」を風刺する新詞類民謡が現われ、民謡は中国人が日本帝国主義に抵抗するための道具にもなった。この章で触れた中国民謡は中国の国民性に言及しており、「満蒙」の地理概況だけではなくそこに暮らしていた人も在満日本人の調査対象になっていたのである。

第2章の「翻訳手法から見た「支那趣味」——柴田天馬の和訳『聊齋志異』」では、『満蒙』に掲載された柴田天馬訳の『聊齋志異』を考察対象にし、「支那趣味」を強調するためにルビと訳注を併用するという訳し方を検討した。ルビと訳注の使用によって『志異』の「支那趣味」は強められた。天馬は大量のルビと訳注を通じて、中国の文化、伝統、習慣などを詳しく紹介している。その中でも、天馬は中国の科挙制度及び物語の男性主人公・秀才に関心を持ち、多くの物語を『満蒙』に発表した。これらの男性主人公は特に「文弱」であるという一面が描かれているほか、科挙の不遇に遭い非現実の「仙境」に逃げ込む「厭世」の男性主人公のイメージも示されており、中国の文弱と厭世という国民性を表している。

以上のことから、「満洲国」成立前の1920年代においては、在満日本人の主な文化活動は「満蒙」（あるいは中国）調査をめぐって展開されていたということが言える。その中でも、中国民謡と文学作品を考察することで行われた国民性の調査は、在満日本人に重視されていた。しかしこの時期においては、在満日本人の「満蒙」あるいは中国への調査は幅広く行われていたものの、当地の在住民とは接触せず、ただ民謡や文学作品などの間接的な資料から着手していただけであったため、一方に偏っている傾向がある。それにもかかわらず、第1章の「安楽」な労働生活と「勤勉至上」「金銭至上」という「支那」観、第2章の文弱と厭世という国民性は、在満日本人の中国観の一角を表しているのである。

第2部の「宣伝された「満洲」——1930年代の小説、戯曲」においては、「満洲国」を背景にして創作された小説と戯曲脚本を取り扱い、「宣伝された満洲」という「満洲」の印象を示した。「満洲国」成立後には、「建国宣伝」、及び「王道楽土」「五族協和」という理念の宣伝が要求された。この点は雑誌『満蒙』の誌面からも読み取れる。「宣伝」は、在満日本人の文芸活動の最も大きな主題になった。

第3章の「「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦——近東綺十郎のスパイ小説「間諜・茉莉」」では、『満蒙』に掲載されたスパイ小説「間諜・茉莉」を分析した。「満洲国」成立後、「満洲」では各国の勢力が互いに角逐し、スパイ戦が激しくなった。スパイ小説の出現は当時の都市発展による都市文化の成熟及び探偵小説などの通俗文学の流行

と関係があると思われる。スパイ小説の最も大きな特徴は時局と接することである。小説における英雄型の物語は、「満洲国」を擁護する意思を示している。「間諜・茉莉」においては、主人公の茉莉は英雄のように語られ、最後には「満洲国」のために死んだ。また、茉莉の父親が日本人であり母親が満洲人であるという設定は、「満洲国」の「五族協和」の理念を宣伝しているのではないかと思われる。

第4章の「満洲国の成立と「建国宣伝」——大庭武年の戯曲創作」では、『満蒙』に掲載された大庭武年の戯曲脚本を分析し、特に作中に現れた「満洲国」の国策を宣伝する一面を検討した。大庭は「満洲国」の「建国」をきっかけにして「建国運動」に加わり、雑誌『満蒙』を拠点にして戯曲を多く創作した。彼は「満鉄」に入社する前に、自身の「満洲国」経験と歴史の教養を活用し歴史・政治・人物に重心を置くという戯曲創作の手法を作り出し、歴史及び軍閥闘争の角度から「満洲国」の正当性を唱えていた。この間に創作された戯曲には「満洲国」の「建国」を宣伝する意図はみられるものの、全面には展開されていない。1934年に大庭が満鉄に入社した後に鉄道保護を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表され、明確な国策宣伝者の姿が現われた。戯曲「劉愛護村長」は当時の「愛路運動」を宣伝するために創作された作品である。

以上のことから、1930年代においては、在満日本人の文芸活動は主に「満洲国」の「建国」及び「王道楽土」「五族協和」の理念への宣伝をめぐる展開されていたといえる。小説や戯曲などの文芸作品は宣伝の手段として利用されており、そこには「満洲国」の理念と各種の国策が織り込まれている。この時期は、在満日本人の新しいイデオロギー（「満洲国」の「国民」としての意識）が確立された時期である。それ故に、「満洲」或いは「満洲国」は「新国家」として在満日本人によって積極的に宣伝されていたのである。

第3部の「問題視された「満洲」——1940年代の旅行記、同人雑記」においては、田口稔の旅行記と「満蒙社」同人の文芸活動を考察した。1939年2月から「満蒙社」同人は雑誌『満蒙』を編集し始め、それと同時に雑誌の誌面も一新した。その中の最も大きな変化は、大量の旅行記と「同人雑記」の掲載である。これらの旅行記と雑記には、「満洲」に存在した多くの問題がリアルに描かれている。

第5章の「北満洲の世相を見る——田口稔の旅行記」では、田口稔の旅行記、特に作者が北満洲を旅して書き上げた「遼江記」と「江上抄」を中心に分析した。また、この作業を通じてこの時期における満洲旅行記の新動向を明らかにした。1930年代後半の旅行記には作者の抒情が強く現れた。地理的な情報だけではなく、当地の人々の生活も詳しく記述されている。「遼江記」と「江上抄」において作者の田口が北満洲の水運による経済の開発を詳しく記録したことは植民意識の表れではあるものの、その旅行記の

中には「満洲国」の政策や理念に対する不徹底性と不合理性を浮かび上がらせる描写も存在する。北満洲を重要な開発の地、「黄金世界」、多民族群居の地として描いて「満洲国」への移民政策に迎合していた一方で、当地の人々の生存状態を描写する際には、苦力の悲惨な生活、白系ロシア人が漢人を嫌っていること、天草女の墓地、在満日本婦人の帰国願望、阿片中毒者などの、移民政策に逆らう内容も書いた。「満洲」は宣伝される対象から問題視される対象に変わったのである。

第6章の「文化建設と物質生活との間の乖離——満蒙社と「同人雑記」」では、1939年以降の『満蒙』に現れた「同人雑記」を考察した。「満蒙社」の同人は大連の文化の「長期建設」を志し、文化生活を向上させようと努力していた。しかし、大連は近代化の都市として娯楽などの文化生活の方面では向上している一方で、物質生活との間には乖離が生じてきた。実際それ故に、「同人雑記」には大連の社会問題が数多く書かれている。彼らの雑記と随筆には、愚痴談のようなものが非常に多い。雑記に反映された中国の下層民衆の物質生活の低下という現実と、「文化の宣布」という「長期建設」の目標との間には大きな乖離が見えてくる。つまり、「満蒙社」同人らの求めた「文化の宣布」と中国の下層民衆の「物質生活」の低下との間には鮮明な対立が存在していたのである。

ここから、1930年代後半、特に1940年代には、「満洲」には大きな社会問題が存在していたことがわかる。この問題は在満日本人にも意識されていた。彼らの旅行記、随筆、雑記の中で書かれた苦力、泥棒、食料の不足、住宅の問題、各民族の間の不協和などの局面は、当時の「満洲国」の唱えた「王道楽土」「五族協和」の理念に背いている。

以上をまとめて見ると、日露戦争後、「満洲」に渡った日本人の文芸活動は、主に「調査する」、「宣伝する」、「問題視する」という三つの時期を経たといえよう。彼らの文芸作品は時代に対する個人的な思考が多少あったが、「満洲国」という時空では当時の時局に大きく左右され、調査の手段、宣伝の手段として利用されていたのである。

2 雑誌研究から見る「満洲」文学研究のゆくえ

「満洲文学はさまざまな言語と要素から構成される多様な文学世界であった」¹と尹東燦は述べている。「満洲」という時空の下に、中国人（満人）、日本人、ロシア人、朝鮮人、モンゴル人、欧米人が往来していた。それ故、中国語、日本語、ロシア語、朝鮮語、モンゴル語などの、多言語が混在する環境が構築されていった。この環境で育つ

1 尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店、2010年6月、p. 268。

ていった「満洲」文学自体は国際的な概念を内包している。多言語、多要素は「満洲」文学の複雑性の表れである。

いわゆる「満洲」文学は多言語の文学からなるものであるため、「満洲」文学研究には国際的な土台を築く必要があるとされている。現在の「満洲」文学研究は、日本、中国、韓国、台湾などのアジア圏で頻繁に行われているだけでなく、欧米の文学界でも大きな関心が集まっている。国際的な土台が築かれると共に、研究の共同化・国際化が進められ、「満洲」文学研究の最盛期を迎えたのである。

「満洲」文学研究を集大成する研究成果としては、近年の中国の劉曉麗主編の『偽満時期文学資料整理與研究』シリーズ（全34冊、北方文芸出版社、2017年）が挙げられる。このシリーズは、研究巻、史料巻、作品巻に分かれており、日本、中国、韓国、欧米の「満洲」文学の既成研究が網羅されている。このシリーズに対して、西原和海は「中国・日本・朝鮮・ロシア人文学者たちの、「満洲国」における活動の歴史的全容を一望するものとして、研究史上、画期的な業績となった」²という高評価を与えている。

『偽満時期文学資料整理與研究』シリーズが出版されると同時に、一つの問題も浮かんてくる。今日にでは、研究論著や資料整理で多くの研究成果が出されることによって、「満洲」文学研究の飽和度は非常に高くなっていると思われる。このような局面にあつては、「満洲」文学研究のゆくえはどこにあるのかは、今の研究界が直面しなければならない課題である。筆者は、雑誌『満蒙』を考察することを通じて、この局面を打開するいくつかの思案に辿り着いた。それをここで結章を借りて述べさせてもらう。

2.1 「満洲国」成立前の「満洲」文学に重心を移転する

「満洲」文学研究では、「満洲国」という時空間の限定がしばしばなされている。日本においても、「満洲国」時期における在満日本人の文学が数多く研究されている。1990年代に入ると、「満洲」文学に関する著作が多く出版されるようになり、このことは「満洲」文学研究の成熟を示している。岡田英樹は「八〇年代が、各種雑誌を舞台としての研究開拓時代と位置付けるならば、九〇年代はそれらの成果の上に立って、専著にまとめられていく時期と言えるだろう」³と述べている。

2 これは波田野節子の個人サイト内の科研費研究の成果を提示したものである。その中の2017年9月17日・18日に首都大学東京で行われた国際シンポジウムで西原が行った報告の資料からの引用になる。<http://hatano.world.coocan.jp/kaken3/17sympo/17sympo-japanese/3-j.pdf#search=%E5%81%BD%E6%BA%80%E6%99%82%E6%9C%9F%E6%96%87%E5%AD%A6%E8%B3%87%E6%96%99%E6%95%B4%E7%90%86%E8%88%87%E7%A0%94%E7%A9%B6>（2019年6月15日）

3. nishihara-

j. pdf#search=%E5%81%BD%E6%BA%80%E6%99%82%E6%9C%9F%E6%96%87%E5%AD%A6%E8%B3%87%E6%96%99%E6%95%B4%E7%90%86%E8%88%87%E7%A0%94%E7%A9%B6'（2019年6月15日）

3 岡田英樹「「満洲国」の文学研究——資料で語る三十年」『中国21』（43）愛知大学現代中国学会、2015年8月、p.275。

1990年代に日本で出版された著作を挙げてみると、岡田英樹の「『満洲国』における中国文学の実態研究」（1987年）、日本社会文学会編の『植民地と文学』（1993年）、山本有造編の『『満洲国』の研究』（1995年）、日本社会文学会編の「近代日本と『偽満洲国』」（1997年）、川村湊の『文学から見る『満洲』——「五族協和」の夢と現実』（1998年）、岡田英樹の『文学にみる『満洲国』の位相』（2000年）などがある。これらの著作で論じられる満洲文学は、「満洲国」という時空間の設定が一般的になされている。簡単に言えば、満洲文学研究はその開始の当初から「満洲国」時期に創作された文学が研究者に特に重視されていたのである。

しかも、この傾向は今日に至っても変わっていない。前述の『偽満時期文学資料整理と研究』シリーズからは、「満洲国」設定という様相がはっきりと窺える。本シリーズの研究巻に収録された『偽満洲国文学』（岡田英樹著、鄧麗霞訳）、『偽満洲国朝鮮作家研究』（李海英編）、『偽満洲国文学研究在日本』（大久保明男・岡田英樹著、代珂編）、『偽満洲国通俗小説研究』（詹麗編）、『偽満洲国時期朝鮮人文学と中国人文学比較研究』（金長善著）、『韓国近代文学と『満洲国』』（金在湧著、朴麗花訳）、『異態度時空中的精神世界——偽満洲国文学研究』（劉曉麗著）は、すべて「満洲国」の文学に関する研究である。現在の研究でも「満洲国」時期の文学に重心が置かれおり、これらの論考はその研究の爛熟ぶりを示している。

「満洲国」文学研究の爛熟に対して、「満洲国」成立前の「満洲」文学研究は比較的弱く見える。研究論著がほとんどないというだけではなく、資料整理も進んでいない。大きな研究の余地が残されているのである。

在満日本人の「満洲」文学史、あるいは文芸活動は、19世紀末にまで遡ることができる。しかしながら、これらの資料は文芸として研究する価値が未だ認識されていないようである。特に、20世紀に入って在満日本人の創作した多くの詩歌、旅行記、翻訳文学、小説などは未だ十分な研究がなされていない状態である。

確かに「満洲国」成立前の在満日本人の文学創作は、その量も質も成立後の文学とは比べられないものであるが、研究価値が低いとは判断できない。雑誌『満蒙』に掲載された、多くの1920年代の在満日本人の創作した民謡などの詩歌は「満洲」の人々の生活を描写しており、一読する価値がある。無論、『満蒙』だけではなく、序章で論じたように1920年代においては数多くの雑誌が発行されていた。これらの雑誌は、資料の整理によって徐々に復刻されている。

雑誌が復刻されるのに伴い、1920年代の在満日本人の文芸活動をめぐる研究の可能性が見えてくるようになった。『満蒙』の復刻によって、1920年代の在満日本人の文芸活動の動向がある程度明らかにされつつある。本論文の第1部で論じた在満日本人の

翻訳文学、民謡などの詩歌の翻訳と創作などは、当時の在満日本人の文芸活動の氷山の一角であるが、「満洲」を調査する在満日本人の視線を提示している。

残念ながら、今日でも多くの雑誌がまだ一般的に見られるようにはなっていない。未だ知られていないものが多いというこの状況は、大きな研究の余地を提供している。従って、「満洲」文学研究は現在の「満洲国」時期の文学研究偏重から「満洲国」が成立する前の「満洲」文学へと重心を徐々に移転するべきではないかと思う。今後、研究の共同化と国際化の推進によって、未知の資料の発見が進み、「満洲国」時期の文学だけではなく、それ以前の文学を含む「満洲」文学研究の全貌を示す研究が出て来ることが期待されている。

2.2 文学者だけではなく一般の在満日本人の文芸活動にも注目すべき

既存の「満洲」文学研究の中に存在したもう一つの問題は、文学者に過度に注目することである。日本の「満洲」文学研究においては、「満洲国」に生きた（あるいは旅をした）有名な文学者が研究される対象になることが多い。その中には、夏目漱石、安部公房などの日本文学史にも名高い文学者が少なくない。彼らの作品は重要なテキストとして多くの研究者に読まれ、分析されている。

夏目漱石が1909年の中国韓国旅行の体験を語った漱石の唯一の旅行記・「満韓ところどころ」を例として挙げてみると、それに関連する研究論文は非常に多い。これは、夏目漱石の日本文学史での高い地位を示す一方で、「満洲」文学のテキスト研究における、有名な文学者に過度に注目する傾向も多少示しているだろう。つまり、従来の「満洲」文学のテキスト研究においては有名な文学者のテキストが読む価値が高いと思われるしており、研究者に重要視されているように思われるのである。

個別の文学作品の研究と同様に、「満洲」の日本語雑誌の研究の中にもこのような傾向は普遍的に存在する。多くの研究成果が蓄積された文芸誌『満洲浪漫』の研究を例にして見ていくと、2003年に出版された呂元明、鈴木貞美、劉建輝の共同研究論著『『満洲浪漫』研究』では、主に論じられた執筆者は、『満洲浪漫』の発起人である北村謙次郎、同人の檀一雄、長谷川濬、逸見猶吉だけである。また、発起人の北村謙次郎に対して多くの研究が行われており、2015年に韓玲玲の執筆した博士論文『満洲における北村謙次郎の文学活動』はその中の最も大きな研究成果である。

1980年代から現在までの、有名な文学者と雑誌の主要な執筆陣を中心に行われた「満洲」文学の研究はすでに多くの成果が出されており、ある程度飽和状態になっているといえよう。「満洲」文学研究から新鮮感が失われていっていると筆者は実感している。いかに「満洲」文学研究の新領域を開くかは私の研究者にとって新しい課題になった。

そのため、一次資料としての「満洲」で刊行された新聞・雑誌とその研究成果を対照して見直す必要がある。そこから新鮮な視角を掘り出さなければならない。

雑誌本体とその研究を対照すると、雑誌同人に関する研究が多く行われた一方で、同人以外の文芸活動が研究者によって見落とされてきた恐れがあることが分かる。例えば、2015年に中国で出版された祝力新の論著『『満洲評論』及びその時代』では、主に雑誌の主宰者の橋樑と小山貞知をめぐって論じられている。『満洲評論』で登場した多くの一般の在満日本人は詳しく研究されていない。

このように、これまでの「満洲」文学研究の中では一般の在満日本人の文芸活動は未だ研究者の関心を惹き起こしていないように見える。ここで言う「一般の在満日本人」とは「満洲国」で生きた無名の日本人である。例えば、軍人、記者、職員（満鉄職員）及び一般の民衆などがそうである。軍人の行軍記、日記、記者の新聞記事、満鉄職員の調査報告、募集による民衆の多様な投稿が、当時発行されていた雑誌や新聞にはしばしば掲載されていた。雑誌『満蒙』の場合も、雑誌の編集者や主な執筆者以外にも、多くの一般の在満日本人も執筆陣に加わったのである。彼らの文学創作や文芸活動は、「満洲」文学研究にとって不可欠の存在である。

しかし、一次資料の紛失や未整理のため、一般の在満日本人の文芸活動に関する研究は不十分である。有名な文学者らに比べ、一般の在満日本人の創作した文学は周縁化されているように思われる。これらの文学作品は雑誌と新聞に載せられたまま、ほとんど読まれていない。「満洲」文学研究の新鮮感が失われていく現在においては、これらの周縁化された一般の在満日本人の文学はいつそう研究者に注目されるべきではないかと筆者は思う。

2.3 文芸誌からだけでなく総合誌から在満日本人の文芸活動を考察するべき

在満日本人の文芸活動を考察する際には、その対象としては文芸誌と同人誌が一般的には首位に置かれている。総合誌の研究は文学研究者が十分に触れていないものである。無論、文芸誌と同人誌は雑誌の独自の傾向性と執筆者・同人らの文芸の共通性をはっきりと示しているため、ある団体、ある時期の在満日本人の文芸活動を容易かつ系統的にまとめられる。しかし、文芸誌と同人誌は、編集者・同人（一部分の在満日本人）の文芸活動と思想だけを代表しているため、一冊の文芸誌・同人誌から在満日本人の文芸活動の全貌は概観しかねるのである。

本論文は、総合誌から在満日本人の文芸活動を考察する試みであり、総合誌から文芸を研究する方法の探究でもある。前述のように、これまでの「満洲」の日本語雑誌の研究は、文芸誌と同人誌を中心に行われていた。編集者、執筆陣、読者、掲載内容の傾向

性などを逐一考察する研究方法は一般に採用されている。このような方法は、総合誌から文芸を研究するには、不適切である。

何故なら、総合誌の掲載量と掲載内容は非常に膨大、多様であり、政治、経済、文化の各方面に及んでいるためだ。それらを逐一考察するのは現実的ではない。それに、執筆陣は様々であり、文芸誌・同人誌とは異なって執筆内容の共通性を持たなかった。投稿者らは各分野に亘っているため、簡単には分類することができない。更に、多様な掲載内容と投稿者から雑誌の独自の傾向性を見出すことも難しい。従って、総合誌から在満日本人の文芸活動を考察する際には、新しい研究方法を探し出さなければならないのである。

雑誌『満蒙』に掲載された文芸内容を考察する際には、まず年代順に従って分類した。そして、各年代に登場した主な文芸を概説し、在満日本人の文芸活動の時代性を明らかにした。最後に、各年代の在満日本人の文芸活動の時代性を最も代表的に表わす作品を抽出して詳しく分析した。本論文では、雑誌『満蒙』における文芸を解説したうえで、雑誌に登場した翻訳文学、詩歌、小説、戯曲脚本、随筆、雑記の代表作を分析する方法を採用している。

本論文で提示した「満洲」の日本語雑誌の研究方法は、一種の雑誌の文芸的な特色を系統的かつ論理的に分析するという局限があるが、全体的に在満日本人の文芸活動を概観するにはメリットがある。特に掲載内容が多様である総合誌に対して有効な研究方法であると思われる。

文芸誌・同人誌の現在の研究には多くの成果が蓄積されている一方で、総合誌の研究は未だ完全には展開されていない。今後の「満洲」の日本語雑誌の研究はその重心を、総合誌の研究にも移すべきではないかと思われる。

3 今後の課題

本論文では、代表的な文芸作品を分析することを通じて、在満日本人の文芸活動を考察したが、未だ大きな課題が残っている。

まずは、本研究の補足として、1920年代に本誌に掲載された在満日本人の創作した詩歌、及び1930年代後半に出た大量の随筆をさらに深く研究する必要があるだろう。本論文では、詩歌の中の民謡を論じ、民謡に表れた在満日本人の「満蒙観」を検討した。当時の雑誌『満蒙』の誌面には民謡だけではなく、短歌、漢詩、和歌、俳句、川柳などの詩歌も数多く載せられている。これらの文芸作品は、1920年代の在満日本人の文芸活動を研究するために、非常に重要な一時資料であると思われる。そのため、1920年

代の詩歌を全面的に考察するのは、本研究に残された課題の一つである。

1930年代後半の『満蒙』には随筆が大量に掲載されていた。これらの随筆の執筆者は非常に多く、容易にまとめることはできない。しかし随筆は、当時の在満日本人の文芸活動の重要な一部である。雑誌『満蒙』においては、1939年に「満蒙社」が結成された後に、「満蒙社」同人をはじめとして多くの在満日本人が本誌に随筆を投稿していた。誌面を見てみると、毎号四、五題の随筆が掲載されている。1930年代後半に入ると、小説の掲載数が減り、それに対して随筆の掲載数が増加した。これは在満日本人の文芸活動の新しい動向を示している。本論文では、「満蒙社」の同人雑記を中心に分析したが、随筆にはほとんど触れていなかった。そのため、本誌に掲載された随筆の考察も今後の課題の一つである。

本研究に残された最も大きな課題は、満蒙文化協会のもう一つの機関誌『東北文化月報』に対する考察である。満蒙文化協会は、機関誌の『満蒙』を発刊していたほか、中国語の機関誌『東北文化月報』も発行していた。『東北文化月報』は1922年4月から満蒙文化協会の機関誌として大連で発刊され、満洲日日新聞社で印刷された。「満洲国」が成立した1932年にまた「大同文化」と改題した。改題と伴って出版地は大連から奉天、新京へと移転し、1936年に再び大連に戻り、その後に間もなく廃刊した。そして時を経て2006年に『東北文化月報』は北京で復刻された。本論文で考察した日本語雑誌『満蒙』は『東北文化月報』と同じ満蒙文化協会に発行された雑誌である。『満蒙』の執筆陣はほとんどが日本人であるが、『東北文化月報』の執筆陣はほとんどが中国人である。『東北文化月報』は中国人の「日本観」を表わしていると思われる。今後、満蒙文化協会の事業を深く考察する際には、両雑誌の比較研究を行うことが必要である。本論文で取り扱った『満蒙』の研究を踏まえて、今後は『東北文化月報』を大きな課題として研究を推進するつもりである。

参考文献

【日本語文献 一次資料】（著者名・編者名・発行機関名かな順）

- 浅田弥五郎「東蒙騎馬横断記」(上)(中)(下)『満蒙之文化』(3-5) 満蒙文化協会、1920年11-1921年1月。
- 伊藤修「同人雑記」『満蒙』(226) 満蒙社、1939年2月。
- 稲葉亨二「黄塵」『満蒙』(144) 満洲文化協会、1932年4月。
- 稲葉好延「同人雑記」『満蒙』(235) 満蒙社、1939年11月。
- 井上剣花坊「満鮮余稿」『満蒙』(69) 満蒙文化協会、1926年1月。
- 井上寿老「困知齋詩鈔」『満蒙』(181) 満洲文化協会、1935年5月。
- 井上友一郎・豊田三郎・新田潤『満洲旅日記』(文化人の見た近代アジア 20) ゆまに書房、2002年9月。
- 大内隆雄「最近の支那文学展望」『満蒙』(238) 満蒙社、1940年2月。
- 大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社、1944年10月。
- 大瀧重直『満洲農村紀行』(満洲開拓文学選集 13) ゆまに書房、2017年10月。
- 大野斯文「同人語 大連の一面」『満蒙』(250) 満蒙社、1941年2月。
- 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(233) 満蒙社、1939年9月。
- 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(235) 満蒙社、1939年11月。
- 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(242) 満蒙社、1940年6月。
- 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(243) 満蒙社、1940年7月。
- 大野斯文「同人雑記」『満蒙』(277) 満蒙社、1943年5月。
- 大庭武年「清朝終焉」『満蒙』(158) 満洲文化協会、1933年6月。
- 大庭武年「張学良」『満蒙』(144-145) 満洲文化協会、1932年4-5月。
- 大庭武年「馬占山」『満蒙』(159) 満洲文化協会、1933年7月。
- 大庭武年「満洲開基」『満蒙』(167) 満洲文化協会、1934年3月。
- 大庭武年「劉愛護村長」『満蒙』(177) 満洲文化協会、1935年1月。
- 大庭武年「蔣介石」『満蒙』(169) 満洲文化協会、1934年5月。
- 貝瀬謹吾「御挨拶」『満蒙』(226) 満蒙社、1939年2月。
- 金井清「拓けゆく北満洲」『満蒙』(159) 満洲文化協会、1933年7月。
- 上村清彦「満洲の自然美」『満蒙之文化』(2) 満蒙文化協会、1920年10月。
- 黒川創『満洲・内蒙古/樺太』(「外地」の日本語文学選 2) 新宿書房、1996年2月。
- 郡家陸夫「寂寥たる満洲の文芸界」『満蒙』(143) 中日文化協会、1932年3月。

景仁文化社編『北満洲』（満蒙地理歴史風俗誌叢書 125・126）景仁文化社、1997年5月。

景仁文化社編『満洲農村民謡集——農業支那と遊牧民族』（満蒙地理歴史風俗誌叢書 161）景仁文化社、1997年5月。

景仁文化社編『満洲民俗考』（満蒙地理歴史風俗誌叢書 120）景仁文化社、1997年5月。

古沢文作「満洲に於ける油房事業の現在及び将来」『満蒙之文化』（13）満蒙文化協会、1921年9月。

近東綺十郎「間諜・茉莉」『満蒙』（164）満洲文化協会、1933年12月。

近東綺十郎「女学生陳青蛾の更正」『満蒙』（143）中日文化協会、1932年3月。

佐藤四郎『満洲における日本及日本人』（満蒙紹介叢書 2）満蒙文化協会、1925年10月。

七理重恵『支那民謡とその国民性』明治書院、1938年11月。

篠垣鉄夫「南行列車」『満蒙』（142）中日文化協会、1932年2月。

柴田天馬「花神の檄」『満蒙』（279）満蒙社、1943年7月。

柴田天馬「怪物屋敷の二美人」『満蒙』（186）満洲文化協会、1935年10月。

柴田天馬「同人雑記」『満蒙』（231）満蒙社、1939年7月。

柴田天馬「同人雑記」『満蒙』（272）満蒙社、1942年12月。

柴田天馬「幽鬼の受験」『満蒙』（83）中日文化協会、1927年3月。

聖田武彦「スパイと愛欲」『満蒙』（147）満洲文化協会、1932年7月。

高柳保太郎『満蒙観』（満蒙紹介叢書 1）満蒙文化協会、1924年8月。

田口稔「「アジア」の語源」『満蒙』（175）満洲文化協会、1934年11月。

田口稔「フランスに於ける満洲研究」『満蒙』（162）満洲文化協会、1933年10月。

田口稔「江上抄」『満蒙』（280）満蒙社、1943年8月。

田口稔「西部濱綏線紀行」『満蒙』（193）満洲文化協会、1936年5月。

田口稔「遼江記」『満蒙』（279）満蒙社、1943年7月。

田口稔「大連地名考」『満蒙』（180）満洲文化協会、1934年4月。

田口稔「通北県を過ぎる」『満蒙』（185）満洲文化協会、1935年9月。

田口稔「北満洲三角線の近景地域」『満蒙』（186）満洲文化協会、1935年10月。

田口稔「明治初・中葉の満洲文献」『満洲地理点描』満鉄社員会、1939年6月。

田口稔『満洲随想』満洲文化協会、1933年12月。

武田豊市「編集後記」『満蒙』（225）満洲文化協会、1939年1月。

徳富蘇峰『支那漫遊記』（大正中国見聞録集成 6）ゆまに書房、1999年4月。

中野久四郎「私の満洲旅行」『満蒙』（160）満洲文化協会、1933年8月。

中溝新一「編集私記」『満蒙』（148）満洲文化協会、1932年8月。

中溝新一「編集私記」『満蒙』(185) 満洲文化協会、1935年9月。
中野天心『警醒録』文明堂、1906年8月。
永山武四郎『周遊日記』(明治欧米見聞録集成16) ゆまに書房、1987年12月。
長永義正「同人雑記」『満蒙』(232) 満蒙社、1939年8月。
長永義正「同人雑記」『満蒙』(236) 満蒙社、1939年12月。
那迦三蔵「『聊斎』と柴田さんの翻譯」『満蒙』(164) 満洲文化協会、1933年12月。
那迦三蔵「春の微笑」『満蒙』(144) 満洲文化協会、1932年4月。
夏目漱石「満韓ところどころ」『漱石近什四篇』春陽堂、1910年5月。
南満洲鉄道株式会社鉄道総局附業局愛路課編『鉄道愛護運動の概要』南満洲鉄道株式会社鉄道総局附業局愛路課、1939年9月。
西田猪之輔「満洲国ところどころ」『満蒙』(145) 満洲文化協会、1932年5月。
西英「牧場の唄」『満蒙』(33) 満蒙文化協会、1923年4月。
橋本八五郎「菊・月・郷愁」『満蒙』(248) 満蒙社、1940年12月。
橋本八五郎「詔書・天皇・日本精神」『満蒙』(262) 満蒙社、1942年2月。
羽阜生「満洲歌謡集」『満蒙』(153) 満洲文化協会、1933年1月。
早川正雄『大陸生活四十年』博文館、1943年6月。
早川正雄「同人雑記」『満蒙』(241) 満蒙社、1940年5月。
風土研究会編『満洲の印象』(満洲開拓文学選集10) ゆまに書房、2017年10月。
北満三江会事務局編『北満江運局沿革』北満三江会事務局、1986年10月。
星武雄「熱河避暑山荘及郊外の八大廟」『満蒙之文化』(1) 満蒙文化協会、1920年9月。
星田信隆「北満洲の水運」『満蒙』(100) 中日文化協会、1928年8月。
細谷清『満蒙民俗伝説』慧文社、2008年2月。
蒲松齡著・柴田天馬訳『完訳聊斎志異』角川書店、1955年3月—1957年4月。
蒲松齡著・柴田天馬訳『和訳聊斎志異』筑摩書房、2012年5月。
増田渉・松枝茂夫訳『聊斎志異』(中国古典文学全集全32巻) 平凡社、1958年。
松岡洋右「満蒙開発の基調」『満蒙』(33) 満蒙文化協会、1923年4月。
松本二郎「民謡の中から支那を覗く」『満蒙』(62) 満蒙文化協会、1925年6月。
間宮林蔵述・村上貞助編・洞富雄/谷沢尚一編注『東韃地方紀行』平凡社、1990年7月。
水口微陽「続・立腹掃談」『満蒙』(227) 満蒙社、1939年3月。
宮永次雄「北満点描」『満蒙』(235) 満蒙社、1939年11月。
与謝野寛「満蒙遊草」『満蒙』(103) 中日文化協会、1928年11月。
吉武正男・秋吉勝広「北満洲の交通(2)」『満蒙』(161) 満洲文化協会、1933年9月。

J.M. 生「支那の民謡」『満蒙』(86) 中日文化協会、1927年6月。

【日本語文献 二次資料】 (著者名・編者名・発行機関名かな順)

麻田雅文『満蒙——日露中の最前線』講談社、2014年8月。

安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房、1975年7月。

安志那『帝国の文学とイデオロギー——満洲移民の国策文学』世織書房、2016年11月。

井川充雄監修『戦前期「外地」雑誌・新聞総覧——朝鮮・満洲・台湾の言論界』(文圃文献類従52) 金沢文圃閣、2016年9月—2017年9月。

移民研究会編『戦争と日本人移民』東洋書林、1997年1月。

尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店、2010年6月。

海野弘『スパイの世界史』文芸春秋、2003年11月。

大谷健夫「思い出すままに」『作文』(97) 作文社、1974年10月。

大庭武年『大庭武年探偵小説選』(論創ミステリ叢書) 論創社、2006年12月—2007年1月。

大庭武年「小盗児市場の殺」『朱夏』(13) (特集 探偵小説のアジア体験) せらび書房、1999年4月。

岡田英樹『「満洲国」における中国文学の実態研究』昭和61年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書(課題番号60510240)、1987年3月。

岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、2000年3月。

岡部牧夫『満洲国』(講談社学術文庫1851) 講談社、2007年12月。

岡村敬二『満洲出版史』吉川弘文館、2012年12月。

岡本隆司『近代日本の中国観——石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』講談社、2018年7月。

小木田敏彦「田園風景の政治地理学——美意識における文化帝国主義」『人文・自然・人間科学研究』(30) 拓殖大学人文科学研究所編集委員会、2013年10月。

小倉和夫『日本の「世界化」と世界の「中国化」——日本人の中国観二千年を鳥瞰する』藤原書店、2019年1月。

小谷賢『日本軍のインテリジェンス——なぜ情報が活かされないのか』講談社、2007年4月。

小林英夫『近代日本と満鉄』吉川弘文館、2000年4月。

梶井佳広「イギリスからみた日本の満洲支配(1)——戦間期外交報告(Annual Report)を中心に」『立命館法学』(290) 立命館大学法学会、2003年4月。

門倉三能「満洲国の金鉱業」『日本鉱業会誌』49(578) 資源・素材学会、1933年4月。

金山泰志『明治期日本における民衆の中国観——教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して』芙蓉書房、2014年2月。

河崎キヌ子『満洲の歌と風土——与謝野寛・晶子合著『満蒙遊記』を訪ねて』おうふう、2006年3月。

河原典史・日比嘉高編『メディア——移民をつなぐ、移民がつなぐ 多視点から読み解く』（クロス文化学叢書2）クロスカルチャー出版、2016年2月。

川村湊『異郷の昭和文学——「満洲」と近代日本』岩波書店、1990年10月。

川村湊『文学から見る「満洲」——「五族協和」の夢と現実』（歴史文化ライブラリー58）吉川弘文館、2017年10月。

川村湊『満洲崩壊——「大東亜文学」と作家たち』文芸春秋、1997年8月。

何為民「近代日本の「支那」・「満蒙」呼称」『現代社会文化研究』（39）新潟大学大学院現代社会文化研究科、2007年7月。

何曉毅「「民謡」で見る最新中国像」『東亜経済研究』59(3) 山口大学東亜経済学会、2001年1月。

北野剛『満蒙をめぐる人びと』彩流社、2016年5月。

木村雅信「中国民謡素材に基づく作曲」『札幌大谷短期大学紀要』（35）札幌大谷短期大学、2004年3月。

五井信「表象される〈日本〉——雑誌『太陽』の「地理」欄1895-1899」『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』新曜社、2000年4月。

高紅梅『『東北文化月報』と満蒙文化協会——中国人の対日認識の視角から見る』富士ゼロックス小林節太郎記念基金、2008年3月。

高媛「観光の政治学——戦前・戦後における日本人の「満洲」観光」（博論）甲第19795号、東京大学大学院人文社会系研究科、2005年2月。

高媛「戦地から観光地へ——日露戦争前後の満洲旅行」『中国21』（29）愛知大学現代中国学会、2008年3月。

高媛「戦争が生み出した観光——日露戦争翌年における満洲修学旅行」『Journal of global media studies』（7）駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年9月。

高媛「観光・民俗・権力——近代満洲における「娘々祭」の変容」『旅の文化研究所研究報告=Bulletin of the Institute for the Culture of Travel』（25）旅の文化研究所「研究報告」編集委員会、2015年12月。

近藤春雄『大陸日本の文化構想』（満洲開拓文学選集18）ゆまに書房、2017年10月。

- 呉佩軍「『偽満洲国文芸大事記』について」『跨境——日本語文学研究』高麗大学校日本研究センター、2018年8月。
- 柴田天馬『聊齋志異研究』創元社、1953年11月。
- 植民地文化研究会編『「満洲国」文化細目』不二出版、2005年6月。
- 白木沢旭児[ほか]『日中戦争と長期建設』（科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書)北海道大学大学院文学研究科、2010年。
- 白戸健一郎「満洲電信電話株式会社の多言語放送政策」『マス・コミュニケーション研究』(82)日本マス・コミュニケーション学会、2013年1月。
- 銭鷗『日清戦争直後における対中国観及び日本の自己意識——『太陽』第一巻を通して』富士ゼロックス小林節太郎記念基金、1996年1月。
- 貴志俊彦・松重充浩・松村史紀『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年12月。
- 拓殖大学記念写真誌編集委員会編『右手に文化の炬をかかげ——図絵で見る紅陵の青史——拓殖大学創立100周年記念——明治33年から平成12年まで』拓殖大学記念写真誌編集委員会、2000年10月。
- 田坂文穂『旧制中等教育国語科教科書内容索引』教科書研究センター、1984年2月。
- 立花丈平『馬占山將軍伝——東洋のナポレオン』徳間書店、1990年11月。
- 千田九一「翻訳文学としての『聊齋志異』」『国文学解釈と鑑賞』18(9)至文堂、1953年9月。
- 張文宏「佐藤春夫における『聊齋志異』の翻訳・翻案の態度——芥川龍之介と太宰治との比較を通して」『皇学館論叢』44(6)皇学館大学人文学会、2011年12月。
- 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年9月。
- 鳥居龍蔵・鳥居きみ子『満蒙を再び探る』トクシマ・ドラゴン・ブック、2014年5月。
- 中園英助『スパイの世界』岩波書店、1992年4月。
- 中西輝政・小谷賢『インテリジェンスの20世紀——情報史から見た国際政治』千倉書房、2012年2月。
- 中見立夫「歴史のなかの「満洲」」『環』(10)藤原書店、2002年7月。
- 波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』NTT出版、2005年7月。
- 西田勝『近代日本と「満洲国」』植民地文化学会、2014年7月。
- 西原和海「田口稔への接近」『朱夏』(12)(特集 満洲の図書館とライブラリアン)せらび書房、1998年10月。
- 西原和海・川俣優編『満洲国の文化——中国東北のひとつの時代』せらび書房、2005年3月。
- 西原和海「大庭武年」『朱夏』(13)(特集 探偵小説のアジア体験)せらび書房、1999

年4月。

西孟利『満洲芸術壇の人々』曠陽社、1929年9月。

日本社会文学会編『近代日本と「偽満州国」』不二出版、1997年6月。

日本社会文学会編『植民地と文学』オリジン出版センター、1993年5月。

日本社会文学会地球交流局編『近代日本と「満州」』（第5回日中シンポジウム記録文集）日本社会文学会地球交流局、1996年12月。

野寄勉「小説家が好きな『聊斎志異』」『アジア遊学』（71）勉誠出版、2005年1月。

芳賀登[ほか]編『日本人物情報大系12（満洲編）』皓星社、1999年10月。

葉山英之『「満洲文学論」断章』三交社、2011年2月。

原山煌[ほか]『「満洲国」時代を中心とする「満蒙」関係刊行物の研究』平成13年度科学研究費補助金特定領域研究(A)(2)「東アジアの出版文化」研究成果中間報告書、2002年3月。

細川涼一「大庭武年雑記——旧満洲大連の探偵作家」『京都橘大学研究紀要』（33）京都橘大学研究紀要編集委員会、2006年1月。

増山賢治「コロムビア世界民俗音楽シリーズ『中国民謡と民族舞踊曲（中国民族楽団、中国歌舞団）』（XM-17-S 日本コロムビア 1967）の資料的価値——その収録曲と解説から看取されるもの」『愛知県立芸術大学紀要』（34）愛知県立芸術大学、2005年3月。

松重充浩「大連日本人社会における中国認識——総合雑誌『満蒙』を事例として」『21世紀の東アジアと歴史問題——思索と対話のための政治史論』法律文化社、2017年4月。

村松一弥「中国の民謡」『北斗』2(6) 中国文学会、1957年4月。

森島守人『陰謀・暗殺・軍刀——外交官の回想』岩波書店、1950年6月。

山本勇『青少年の移民——満蒙開拓青少年義勇軍』新風舎、2007年10月。

山本有造『「満洲国」の研究』緑蔭書房、1995年4月。

芳井研一『南満州鉄道沿線の社会変容』（新潟大学人文学部研究叢書9）知泉書館、2013年3月。

芳井研一「「満蒙」問題の現出と[トウ]索・索温沿線の社会変容」『環日本海経済年報』（14）新潟大学、2007年2月。

劉建輝「「満洲」幻想の成立とその射程」『アジア遊学』（44）勉誠出版、2002年10月。

李青「東北淪陥期文学の一側面——疑遅が描いた「満洲国」を中心に」『大谷学報』85(4) 大谷学会、2006年7月。

呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修『『満洲浪漫』研究』ゆまに書房、2003年1月。

呂順長「日本人から見た中国人の国民性」『四天王寺大学紀要』(49)四天王寺大学、2010年3月。

【日本語雑誌】（雑誌名かな順）

『開拓協和』（復刻版）不二出版、2015年9月。

『観光東亜』（復刻版）不二出版、2017年8月。

『芸文』（復刻版）ゆまに書房、2010年9月。

『新満洲』（復刻版）不二出版、1998年10月。

『拓け満蒙』（復刻版）不二出版、1998年4月—10月。

『満洲文芸年鑑』（復刻版）葦書房、1993年9月。

『満洲浪漫』（復刻版）ゆまに書房、2002年7月。

『満蒙』（『満蒙之文化』を含む）（復刻版）不二出版、1993年11月—2003年8月。

【中国語文献】（著者名アルファベット順）

柴红梅《大庭武年偵探小説と大連之关联——以《小盗儿市场杀人》为例》《学术交流》2010(6) 黑龙江省社会科学信息中心, 2010年6月。

柴红梅《都市空間と殖民体験——日本殖民时期大連都市空間中の日本偵探小説》《东北亞外語研究》2013(3) 大連外國語大學, 2013年12月。

大久保明男・岡田英樹・代珂《偽満洲國文學研究在日本》（偽満時期文學資料整理と研究/劉曉麗主編）北方文藝出版社, 2017年1月。

大内隆雄著・高静译《満洲文學二十年》（偽満時期文學資料整理と研究/劉曉麗主編）北方文藝出版社, 2017年1月。

何爽《偽満洲國戲劇中の殖民現代性景觀》《吉林廣播電視大學學報》2015(3) 吉林廣播電視大學, 2015年3月。

李故静《《聊齋志異》在日本的流變史》《戲劇之家》2016(22) 湖北省戲劇家協會, 2016年11月。

劉春英《“満洲”“新京”时期日語文學雜誌鉤沉》《日本學論壇》2007(4) 東北師範大學, 2007年12月。

劉春英・吳佩軍・馮雅《偽満洲國文藝大事記(上、下)》（偽満時期文學資料整理と研究/劉曉麗主編）北方文藝出版社, 2017年1月。

劉曉麗《異態時空中的精神世界——偽満洲國时期的文學》華東師範大學出版社, 2008

年9月。

刘晓丽·大久保明男《伪满洲国的文学杂志》(伪满时期文学资料整理与研究/刘晓丽主编)北方文艺出版社,2017年1月。

刘晓丽等《伪满洲国文学研究资料汇编》(伪满时期文学资料整理与研究/刘晓丽主编)北方文艺出版社,2017年1月。

田久川《简论大连地区反对日本殖民统治的诗词歌谣》《中日关系研究的新思考——中国东北与日本国际学术研讨会论文集》辽宁大学出版社,1993年2月。

王桂妹·何爽《伪满洲国时期的协和剧》《武汉大学学报》2013(5)武汉大学,2013年9月。

詹丽《伪满洲国通俗小说研究》(伪满时期文学资料整理与研究/刘晓丽主编)北方文艺出版社,2017年1月。

张明杰译《近代日本人中国游记》中华书局,2007年8月。

郑毅·李少鹏《近代日本社会“满蒙观”研究》吉林文史出版社,2018年4月。

周静《马占山在苏联及欧亚六国的活动考略》《世纪桥》2016(4)黑龙江省史志研究室,2016年4月。

初出一覧

- 序 章 書き下ろし
- 第一部 調査された満洲——「満洲国」成立前の歌謡、翻訳
- 第 1 章 「戦前戦時における中国民謡の機能——雑誌『満蒙』を中心に」
『名古屋大学人文学フォーラム』第 1 号、2018 年 3 月。
- 第 2 章 「柴田天馬と『聊斎志異』——天馬訳『聊斎志異』のルビと訳注に注目して」
『跨境』第 7 号、2018 年 12 月
- 第二部 宣伝された満洲——1930 年代の小説、戯曲
- 第 3 章 書き下ろし
- 第 4 章 「探偵創作から国策宣伝へ——大庭武年とその「満洲国」戯曲」
『名古屋大学国語国文学』第 111 号、2018 年 11 月
- 第三部 問題視された満洲——1940 年代の旅行記、同人雑記
- 第 5 章 書き下ろし
- 第 6 章 書き下ろし
- 結 章 書き下ろし

(投稿済みの論文を博論に収める際、一部加筆・修正を施した。)

謝辞

博士論文を提出するにあたって、本論文の完成にご指導やご協力を頂いた多くの方々に御礼を申し上げます。

まず、日本に来てから研究の面でも生活の面でもいつもお助け下さった日比嘉高先生に深く感謝いたします。研究上での先生の熱心なご指導があったからこそ、本論文を無事に仕上げることができました。また、同日本文化化学講座の飯田祐子先生をはじめ、多くの先生方から貴重なご意見を頂きましたことに、心より感謝いたします。殊に中国の劉春英先生、呉佩軍先生が本論文の執筆中に多くのアドバイスを下さったことには、感謝の意を申し上げます。

同研究室の仲間からも多くの助力を頂きました。特に、本論文のネイティブチェックを担当して下さった永井真平さん、藤田祐史さん、加島正浩さん、奥村華子さん、市川遥さんからは、たくさんのご助言を頂きました。心から感謝の意を申し上げます。

2014年10月から2018年3月にかけて「文部科学奨学金」を提供して下さった日本文部科学省にも御礼を申し上げます。

最後に、私の留学を応援してくれた家族に感謝します。特に生活的にも精神的にも支えてくれた両親には深く感謝しています。